

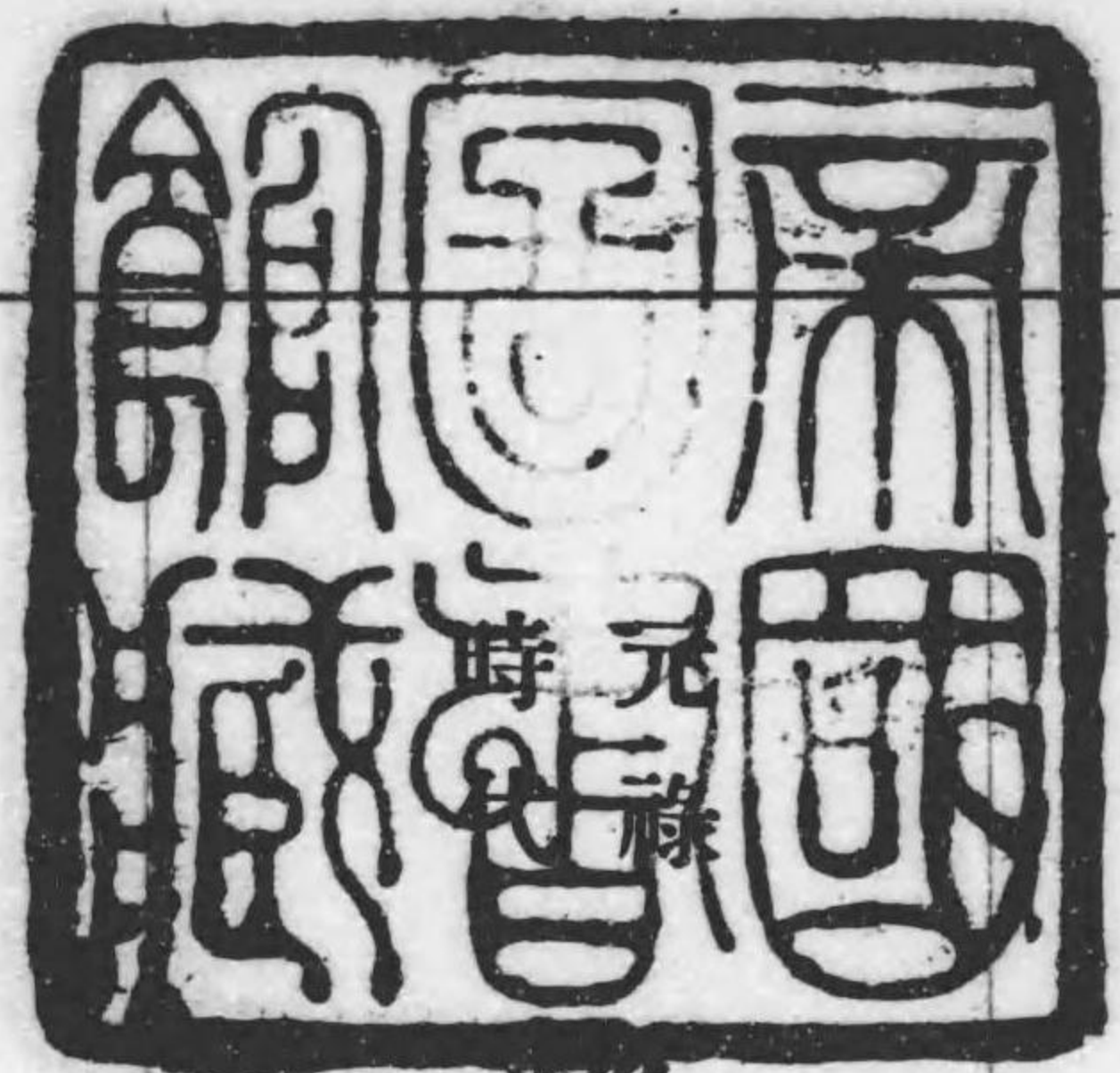
536

242



始





文學博士 上田萬年校訂

輕口はなし

東京 文憲堂書店

大正
15. 10. 21
内交



はしがき

一、題して元祿時代輕口ばなしといふと雖、本篇初に掲ぐる所の醒睡笑は元和年中の集、終に收むる所の福徳利は寶曆年中の編なれば、聊か妥當を缺く感なきにあらず、しかれども、これを徳川氏時代に於ける此種の文學の潮流にかんがみるに、その中心は正しく元祿天明の二時代に存するが故に、強て時の前後に拘泥せず、茲にはこれを一括したるなり、

一、元祿時代の輕口ばなしは、本篇收むる所の數種に限るべきにあらず、猶ほ他に有名なるものあり、有名なるものにも、予の見ざるも

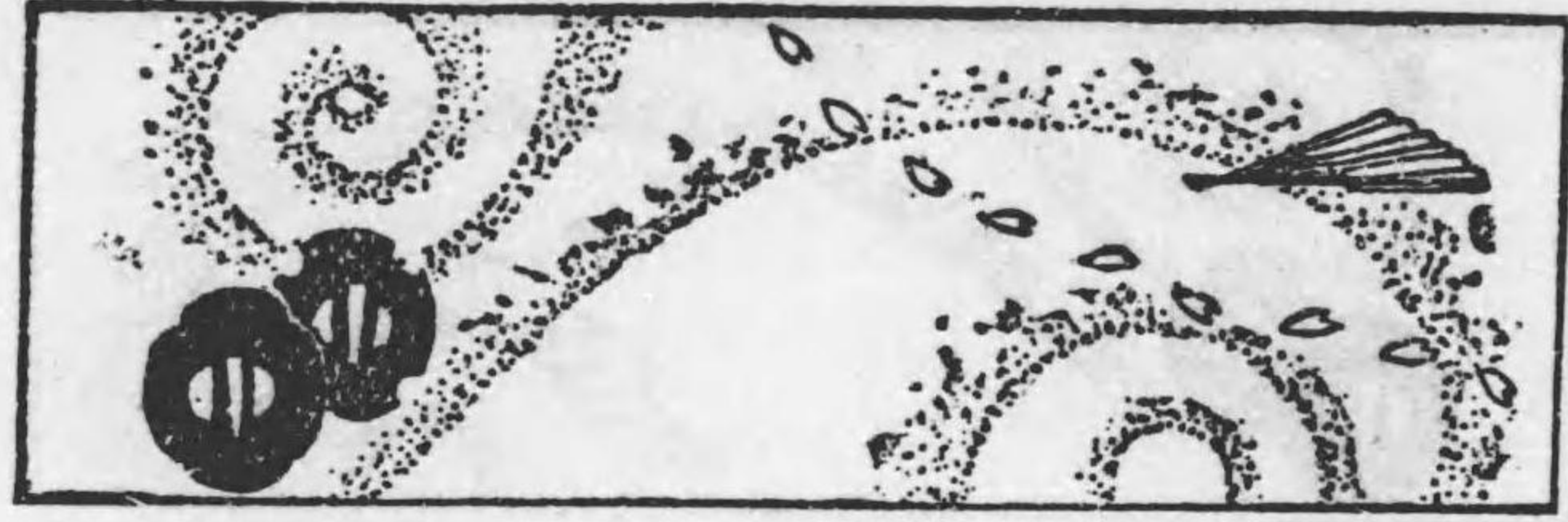
のもあり、予の見たるも抄出せざるものもあり、又予の知らざるものもあらむ、茲に掲ぐるは東京帝國大學本により、つれづれの折ふし、予が心のまゝに抄出したるものなり、

一、元祿時代の輕口ばなしは、猶ほ和歌に於ける萬葉時代の如きか、其質素なる點に於て、其勁健なる點に於て、其獨創的なる點に於て、萬葉時代の古今時代に於けるが如く、天明時代の輕口ばなしの、華奢なる點、精巧なる點、摸倣的なる點に最も酷肖す、

一、取捨宜しきを得ざるの責は、予の敢て辭せざるところ、殊に本文の昧裁は、必ずしも原書によらず、句讀假名遣送假名宛字等、又便宜これを改訂したり、しかも終始遂に改訂の實を擧ぐるを得ざりし

は、茲に豫め大方君子の寛恕を請ふ所なり、

上田萬年識



元祿時代 輕口はなし

目次

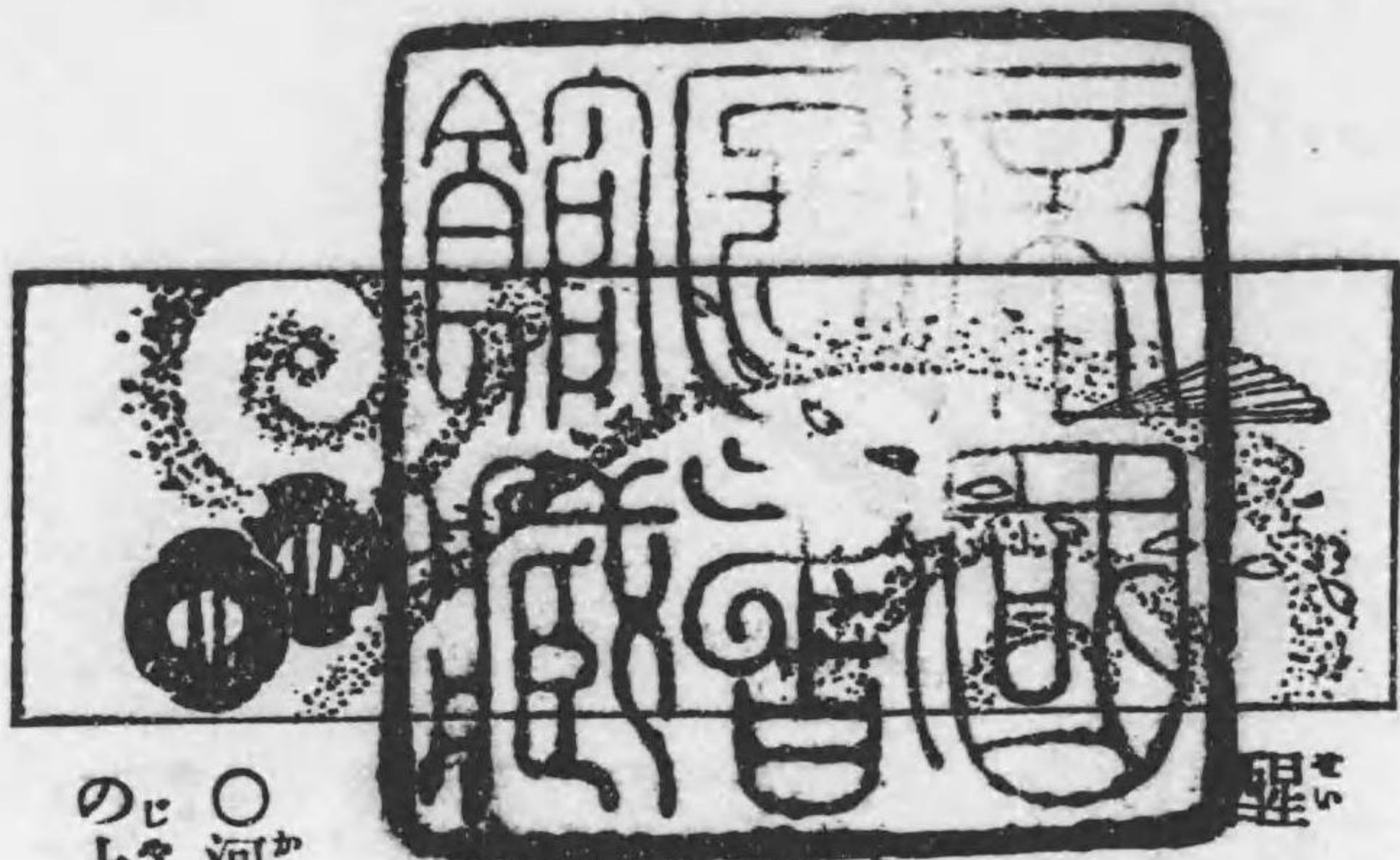
醒睡笑選……………	一頁
きのふはけふの物語選……………	五五
鹿の卷筆選……………	七七
輕口露がはなし選……………	八五
輕口あられ酒選……………	一一一



福祿壽選	二二五
輕口福德利選	一四九
以上	

二

醒睡笑選



醒
笑
選

醒睡笑序

ころはいつ、元和九癸亥の稔、天下泰平、人民豊樂の折から、策謀某、小僧の時よ
り耳にふれておもしろくをかしかりつる事を反故の端にとめ置たり、是年七十に
て誓願寺乾の隅に隠居し、安樂庵と云ふ柴の屏の明暮、心をやすむる日毎く、
こしかたしらせし筆の跡を見れば、おのづから睡をさましてわらふ、さるまゝに
や是を醒睡笑と名付、かたはらいたき草紙を八巻となして殘すのみ。

○河内の國に珍といふあり、大和に場といふあり、二人ながら兵法
の上手なりしが、ある時しあひをし、雙方片足おとしおとされ、既



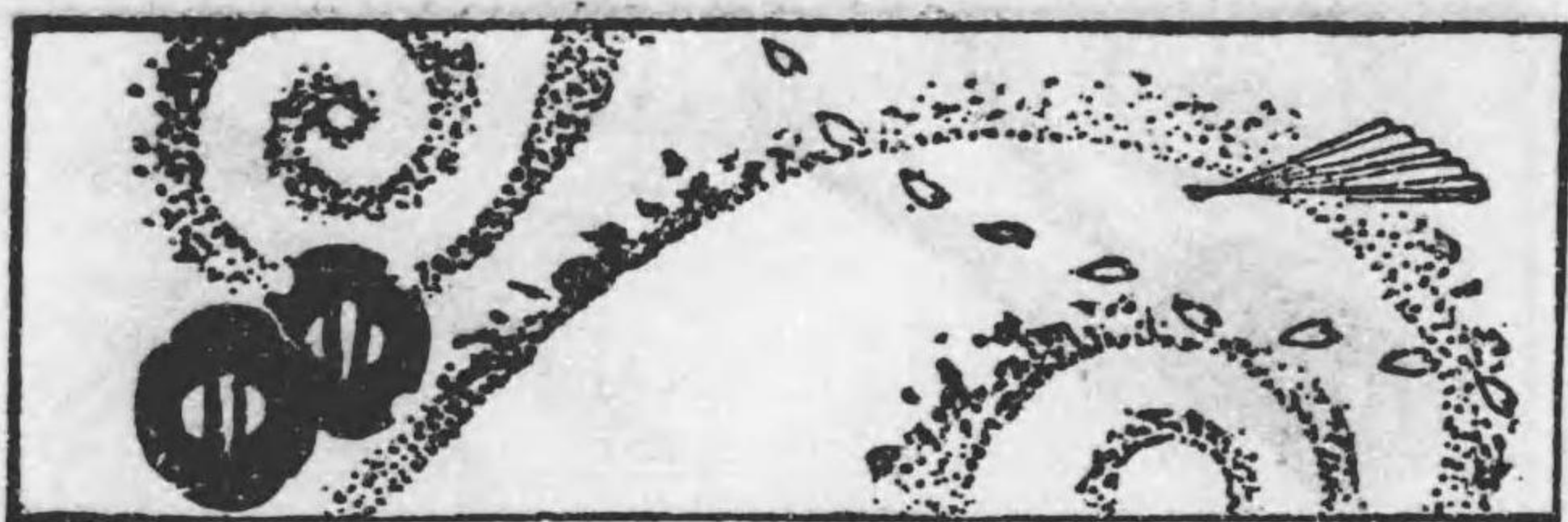
に死にのぞむ時、金瘡の上手とて来る、あまりあはてふためき、其
主^{ぬし}の足をばとりちがへ、我がを人に人のを我がにつぎかへた
り、さるまゝ一人は足ながくなり、一人は足みじかくなり、腰をひ
きしより、今もかゝるありきの人を、ちんばとはいふよし、

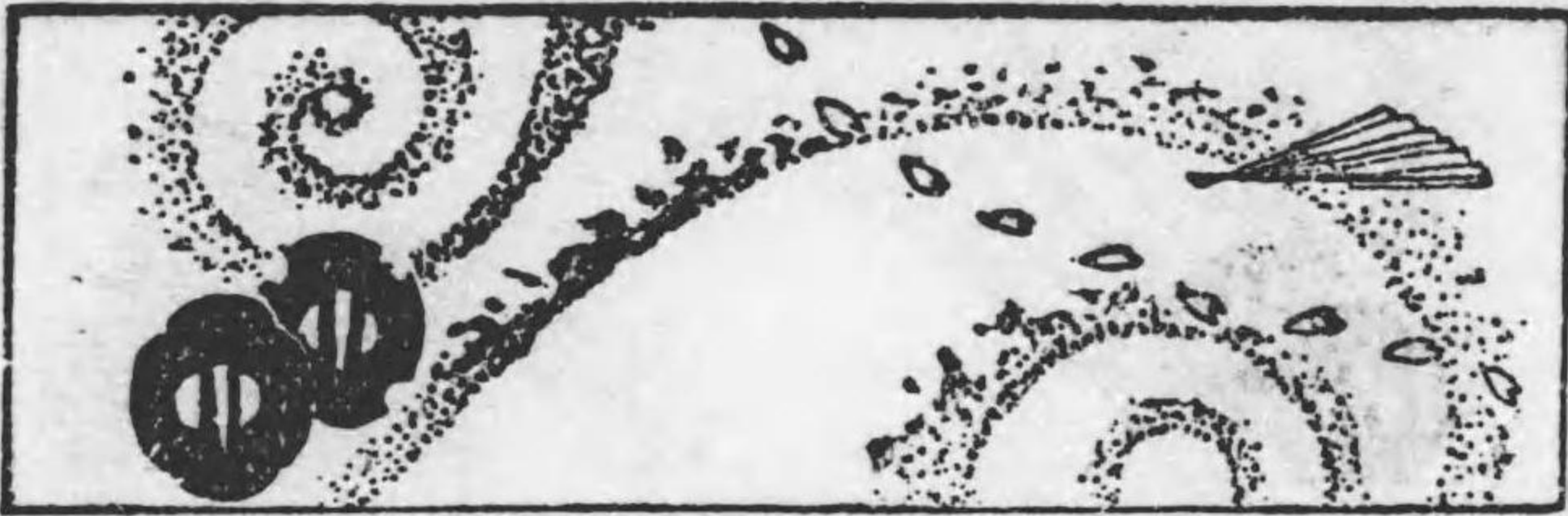
○仁物らしき男、枋の前後に鯛を入になひ、鯛は鯛はと賣りける
を、ある家のぬしよび入れて、けしからずさむき日也、まづちと火
にもあたり、茶をも飲みておとほりあれ、ちらと一目見しより、こ
れはたいならず、古へはさもありし御身なりしが、思はずも世にお
ちふれて、かゝるわざをもし給ふにやと、涙をこぼし候ひぬといひ
ければ、しづかに火にあたり、茶など飲みて、たちさまに大なる鯛

を一つ亭主がまへにさし出したり、こはなにとしたる事と斟酌しけ
れば、いやけふは心ざす先祖の頼朝の日なり、

○壁に耳ありといふ事をわすれ、そんでうそれは、なか／＼人では
ないといひ出しけるが、うしろを見れば其仁居たり、肝をけして唯
活佛ちやといふ、そしらるゝ人ほむるを聞てよろこび、そのまゝ阿
彌陀の印を結ひたることよ、

○小性を置きて、試みに始て茶をひかする、事の外あらし、是はと
叱りたる時、ちと座をしさり、それはまづあらびきて御座ると、扱々
あのは日本に又ふたりともあるまいうつけやとあれば、又きつと
手をつき、いや日本も廣う御座る程に、お尋ねならば又も御座らう、



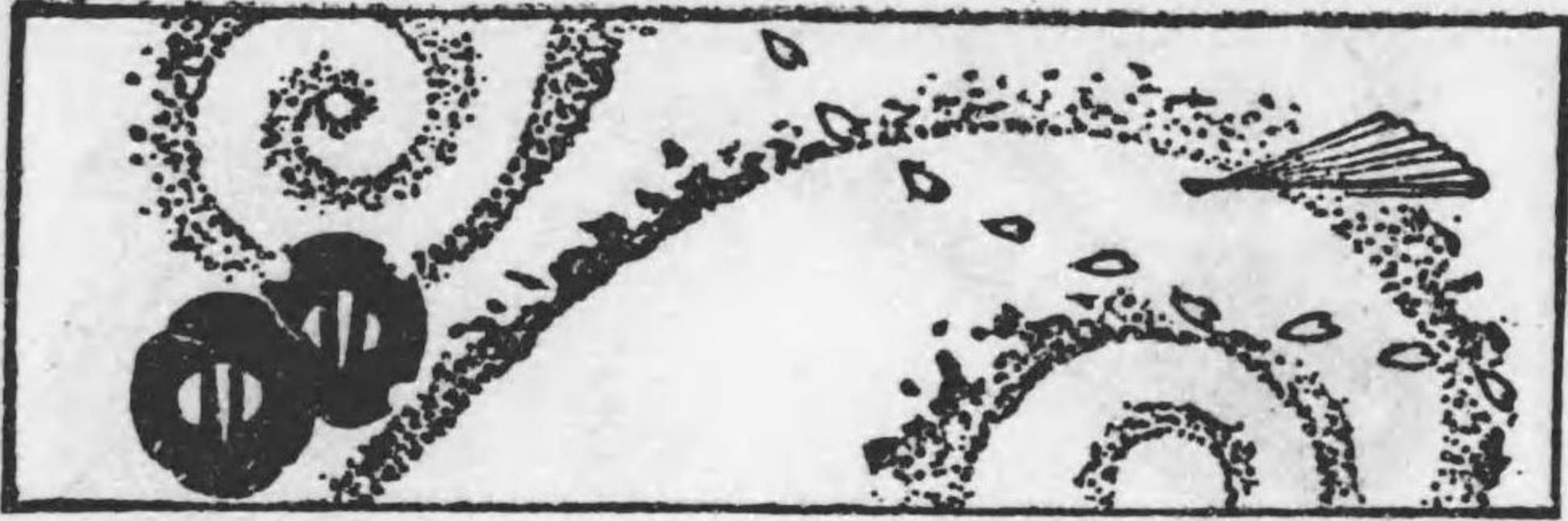


○日本一の鈍なる弟子が、師の噂をいふやう、坊主のいつもいろくの事をいふて叱らるゝ中に、近頃聞えぬ無理を三ついはるゝ、一つは、先おのれを、なんぼうの辛苦にて人にないたと仰ある、我が犬の子にてもあらばこそ、性得人の子にてあるを、人にないたとは何事ぞや、二つは、いか程氣をつくして經を教へし、その恩を仇に思ふとの折檻、これもいはるゝ處道理にてはあれども、その習ひよみたる經を、一字もわれがおぼえばこそ、みな忘れ果てたるまゝ、少しも恩とは思はぬなり、三つは、寺屋敷資財雜具殘なく汝に取するはと仰あれども、これ又少しも恩とは思はぬ、むづかしいに取ておかへりあらうまでよ、さあれば三つなから一つも坊主の道理はない、



○或寺の院主に知音の人ありて、門前までおとづれられけるを、弟子出て見つけ、そのまゝ方丈に行き、ものゝ御出にて候といふ、院主大に腹をたて、ものとは誰が事ぞ、さてもうつけをつくす奴かな、いざわれ出て見んとて、窓よりそと覗き、つくく見るに顔ばかり覚え、つひに名をばうち忘れ、弟子に向ひ、まことにものぢやよといへり、

○悲體戒雷震といふ觀音經の文を、なにとしても忘るれば、師匠あまりの事に、弟子が額をつかまへて、この事を思ひ出よと教ふるに、又忘れておのが額をとらへ、こゝかいらいしんとよみし事申しふりたる鈍副子や、

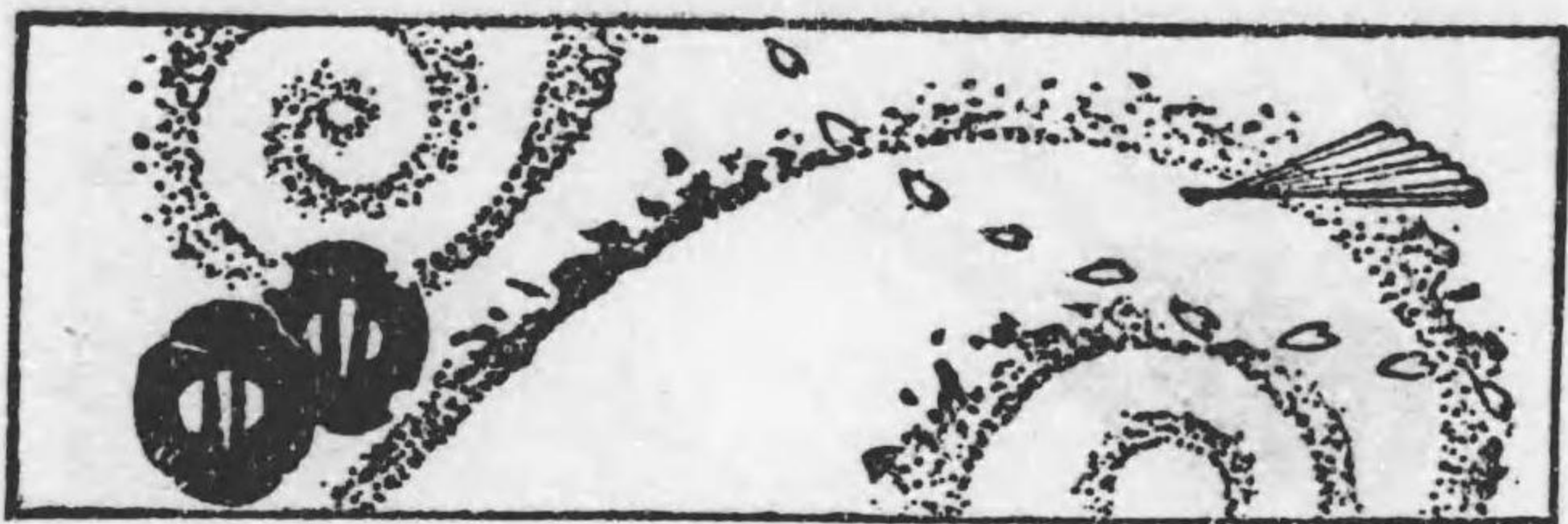


○鈍なる男兵庫の町を通りけるに、黒犬の大なるが出てしたゝかに
 臍を喰ひけり、あら悲やといふ聲聞つけ、犬の主あひちらしぬ、此
 男詮方なく、無心なる事にもひつつけ、尾が崎まて来たりしが、
 黒さゑのこのあるを見つけ、ひたもの蹴踏けるを、主人出合、これ
 はくせもの也、何の咎にさやうにはするぞ、打て擲けと、人あつま
 りたれば、まつびら御免候へ、兵庫で足を黒犬にくらはれたる、無
 念の腹をゐんとて蹴た、

○石州銀山にての事どとよ、常によりあひぬる者一人入道し、法名
 を芝恩とつく、友達鈍なる男ありて、ついに芝恩といふ名をわすれ
 お禪門々々と呼ぶ、禪門腹立ししをんといふ草あり、見られた事は

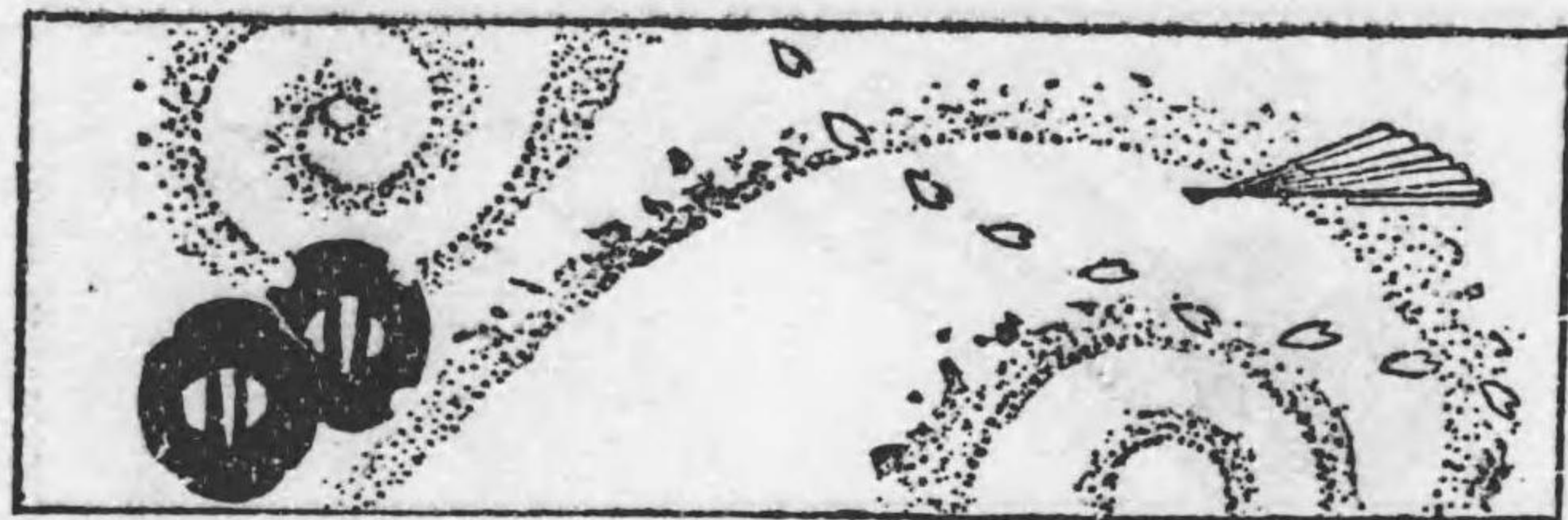


なさか、いやまだ見ぬと、さらば見せんとてつれだち、ある人の前
 裁へ行き、しをんとしやかと花ささてありしを、これはしをん、こ
 れはしやがというて教へ、此しをんの花の名をよく覺ゆれば我が名
 と同じことぞ、忘れ賜ふなといひふくめてかへりぬ、件の男領掌
 しけるが、又二三日ありて後寄りあひし時、しをんをばうち忘れ、
 さてもしやが、あひさしいと申したり、
 ○小僧あり、小夜ふけて長棹をもち、庭をあなたこなたとふりまは
 る、坊主是を見付、其は何事をするぞと問ふ、空の星がほしさに打
 落さんとすれどもあちぬと、扱々鈍なる奴や、それほど作がなうて
 なる物か、そこでは棹かどくまい、屋根へあがれ、



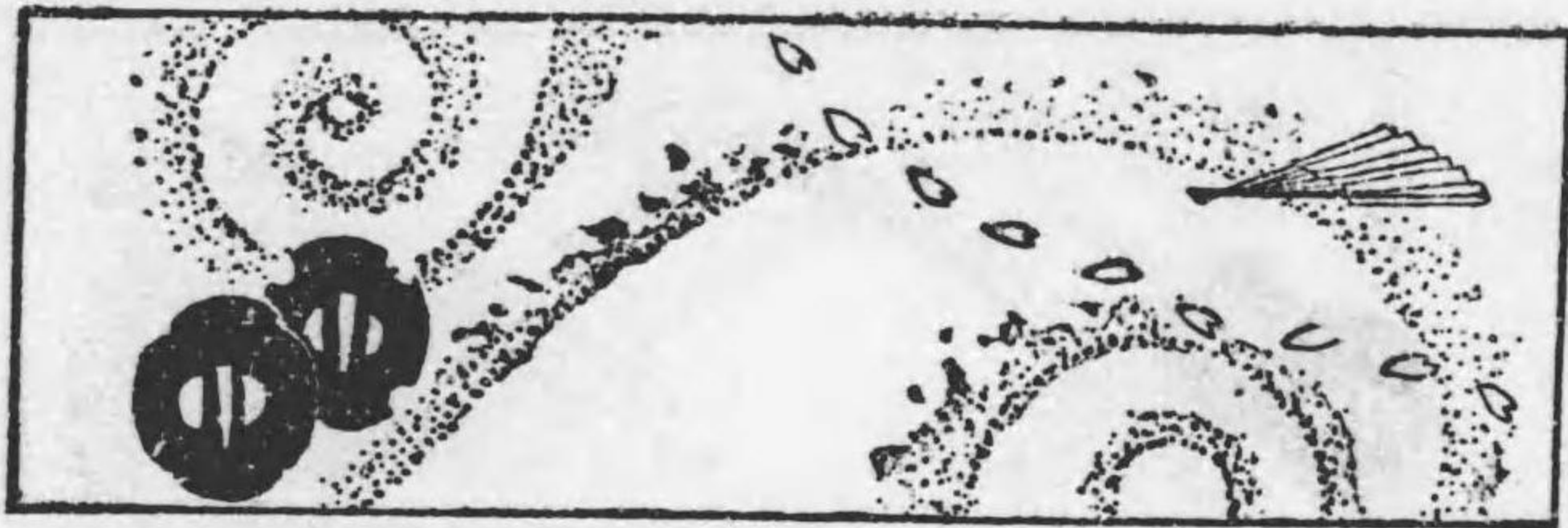
○二番にかまへられたる聳殿、舅の方へ始て行かるゝに、友の教へけるやう、初對面に物をいはずばうつけとこそ思ふべけれ、相構へ何とぞ時宜をてかせよ、心得たりと諾ひつるが、一言の挨拶もなし、既に座を立たんとする時、聳殿がいひ出すやう、なにと舅殿は一抱ほどある嶋を御覽じた事はありないか、いや見たる事はありない、私も見まゐらせぬと、いはぬはいふにまざるとやらん、

○大客のあらんよしを舅聞つれ、俄に造作をする故、材木をえらばず、節穴おほしとて氣の毒に思へり、彼娘夫に教ふるやう、見舞にゆかれんに、節穴の事を申されば、短冊や色紙にて張りたまへといはれよ、尤に思ひ行く、案のごとくの時宜なりき、舅大によろ



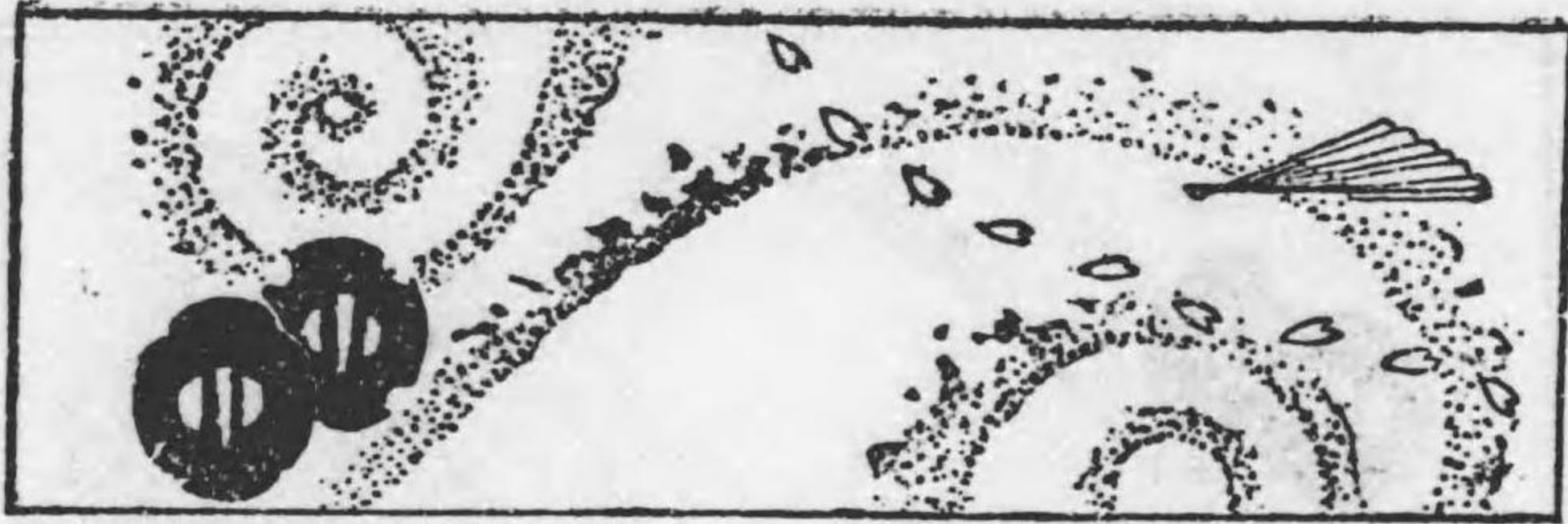
こび、此年月聳をうつけといひつるはうそやと、その後舅に腫物出來たり、又見舞に行き、見まゐらして、若し藥を知り給はぬや、唯腫物の上に短冊色紙をおしたまへと、

○京にてくちわき白き男、ちと出家をなぶり、理屈につめてあそびたやと思ひつゝ、さかしき人に向ひ問ふ、やすき事なり教へむ、なむぢ沙門にあふた時、お僧はいづくへといふべし、さだめて風にまかせてといはれんずる、其時風なき時はいかんといへ、やかて閉口すべし、後ある朝東寺の門前にて出家に行あふ、お僧はいづくへと問ふ、僧の返事に、たちうりの勘介が所へ齋に行く、なにぞ用ありや、男とつてはぐれ、あらお僧は風にはおまかせないの、



○越中に井見の庄殿といふ大名あり、世にすぐれたるうつけなりし、母儀常にくやみ歎給ひしが、ある時の見參に、笑止やそなたを内の者あなどり、何事もいひたさまにいふて、道なき作法と聞く、ちと折ふしは齒をもぬき、折檻もあらば、さほどまではあるまじき物をと教訓あれば、心得たりと諾ひ、是非ともに一はぬかん物をとたくまれし、去程に入朔の禮とて諸侍出仕あり、家郎の人申様、今日よの御祝義千秋萬歳、ことに天氣能くといはふなかばに彼大名何と御祝義天氣もよしと、さう云ひたさまには云はせまいぞ、

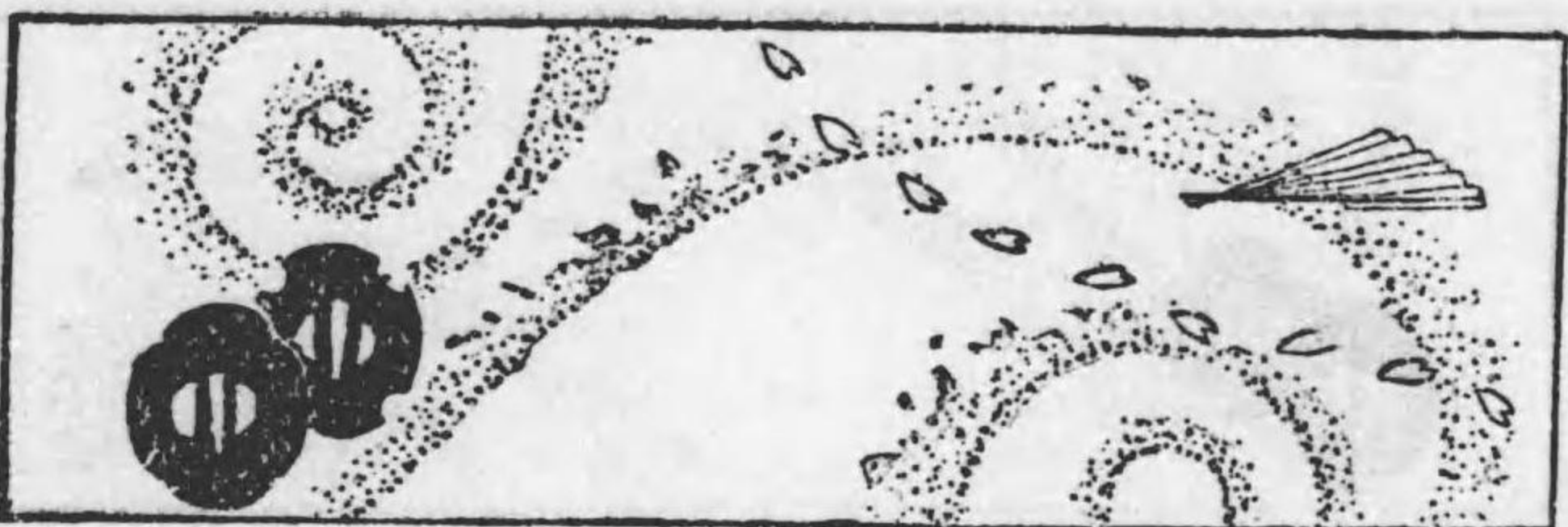
○わかき男の智入するといふに知音の者異見し、かまへて時宜を出かせ、心得たるよしにて行きしが、一圓言の葉なし、あまり本意な



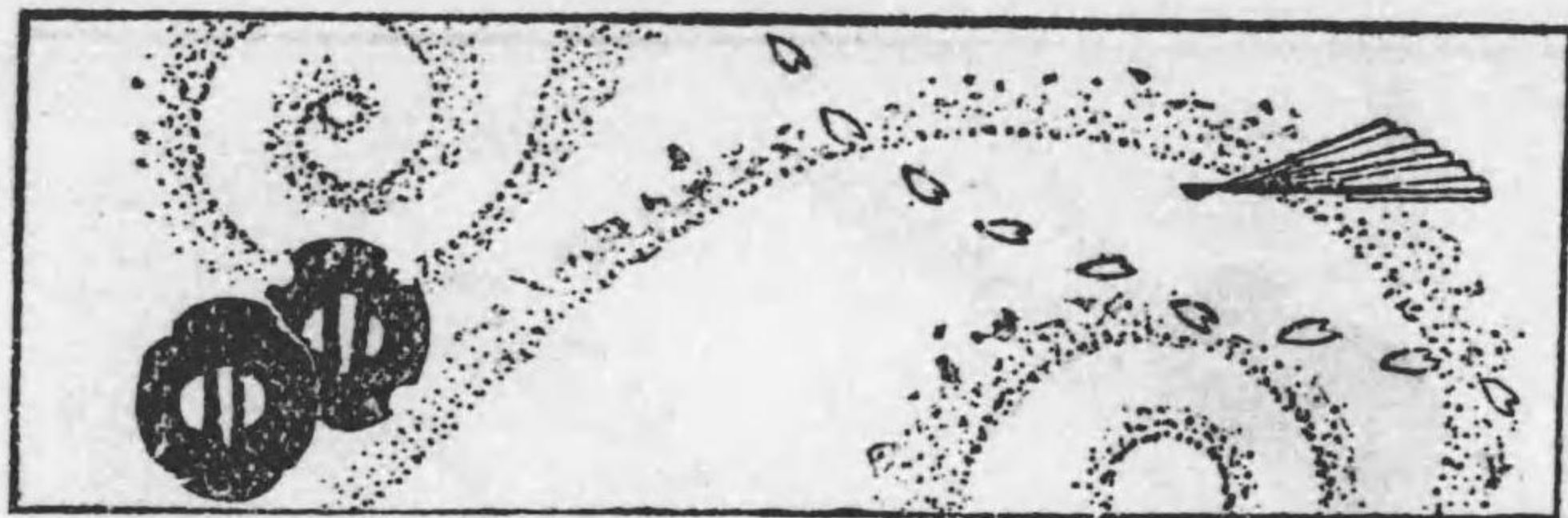
く思ひ、立さまに手をきつとつき、此中柱は、こなたので御座あるか、どれからまゐりたるぞ、

○大般若を轉讀の施主あり、かたちばかりは出家の身、よむべきあてはなけれど、いかやうにも座をはり布施を得たき望あるゆゑ、法衣をまとひ膝を組み、人々大般若波羅密多と高聲によめば、經をひつけおなじ調子にあげ、大たんな三藏ほつしめが、ようない物をもてきておいて、人に難義をかくるはやと、いへとも人はきかなんだげな、

○博奕にうちまけ詮方なき者、冬の暮髪を剃りて法師となり、法花宗の寺に行、座敷の掃除をも仕候はんといふ時、經をはおぼえたる



やと問はれ、やうくの事とこたふ、さらばまづおきても見よとあり
 けり、其晩景檀那のもとより使者來り、明日は親の年忌なる條、僧衆
 十人にて一部經をつとめ給へとなり、彼あたらし坊主、終夜工夫す
 るに經を讀むへきやうなし、我わかき時藥屋に奉公し藥種の名をお
 ほえたり、これにて筭をあはせんとおもひ、既に妙法蓮華經と始り
 ける時、その儘彼人つくる、桔梗人參續斷白朮干姜木香白芷黃蓮
 といひけるを、藥屋の亭主聽聞して、あら有がたや、われくが賣
 り買ふ藥種は、みな法華經の肝文にてあるよ、
 ○けしからず物毎に祝ふ者ありて、與三郎といふ中間に、大晦日の
 晩いひをしへけるは、今夜はつねよりとく宿にかへり休み明日は早



く起きて來り門をたけ、内よりたそやと問ふ時、福の神にて候と
 こたへよ、すなはち戸をあけて呼入んと、懇にいひふくめて後亭
 主は心にかけ、鶏のなくと同やうにおきて、門にまちわけり、あん
 のごとく戸がたたく、誰くと問ふ、いや與三郎とこたふが無與、
 やうくながら門をあけて入り、そこもと火をともし、若水を汲み、
 かんを据うれども亭主顔のさま悪くて、さらに物いはず、中間不審
 におもひ、つくく思案し居て、よひに教へし福の神をうちわすれ、
 やうく酒をのむころにおもひ出し仰天し膳をあげ座敷を立ちさま
 に、さらば福の神と御座ある、おいとまをしまゐらするといふ
 た、



○陸奥の者を中間に置たり、亭主大晦日に、明日早朝には何事をも祝言計云ふべし。あやまつて不吉の儀いはぬやうにとぞ教へける、件の男手水をつかひさし、餅ぶんだしなされよ、焼き申さうといふ、亭主大に腹を立て、いろりのきはにありし木をうちつけたり、中間かさねて爰な旦那の、なげさしなざるはの、

○人にすぐれて物祝ふ侍、今夜の夢に、梟が家の内へ飛入ると見たはとあれば、被官の候てそれは目出たし、鬼は外へふくろは内へと申ならはして候ほどにといへば、侍大に悦喜し、小袖を一重つかはしけり、如何にも鈍なる傍輩を見、我れにも夢物語せられよかし、氣にあふやうにいふて、小袖をとらん物をとちもひひ



つるが、彼主人ある朝、又此ゆふべ我があたま落るくと夢見たはとかたるに、彼鈍なる男ふと出て、それこそ見出た、まさ夢くとぞ申ける、

○鍛冶屋の長佐といひて西洞院にありし、物祝ふ事人に過たり、年の暮に孫の七八なるを近づけ、元日に我が顔を見、日本のかなとは、みな爺のかなとぞと云へとねんごろにをしへし、あくる朝、やれ松千代昨日の事はと問へば日本のかなしみはみな爺のかなしみやといへり、

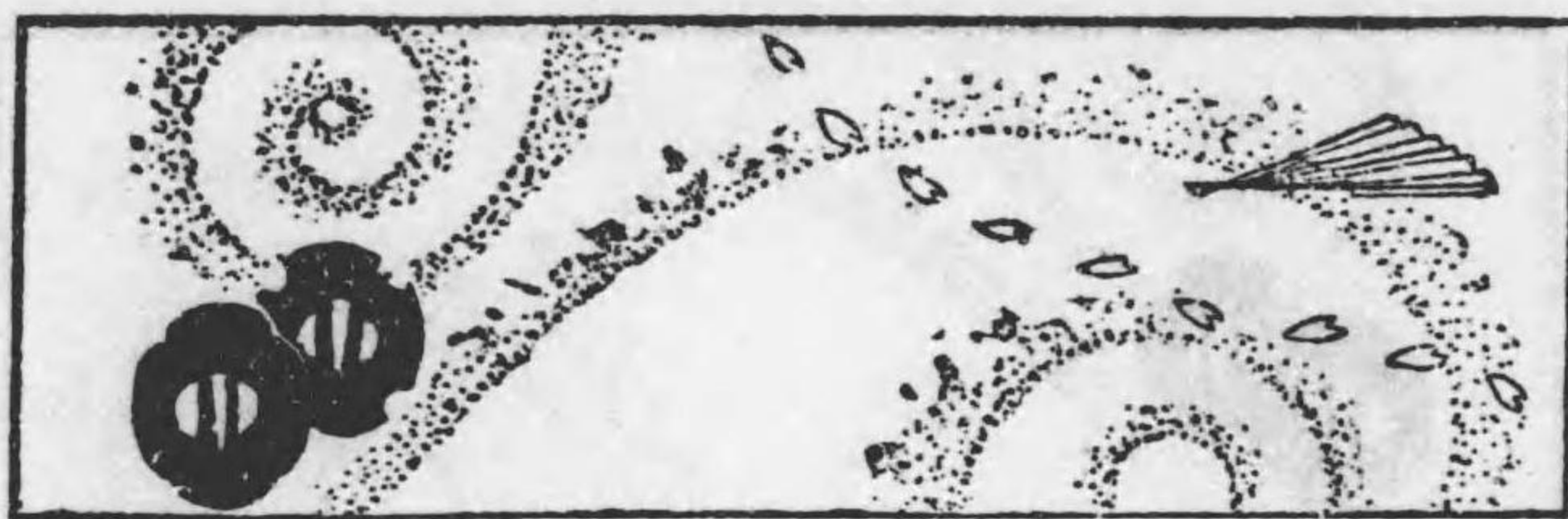
○豊前の國の大守長岡越中守殿、京より壁ぬりの上手を一人つれて下向あり、過分に知行をも給りしかば、仕合比類なし、とても義



に名字を下され、名をつけ替度旨懇に申しければ、心得たり、一段望神妙也、かくこそあるべけれつけてやらんとて、寸苴蕪の朝臣饒次下地壁右衛門と、奇妙々々、

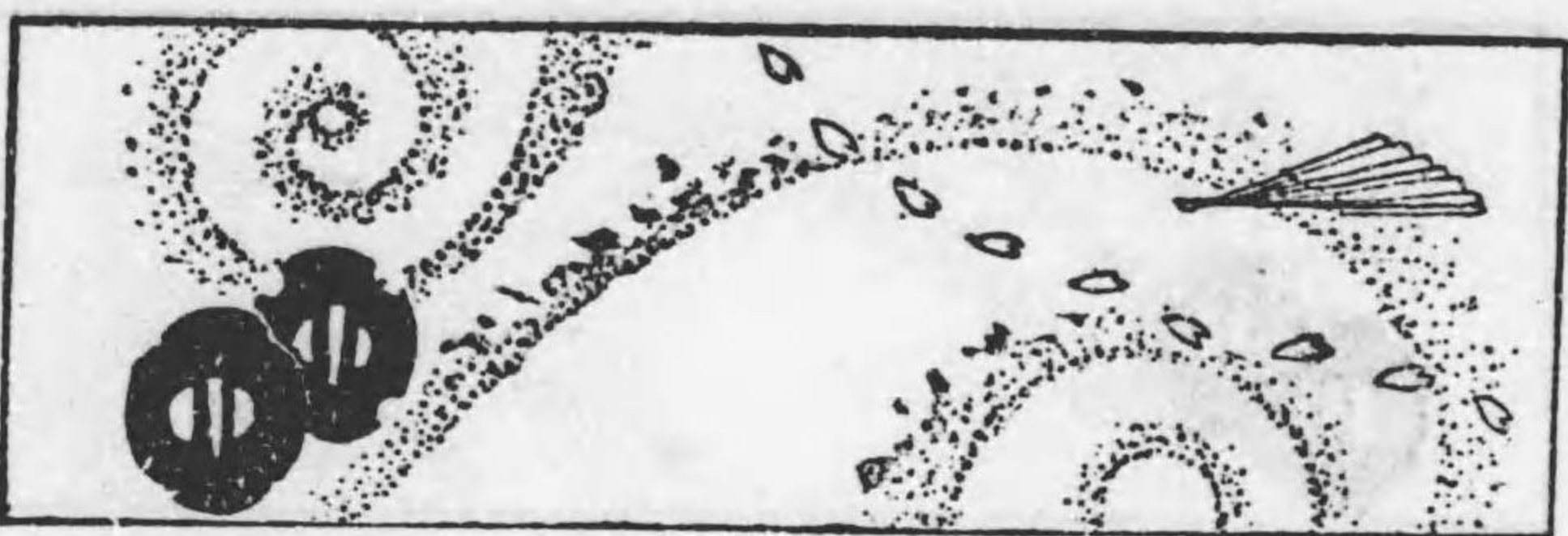
○人ありて沙門の家に入、法跡して後、戒名をつけんことをこふ、住寺の僧問ふ、なんぢが心にのぞめる意旨は無さかや、たゞ私のねがひには、ねうだうとつきたう御座ある、そもなにといふ仔細ぞや、さん候我が親は法華宗にて候、又母は淨土宗にてありし程に、ねう法蓮華經のねうの字と、なまいだうのだうの字をとりあはせてねうだうと、

●かたのごとく人のもてはやす侍ありしが、いろはより外には假



名がきの文をさへ讀むことなし、ある時地下の人参りて我が名を替へたきよし望みければ、例のいろはを傍におきていひやうえと附けうかや、いや、それならばろひやうえとや附けん、いや、はひやうえ、にひやうえ、ほひやうえ、とつくれども、いや、たゞ今少しながら、はねた名を附けたう御座あると申したれば、さらばへとち左衛門と附けうすといへり、

○禪門になりたる者にむかひ、名をば道見といふべし、人ありてよみを問はし、道はみち見はみると讀むと答へよ、かしこまりて候、ありがたし、見るといふ物はそのまゝ、鹿角菜に似たる物の事て御さあるほどに、中々忘れは仕まいといひしに、ある人そちが名は道は

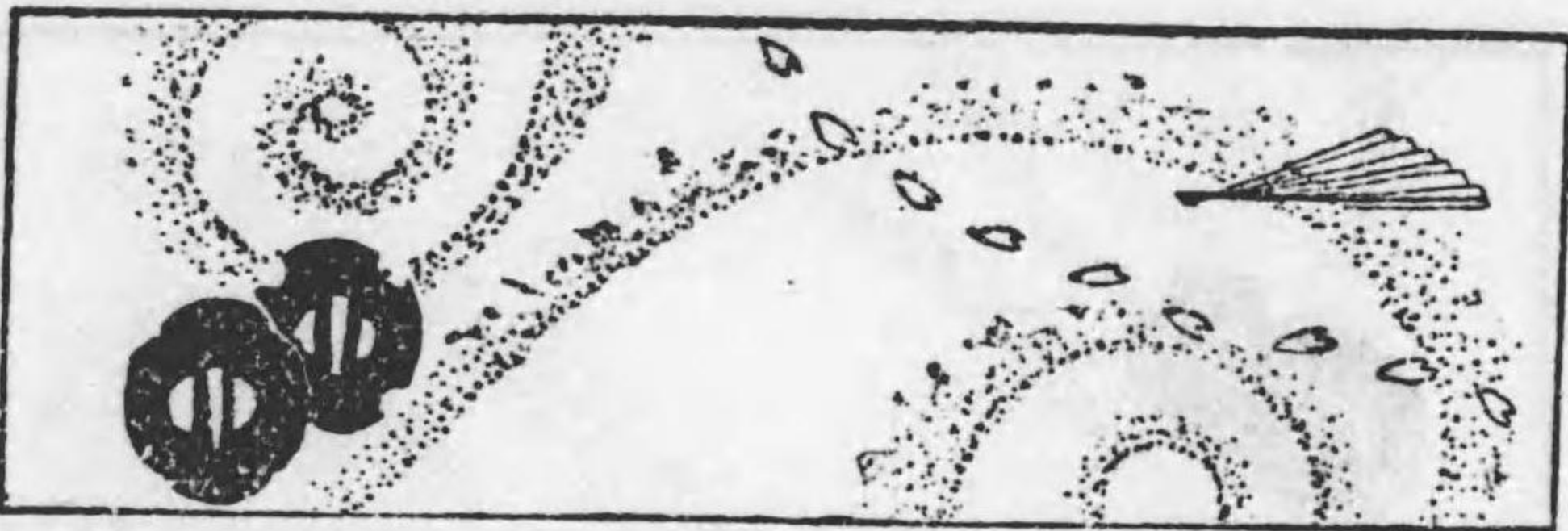


みちであらうず、見はと問へば見はひじき、
 ●形ことに瘠黒みてわたらせたまふ大名有しか、近習の侍にむかはせたまひ、手が顔が猿に似たと入みないふと聞いたが、まことか、うそか、侍うけたまはりて、これは勿躰なき御説に候、たれやの人さやうの事をば申上げるぞ、世上にはたゞ猿が顔が殿様に似たところ申候へ、大名聞給ひてゆゝしくも申したり、さこそは侍らずとていさゝかも憤りなかりしは、下劣の申ならばす大名は大耳なれや、

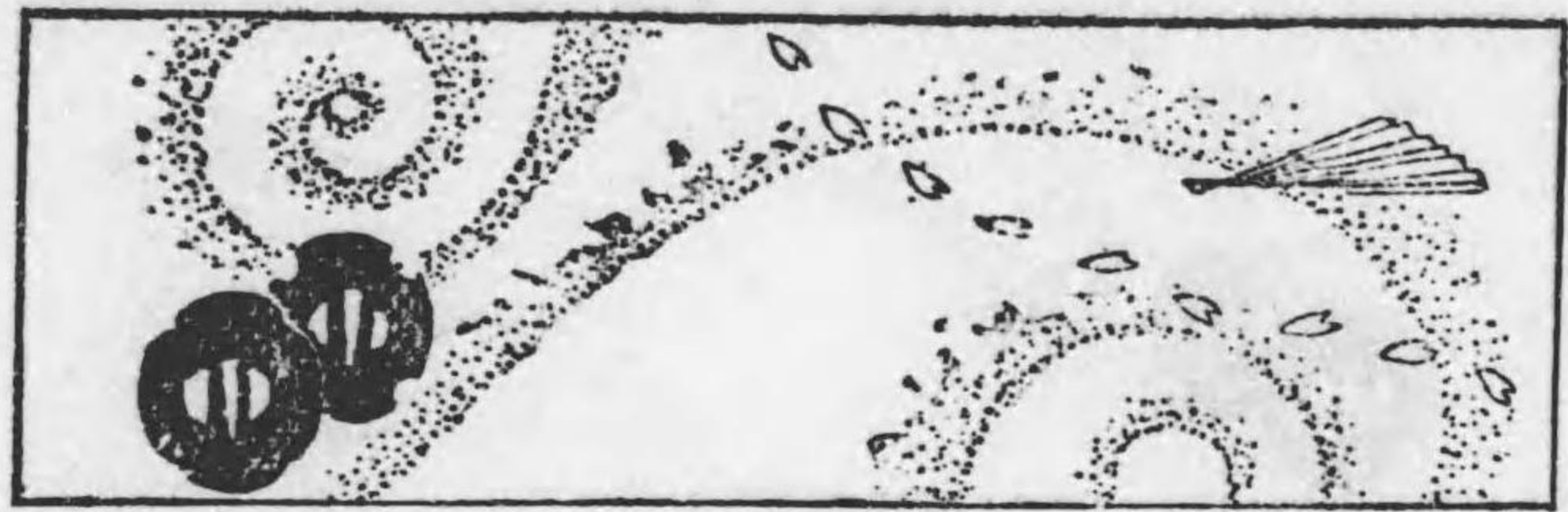
●腑のぬけたる仁に蝦をふるまひけるが、赤きを見てこれはひまれつきか、又は朱にてぬりたる物かと問ふ、生得は色が青けれど、釜に



て煎りて赤うなるといふを、合點しおけり、ある侍の馬にのりたる先へ、二間まなかの柄の朱鍵二十本許もちたる中間どものはしるを見、手を打つて、さても世はひろし、奇特なる事やと感ずる、なにをそなたは感ずるやと問ひたれば、其事よ、いまの鍵の柄の色は火をたいて蒸したもののじゃが、あれほど長い鍋がようあつた事やと、
 ◎美濃国立政寺の老僧に天瑞といふありき、始て京へ上らんと用意するを見、人指南するやう、京は物のそらねをいふ處ぞ、たとへば一錢に賣るべきものをば十錢といふ、其心得をしたがよいと教へたり、それていこの事をばぬかるまいぞと諾がひ、やう／＼都にのぼり祇園あたりにて、餅を出したる棚により、此餅いくらと問ふ、一つ一文

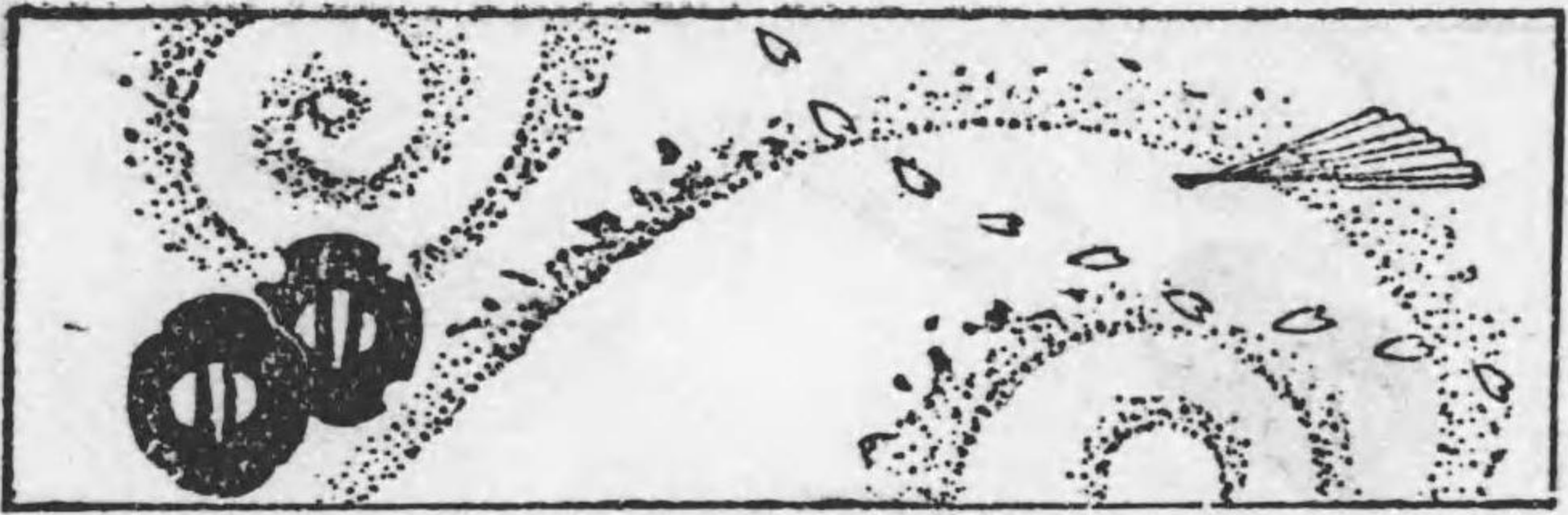


といふ、天瑞ちくく合點し、一文とはそらねじや、たゞ食はう、
 ○藤五郎とてござかしき者と、専十郎とてうつけと、ともに田舎の
 者、在京するに同宿なり、二人つれだち講堂の風呂に入らんとす、
 藤五郎此ほど専十郎がうつけををかく見つけ、さいはひの事や、
 小風呂にてあたまをはらんとたくみかまへて、専十郎、京の習に風
 呂に入者は、かならずあたまをはるぞ、腹をたつるを田舎人といふ、
 はられてもこらゆるが都人ぞといひをしへ、小風呂にとまひ入り、
 おもふさま目と鼻のあひだをはりけり、専十郎いふ、藤五郎はやく
 はせたはと、沙汰するなくとて又一つはりてけり、藤五郎又くは
 せたはと、専十郎おもふ。わればかりはられてかへらんは本意なし



と案じ、老人のよぼくと入者をまちて、おづく一つはりたれ
 ば、彼相手大に腹を立ち、いづくのうつけめぞ、是非はりかへさん
 とわめく時、専十郎いふやう、藤五郎いかい田舎者があるは、初心も
 のじや、

○或人錢をうづむ時、かまへて人の目には蛇に見えて、我が見る時
 計錢になれよといふを、内の者聞居て錢をほりてとりかへ、蛇を入
 れておきけり、件の亭主後に掘りて見れば、蛇有り、やれおれじや、
 やれ見忘れたかと幾度もなのりつるこそ聞事なれ、
 ○おり湯に入たる者いふ、此湯あつくてたまらず、かうの物をはやく
 もちきたれ、なんの用にと問へば、飯のあつい時、かうの物にて



まはせばぬるうなるほどに、

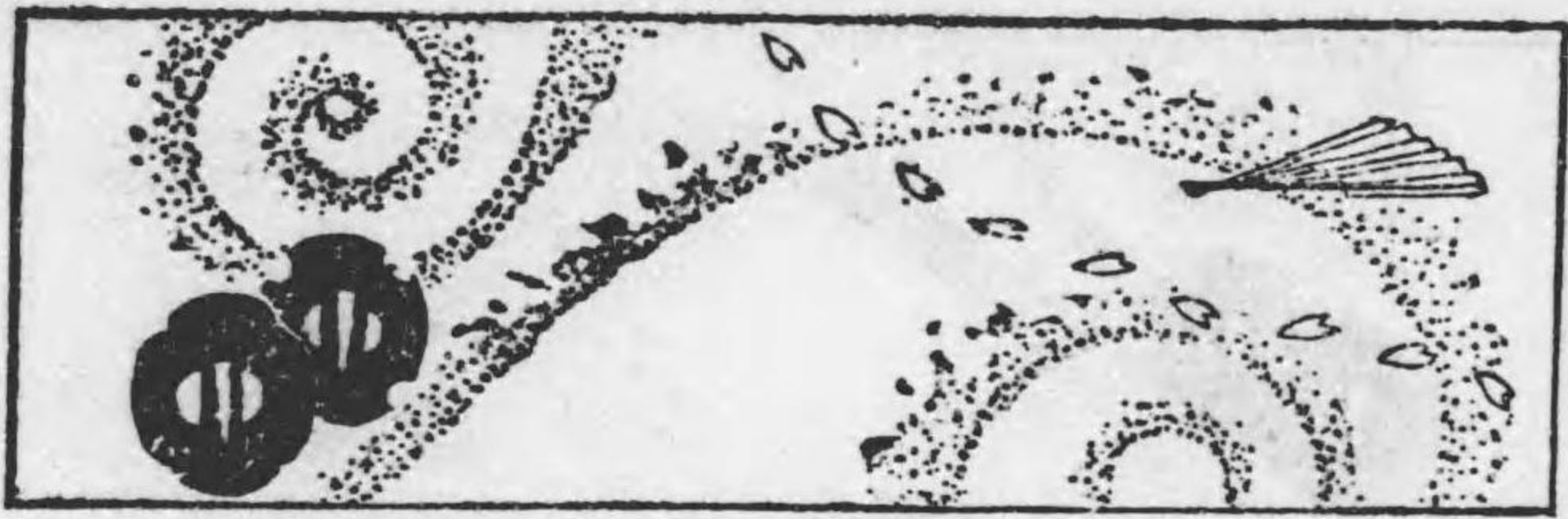
○ちと利口になき廿あまりの物領あり、父と連だち外面に出て遊覽す、折ふし頃は五月のすゑ澤邊に眞薦しげりあひたるを見、親じや人、此ちまさの木に實はいづるかやと、

○わきに出る大夫樂屋にて、物をたづねまはる風情あり、人みな不審し、なにが見えぬぞ、ともくたづね見んといへども、いやちとものごと秘して言はず、ありありてのち、唯今爰におきたるえぼしがないと、そちがあたまにきてゐるはとわらふ、時にそとさぐり見て實にせんようもない所にあつたよ、

○龜はいかほどいくる物ぞ、萬年いくるといふ、分別ありがほの人、

龜の子をとらへて、今から飼うて見ん物と言ふ、かたはらの者あざわらつて、命は槿花の露のごとし、たとひ長壽をたもつも百歳をいはず、萬年の命をなんととして試みんやといへば、げにもわるう思案したよと、

○道行ぶりにむかふより來る者を見れば、百八の珠數をくびにかけ、高野笠の様なるをきてあゆむ者あり、うつけものこれを見つけ、手をうつてかんずる、そなたがきたる笠は事の外大や、なにとしてそのじゆずをばうなじにかけられたと問ふ、いやこれはまづ珠數を首にかけて後に笠をきて候といふたれば、とかく物をばさかいてはと、○さるかしこき人、數奇に行路地へ入たれば、植ゑた竹の先をつゝ

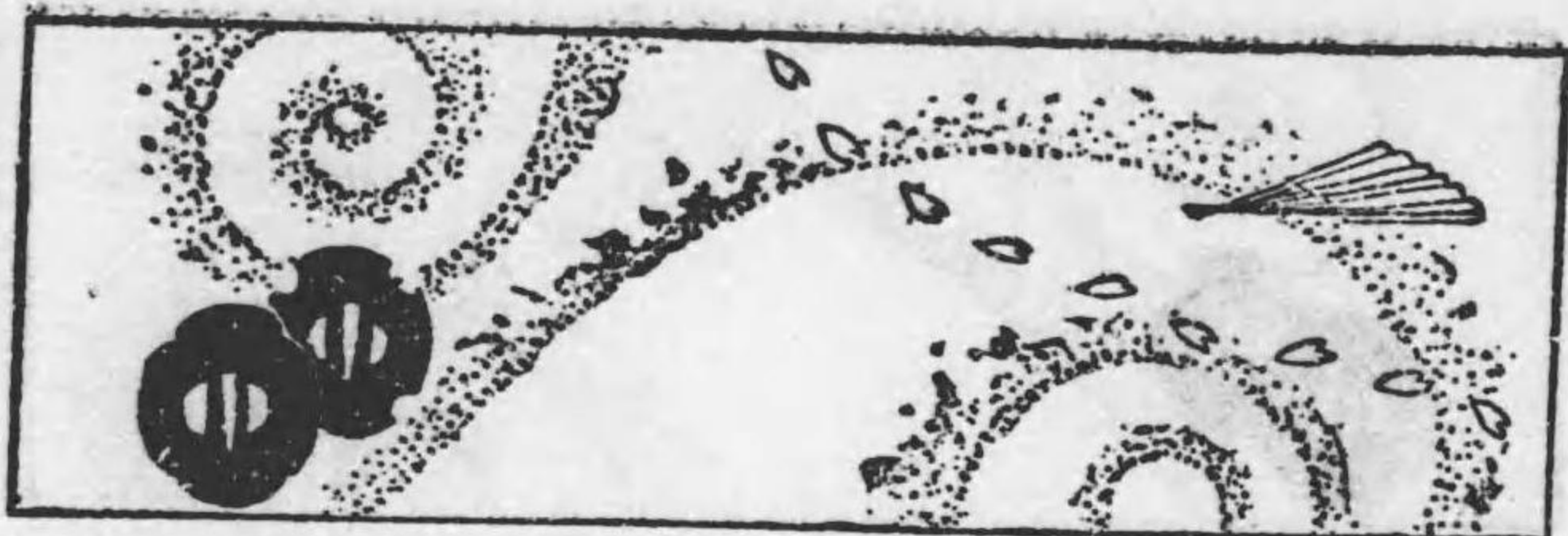




みたるが何本もあり、つくく見てあら奇特やくくと感ずる、相容ふしんに思ひ、何事やらんと問うたれば、其事よ、あれほどながい竹のさきへかゝる階子のあつたが不思議じや、

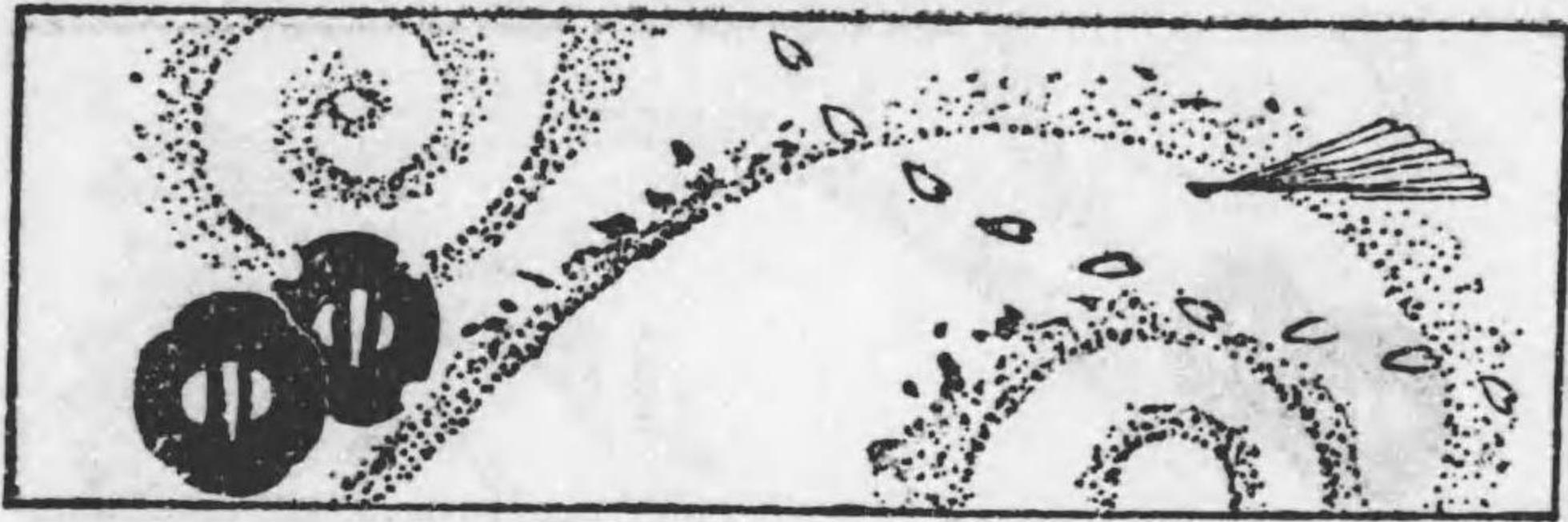
○十人許つれだちて北野へ夜ぶかに参詣しけり、廿五日のぐんじゆなれば、推しおされ下向する道すがら夜もほのかにあけぬ、友達の中に一人腰のまはりを見れば、脇指のさやばかりに刀をそへてさしたり、こは何としたぞといふにさもをつぶし、さやをぬき吹いて見つ、たゝいて見つすれどもなし、揚句にいふ事は、おれなればこそさやをとられぬ、

○ちとたくらだのありしが、人にむかひて、われは日本一の事をた



くみ出いたはといふ、何事をかと問ふ、さればよ白にて米を搗くを見るに、勿論したへさがる杵はやくにたつが、上へあがる杵がいたづらなり、所詮上にも白をかいさまにつり、米をいれて搗かば雨ともに米しろみ、杵のあげさげそつになるまいと思案したりといひはてぬに、さてつりさげたる白に米の入れやうはと問へば、まことに其思案はせなんだよ、

○石州に板持といふ侍あり、馬にのり坂をのぼりける時、胸懸ひたものさがれば、鞍と馬のかしらとの間大に延びたり、やれ勿怪が出来たとよばりける、郎等ども何事やと尋ねれば俄に馬の首が長うなつたはと、

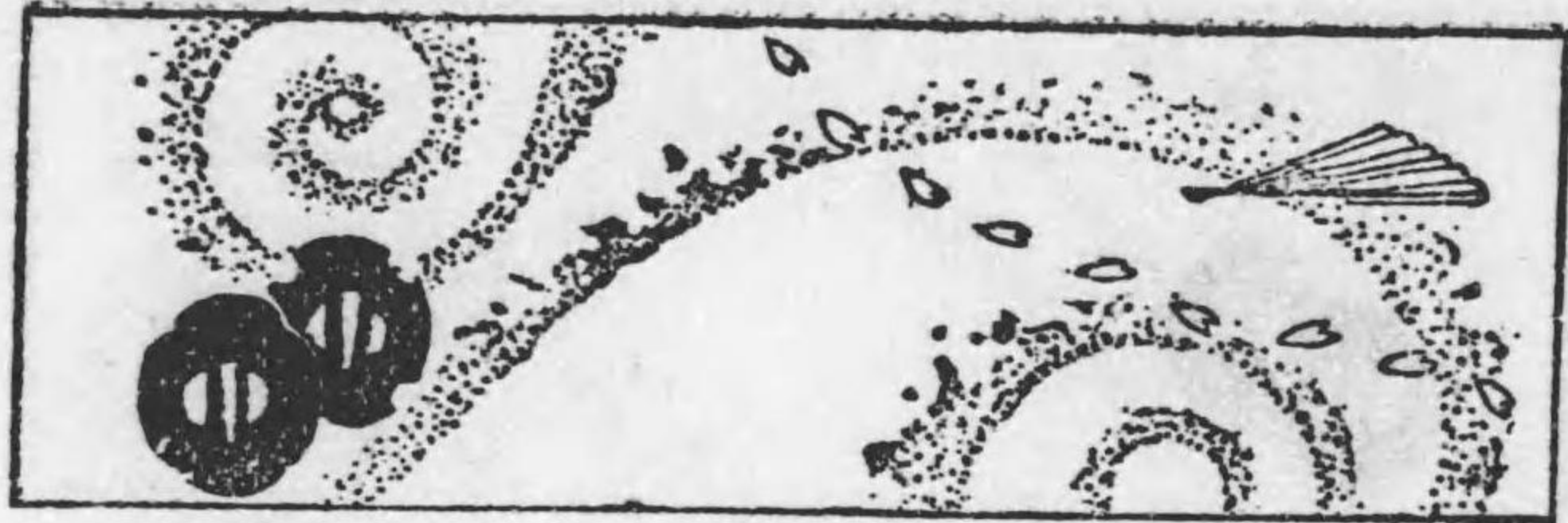


○同板持かたへ客あり、家のおとなの若狭守出合て座敷に請じ、主人は他行に候と、もてなしよきにあひはからふなかば、ふと障子をあけみづから頬をたゝいて、若狭よく、われは留守の分ぞと、
、とらへて置かんやうもあるまい、
○ある者餽餽の出たる席に、かたのごとくたまはり、揚句にいふ、方々にて實ばかりを下されるれども、終に此花を見た事は御座ない、こなたにならではあるまい、とても思出に見参らせたいといふ、何事をいふぞやと問へば、誰も知りて申すはうどんげのはなと、
○岩千代とて十四五にてうつけたる子あり、門より走來り、かゝよく錢をひろふたといふ、母がようひろふた其錢はどこにあるぞ、

いやひろふことはひろふたが又おとしたは、

○ある寺の住持弟子にいひつけぬるやう、客あらんたび、わすれざれ、まづ盃を出しては愚僧が手の置處を見よ、額にあらば上の酒、胸をさすらば中の酒、膝をたゝかば下の酒、此掟をむく事なかれと示す、一度や二度こそあらめ、人皆後は見しりたりしに、させらぬ檀那参詣する、例のごとく酒を一つ申せやとて膝をたゝさしかば、だんな手をつきて、とても御酒をたまはらば、額をなてゝくだされいてと、

○客來るに亭主出て、飯はあれども麥飯じやほどにいやてあらうずといふ、我れは生得むぎ飯が好きじや、麥飯ならば三里も行きてく





はうといふ、さらばとてふるまひけり、又ある時件の人來る、そちは麥飯ずきぢやほどに、米の飯はあれども出さぬといふ、いや米の飯ならば五里行かうとて、又食うた、

●雨ふる日のさびしさに、よしある方に尋ね行き、上戸の二人よりあひ、しゆくはなしても、時すぐれど、さらに盃の樽もなければ、客やうすを見さりいふ、貴所の酒でも我酒でもなうて大酒がしてあそびたいのと、

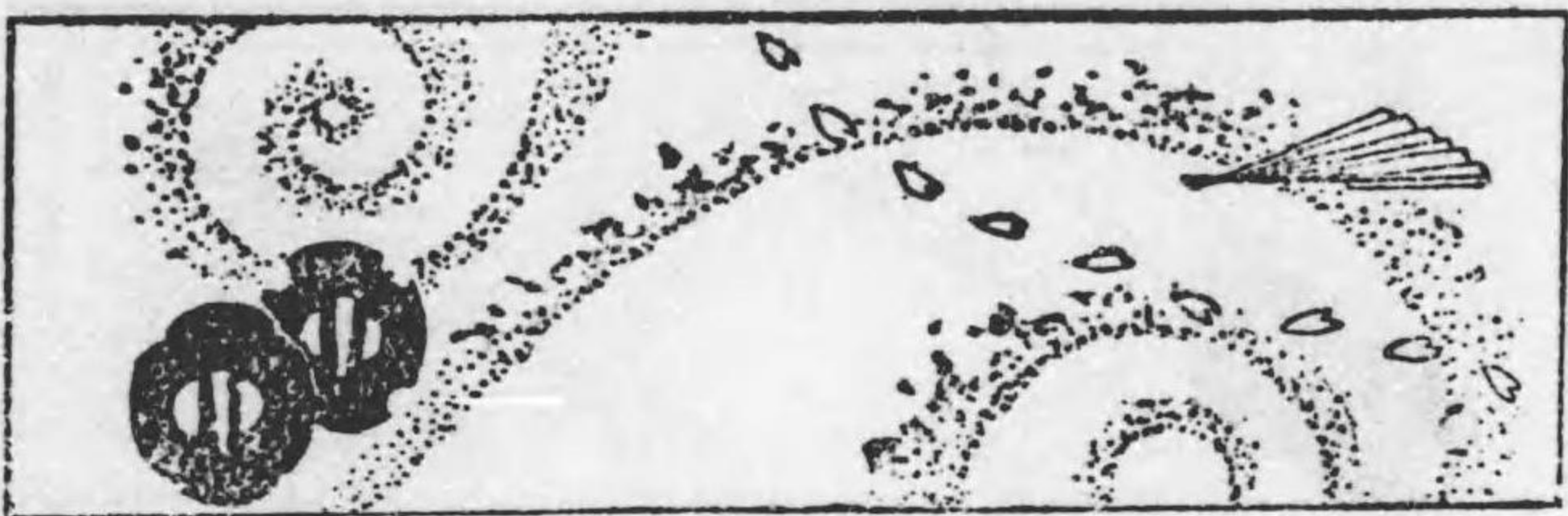
○我等は雜炊嫌なりと常にいふ者あり、晩がた雜炊半へ來る、ちと申さんずれど、あきらひなるまゝ、是非なしとあれば、なにと此雜炊に胡椒はいらぬか、いやいらぬ、それならばちとたへうと、



○ぬからぬ顔したる男、大名のもとへ參る、何とて久しく見えなんだぞ、手をついて、此一兩月癩癩氣に取紛不參仕候と申上て、友達と座を出るに、そちは咳氣をこそわづらひつれ、ありのまゝ申さずしていらぬ病の名をいひつる事よ、いや咳氣は初心に誰も知りたり、ちとこはしててんかんといはいては、

○古道三洛中歩行の折節、ある棚のかたはらに青磁の香爐おもはしきあり、立寄り見てうつけたるふりに、此かうろんいくらと問はれし、内よりは何とはねても銀子二枚と、

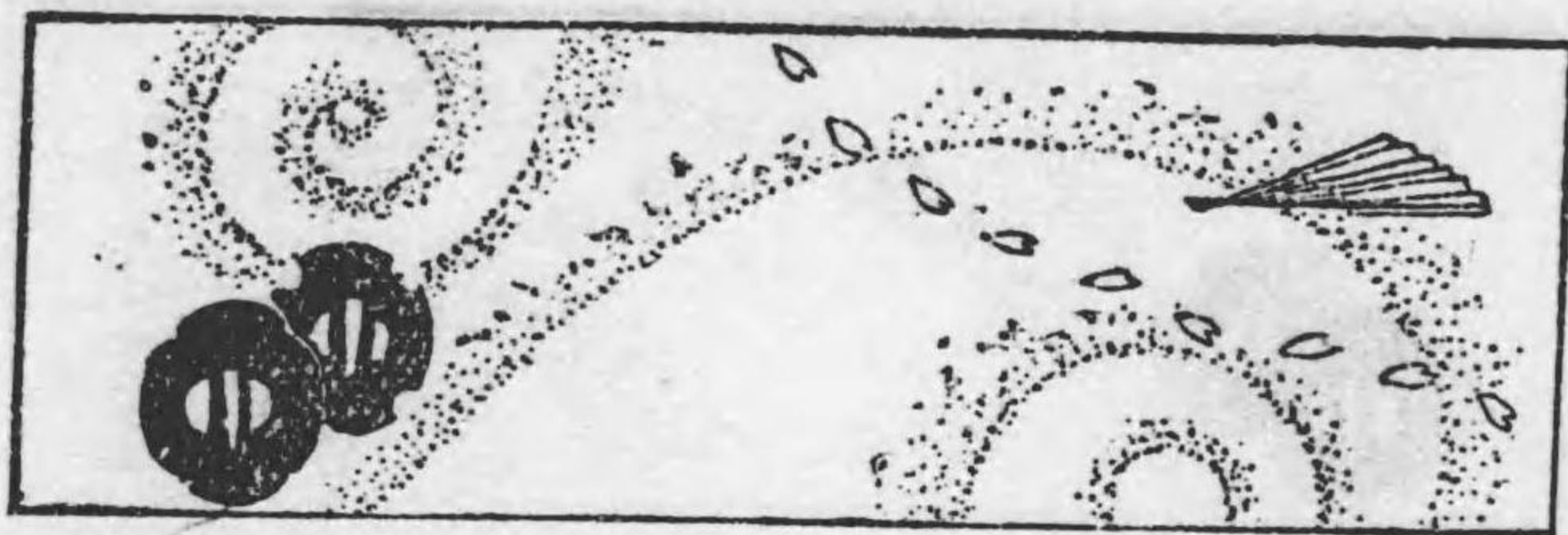
●和泉國に鹽穴といふ侍あり、馬上より錢のおちたるありと見付、馬をとめ中間にあれなる物をとりに來れと、中間とりあげ、これは柿



の帯で御座あると、われも柿の帯とは見たよ、されども馬がおそるほどに、それにとらせた、

○ある僧小者を一人つれて銭湯に行き、帯解さふためきて頭巾かつぎながら小風呂に入りぬ、常に何事も利口をいふがにくさに、小者も見ぬふりし、二風呂めに頭巾をとりたまはてといひければ、さわがぬていに、あたまをさぐりて、もはやとらうかなと、

○目醫者あり、其身の目はくさりてゐながら、目藥は天下第一也と自慢し、一度させばかすみはるゝ、二度させば管も切るとなど廣言せしを、扱そなた目は何とてなほらぬ、されば藥妙なればこそ、頬先にてとゞめたれ、さなくば願までもくさりなんと、



○老父あり、唯さへかすむ目もとの暮がたに、二階よりありんとする、下にむすこの居けるを客人かとおもひ、ひたものいんぎんに請じけり、後に私で候と申せば、そちとは始よりわれも知りたれど、我がやうなる苦界しらずには、ちと仕付を教へんとて、それにいふたよと、

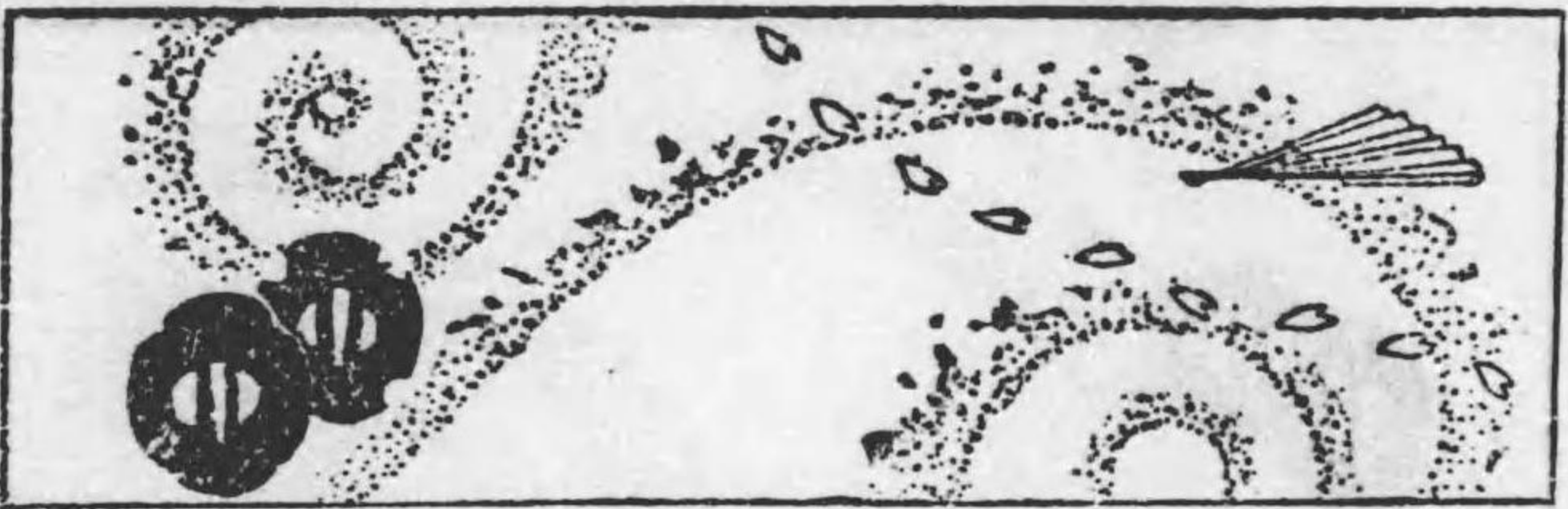
○花見の興のかへるさも黄昏時になりぬ、道のほとりに人のたちたるすがたありければ、あたまを下げ手を合せて禮をする、つれの者、あれは石塔なりといへば、彼人いふ、當世はあれていの人にも禮をしたがよいと、

●或人小姓をかすなぎくと呼びて使はるゝ、客不審に思ひ其故を

尋ねければ、さる事あり春長と書けり、かすは春日のかす、なぎは長刀のなぎよと、

●作意ある人の犬あり、名を廿四とつけたり、廿四くと呼べば来る、なにとしたる仔細にやと問ふ、しろく候は、さて實にもくくと感じ家に歸り、しろ犬をもとめて廿四と呼ぶ、いかなる心持ぞと尋ねられ、くろう候は、

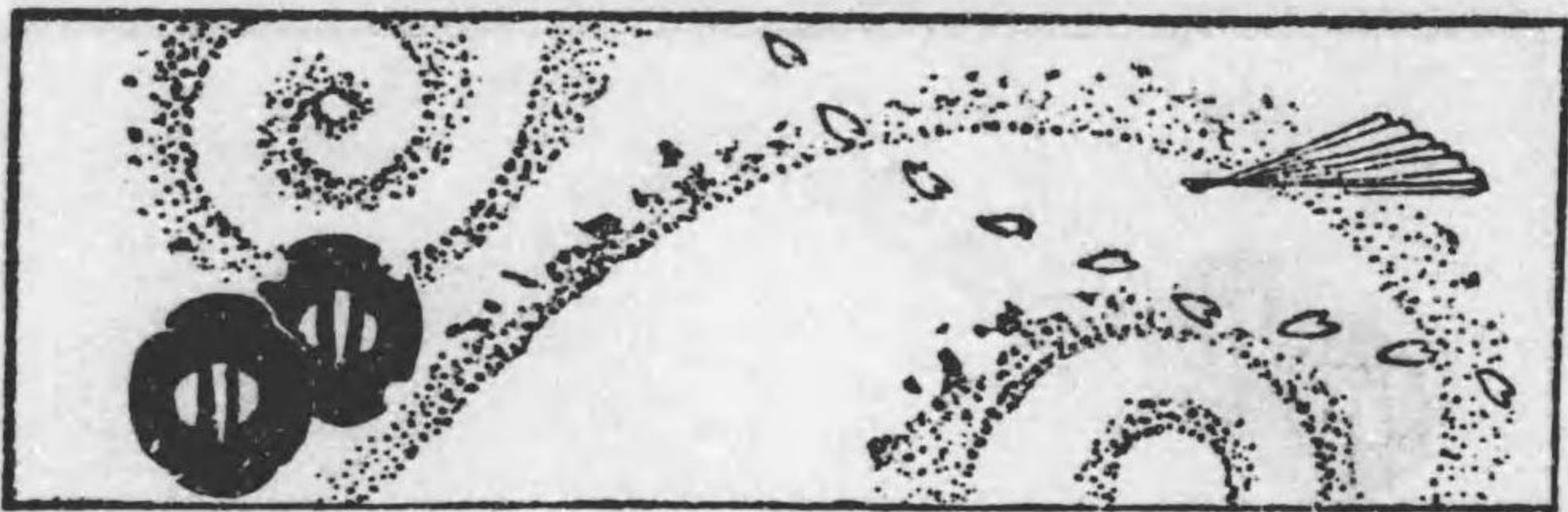
○革細工のかたへ侍のもとよりとて、太刀に文をそへ持來る、開き見れば、此日々念を入給り候へと有り、つひによむ者なし、亭主わざと侍のもとへ行き、直に尋ねければ、それこそ誰もしるべき文字よ、かしらの日はついたちのたち、次の日は二日のつか、太



刀のつかをまさてくれよにてすみたるものととなり、

○堺の中濱に道海とて富る者あり、ちとはれがましき客を請じ朝食の膳を出し、末座にきと手をつくね、言ひける事ども腹筋なれ、西宮に人を遣す大風頻に吹いて新魚無なり、鹽魚買來不及力、、、、たゞ西の宮へ人をやりたれば、大風が吹いて新しい魚がおりなると言はす。

○坊主と弟子といひ談じて、つねく愚人をあいしらひし、その風をあてこみにし、ちくと文字のある客の時、弟子出て、はゞからず、水邊に酉あり、山に山を重ねんやとは、酒をいださうかといふた、師匠が返答に、ノへタタ、人が多いに無用といふ、賓客頼にさつし、



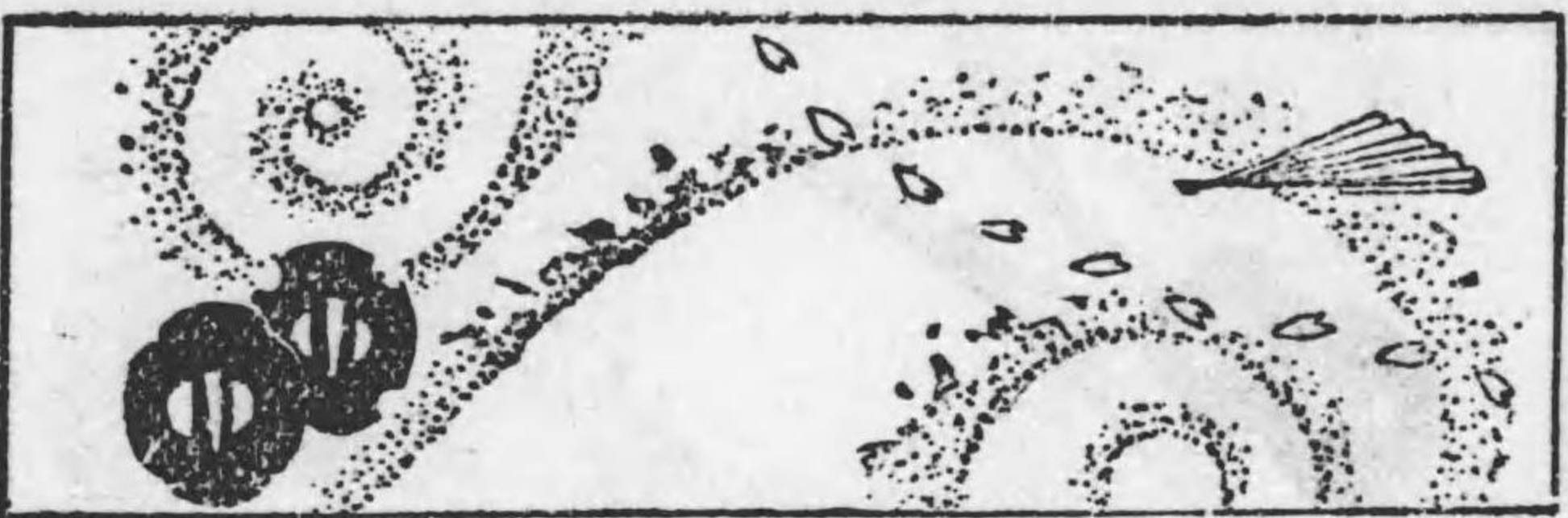


目の式を或目とよめり、聞事の、
 ○武士たる人、ある神主にむかひ、そちは神道を心得たるや、いな白
 張きたるまでに候、いたはしや本来無東西、何處をなんぼくといふ大
 事をも知らいてと笑はれければ、神主、私わたくしは佛歌、神歌、道歌を、
 ふつかん、しんかん、道かん、にて理をすまし参らすると申す時、彼
 の武士それはながい事おもしろさうなと感ぜられたるにてすんだ、
 ○逸興參會の物がたりに、此家中のおとなは伯耆下野とて兩人あ
 り、されば伯耆なれば伯州といふは聞えたが、下野を野州といふがち
 つともすまぬと、

○物かく者をたのみ、文一つあつらへ、あて處をとへば新のくと書



いてたまはれ、新六とこそかゝるれ、のくといふては知らぬ、さて
 そなたはあさましや、六日市のむいむいの字をさへし知らいてと、
 ○人客を得て菓子に蜜柑をもち出、これは庭前ていぜんのにて候といふ、客と
 りて見、さてく新しや、店などにあらんは、いかでかやうには候
 べきと、大に感じけるを、おもしろき時宜とや聞きなしけん、今度
 客にふるまひのあげくに、麩こをにしめて重かさに入れ、其席へもち出で、
 これは庭前の麩こで候ふと申したは、
 ○京都四條の河原にて將基の馬をひろひたる者あり、何も知らて主
 に見せたれば、是はすごろくの碁ごいしといふ物なりと、
 ○ある者のむすこ百人一首を本にむかひたうくとよみければ、親



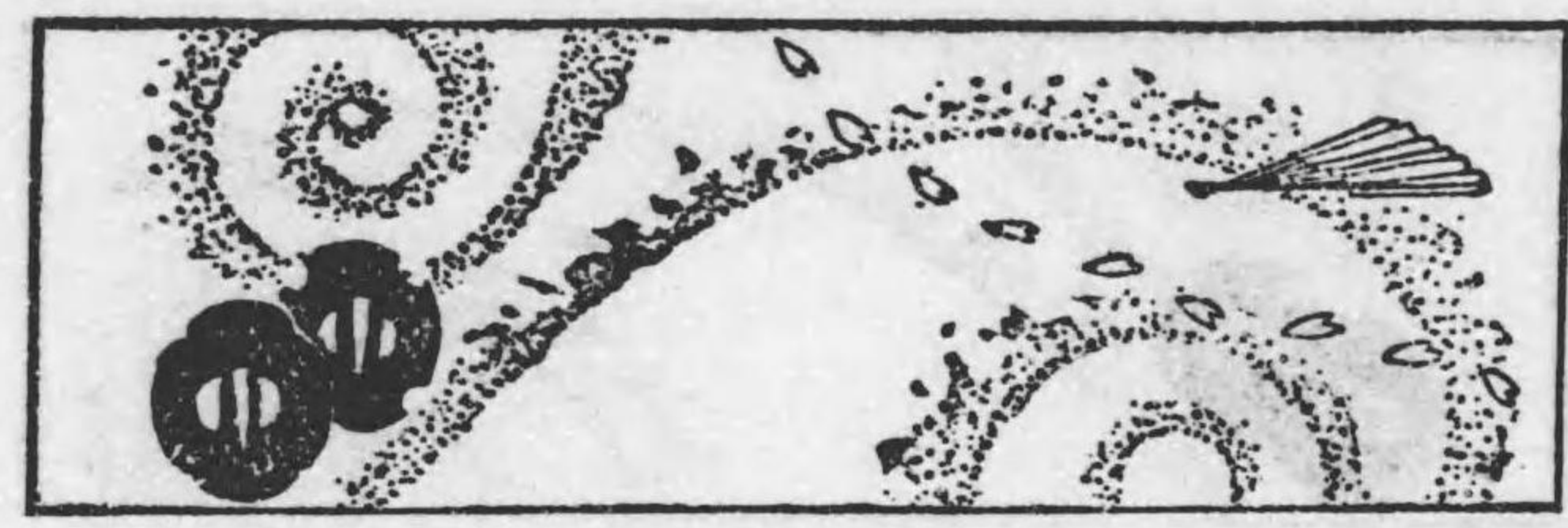
にて候人申されたる、やれしづかによめ、それやうなる物はかへり點
 のならひがむづかしいに、
 ○さる處にて釋迦の文を見たはとかたるを聞く人感じ、聲聞緣覺羅
 漢の内、誰等へのあて所ぞや、耆婆が方への文なり、さては竹ばし
 に梵字の文章いかにやと問ふ、其事よ紙は日本一の播磨杉原に、鳥
 飼様をもつて、いかにも墨をかうくと、此程は久不懸御目候、四
 五日以前靈鷲山の麓にて風をひき、咳氣散々に候、藥一二貼可給
 候、賢者婆殿まゐる、尺迦判、
 ○とかく當世は文章のみじかきかはやるといふを聞きて、侍たる人
 のかたより、知音の僧へつかはしなるとなん、

送還る十八本松茸恐惶謹言

圭侍者へ

平井の伊賀入道

○又商人遠島より古郷へたよりあるといふ時、妻のもとへ、文な
 らびにいんしんをしけるが態と、一筆、針三本、千松なかすな、火
 の用心、かしく、とも書いたり、
 ○つねに人みな干鮭は身をあたゝめてよき藥などいふを聞きて、わ
 れも養生に食ひたき事やおもひ、老比丘うつけたる中間にむか
 ひ、藥にちといる事あり、からざけといふ物をかうてきたれとて代
 を三百わたしけり、すなはち買ひもとめて來りぬ、折節あしく客の





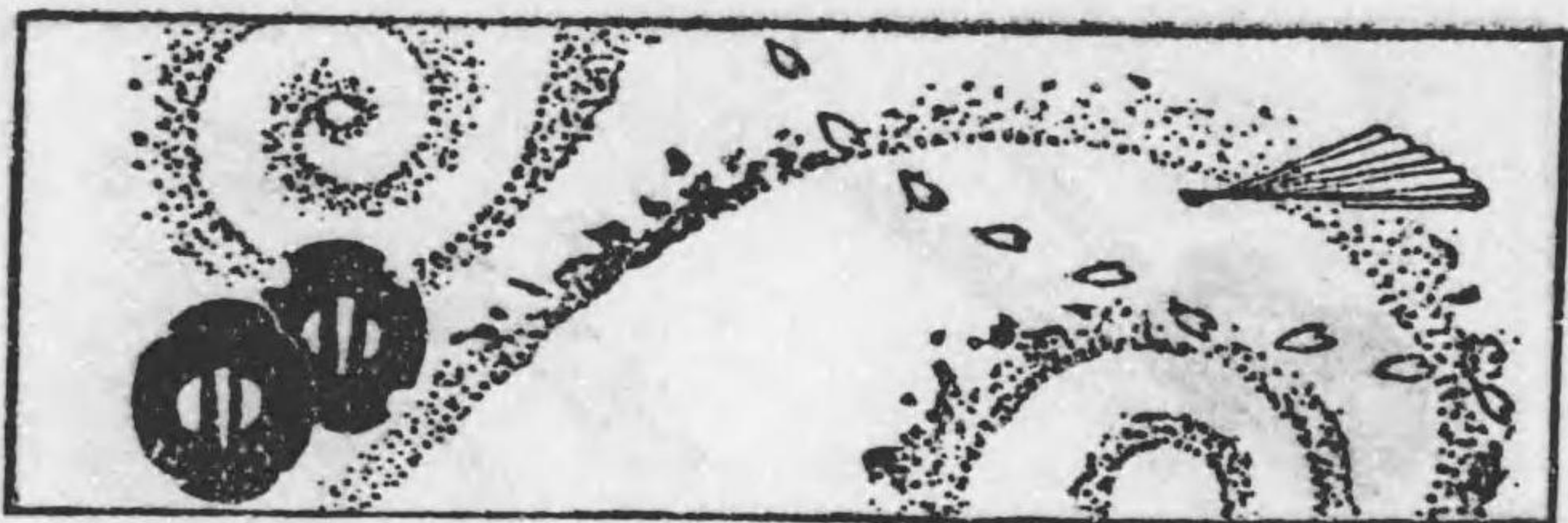
ある座敷へ、くだんのうつけによつとさし出しけるに、老比丘せきめんし、其のからざけをすぐに泉水へはなせと申されたり、
 ○あまりに齋をくひ過して、腹便々と歸るさにもちたる珠數をちとしながら、うつむかんやうなきまゝに、足の指にて挟みつ、じゆず御免あれと申せしと、ちとじたらくの類かや、

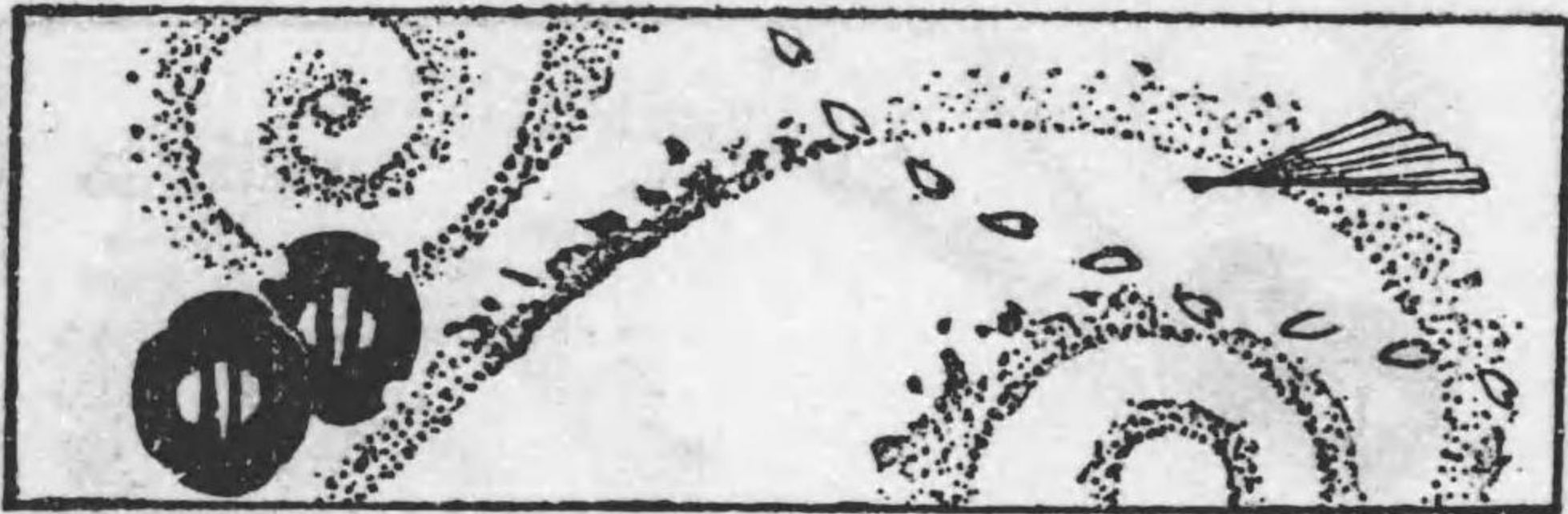
○都の寺に檀那朝とく参り、本尊を拜し、茶堂の傍にて珠數を繰り、佛名を念じぬけるが、爐にかけたる釜の湯おびたしく衰あがりて、蓋をたたく、釜と蓋とのあひだになにやらん見ゆる物あり、蓋を取りたれば蛸なり、これはなにぞ、蛸ではなきやといふ時、坊主の返事、さる事も有るべし、ゆふべ蛸薬師の水をくみよせて、茶

湯のをしかけさせたほどにと、

●ある一人坊主、鳥賊をくろあえにしてたまはる處へ、ふと人來れり、口をぬぐはん料簡もなかりつるに、そなたの口はなにとて黒いぞや、かねをつけられたかと問ふ、いやあまりさむごに、只今燃えさしを一口くうたと、

○ある出家、ふかく隠して鯨をくひける處へ、ふと檀那來れり、爲方なさに皿ともにあたまへうつづけ、手にておさへたれば、頬からおとがひへ汁のながるゝを見つけ、こなたには腫物ができまるらせたかと問ふ、おうといへばよかりしを、あまりに肝をつぶし、いや俄にぬたなまづができて候といひけり、





○鶯は木にとまりゐて、蘆邊にすむ鶯にむかひ、そちほど色白くうつくしき姿は無し、如何にも物いひがそさうにて、いやしいわといふ、鶯腹を立て、そちは鳥の中にも、四十八鷹の内に入て、空をたちまふ風情のよさ、譏んやうもなきが、物ごしのくどさ、ながさが聞れぬ、我がごとく言葉ずくならばよからんものと、こなしこなされ、かくてはこらへられず、たそに批判をうけんと、おのれくが土産を用意するに、とびは例のくだりたる鼠をもとめ、鶯はかひくしくとびおどる、鯛をとゝのへ、鶯の棲むなる峰に飛ぶ、鶯二鳥の聲を聞きて、鶯はいか様言便みじかく當風にあへり、鶯はなにとやひいまでにてよからんものを、後のりよく、が長過ぎて聞

かれぬ、古流なり、兎角まけよくと、これをや、、、、、、、、
、草つとに國かたぶくとも申しつべし、

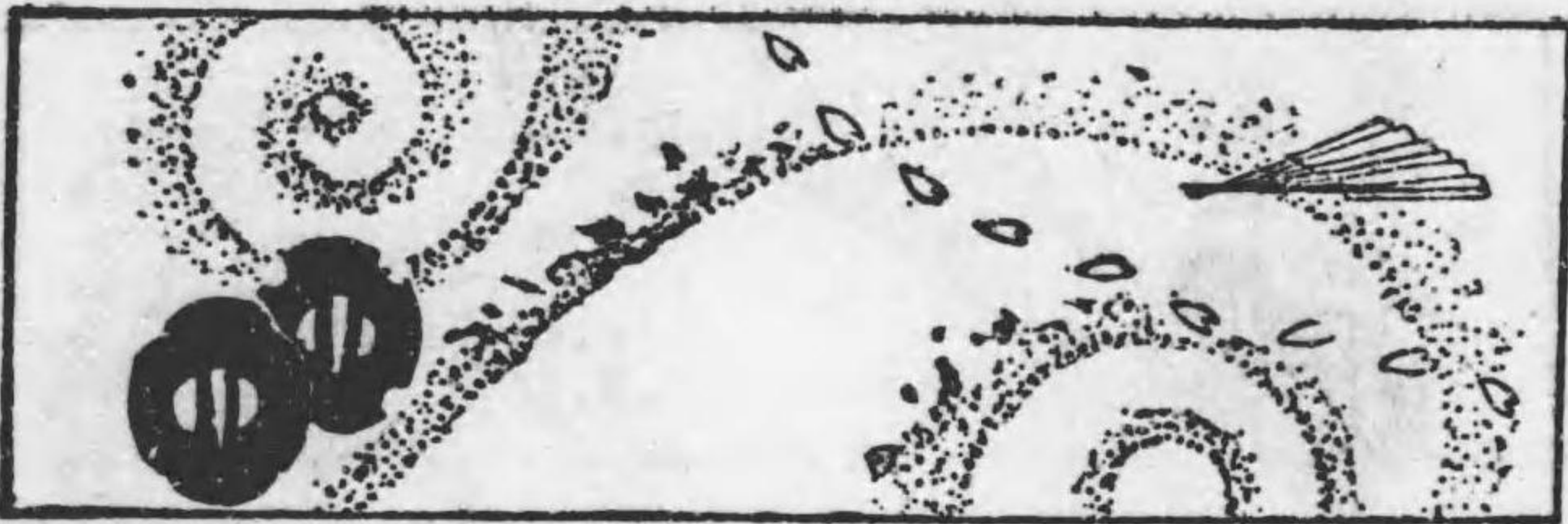
●山中にて衣更着中旬に、農天二人つれたち出て一人は山の北原、一人は南原一町ばかりをへだて畠をうちけるが、南原にいたち一つはしり出たり、見付しを幸ひ、やにはに棒をふりあげ打殺さんとしけるを、北原より、やれ彼岸じゃにあげ、ひらに彼岸ぞ、たすけよと呼ばる、さらばとてたすけしが、彼岸の男、さてくつひに彼岸といふ物を見なんだに、けふはじめて見たよ、彼岸が姿はそのまゝのいたちじやと、

●こしをひく人を見て、そなたの足はつれに片足みじかいと問うて



あれば、いやかたあし人のよりもながいといふた、これはなにとし
たる返答ぞ、

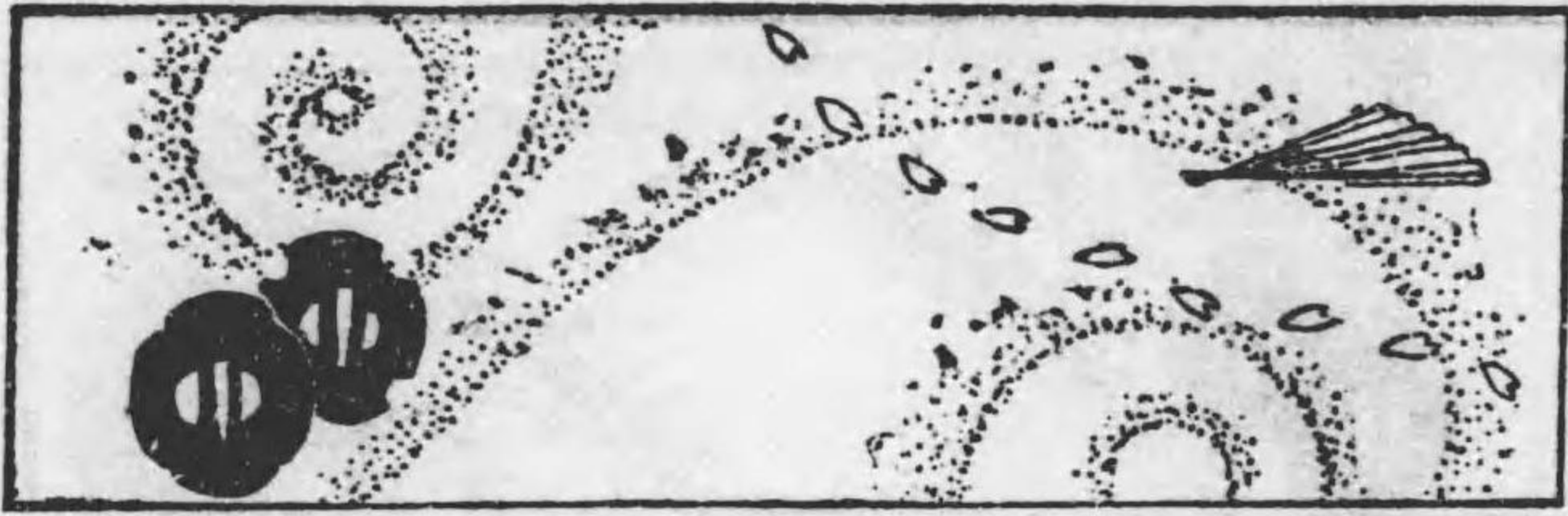
○ばくちうちが夜半過に宿にかへり、女房をおこし、一世のあひだ
にこれほどうれしい事にあはぬとよろこび、ふしまろびまんぞくす
るまゝ、さてはこよひばかりは、ばくちにかちたる物よともひや
り、いかばかりの仕合にやはんべると問ふ、返事に、こよひもばく
ちにまけた事はまけた、されとも此まへ五百目に買うてもちたる脇
差を二貫目にしかけてやりたるまゝ、一貫五百目のまうけをしたは
と、

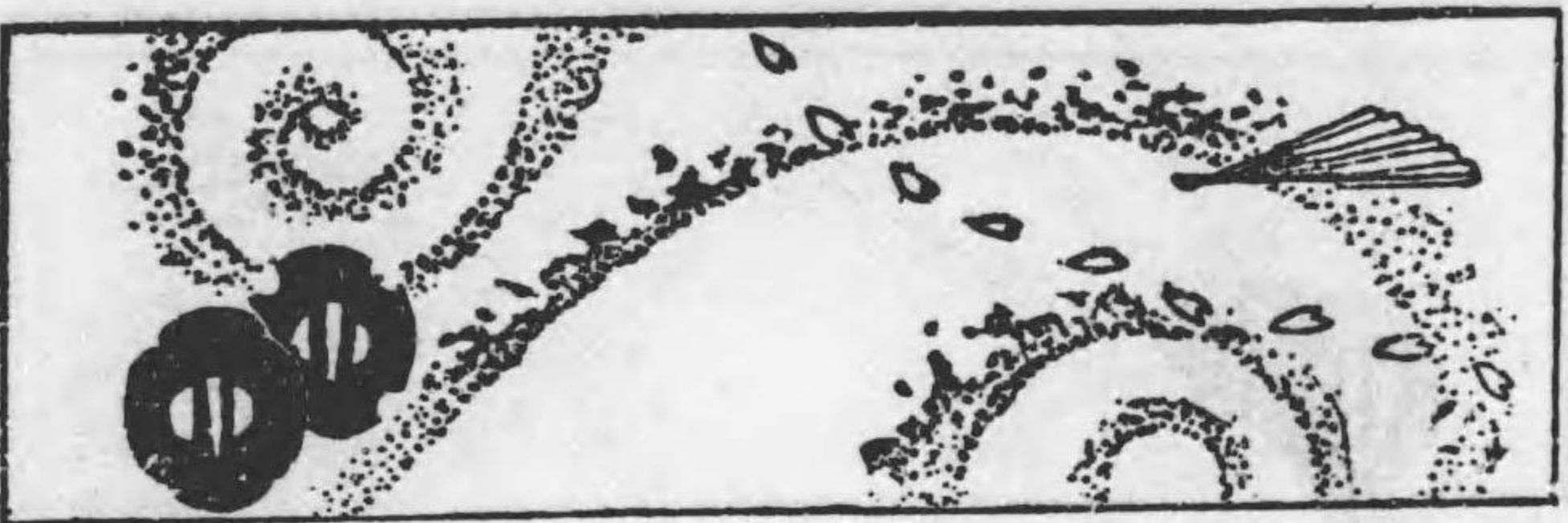


●日のあるあひだを晝といひ、日のいりて後を夜といふは、いかに

ま仔細あらんやとおもひ、われに折角思案していとあてたはとか
たる、なにと工夫したぞ、たとへば朝になれば、とくからおきて山に
ゆく者もあり、海にうかぶ者もあり、市にたつたり、奉公に出仕す
るあり、日のくるればいづれもみな我宿くにかへりよるほどに、
さてぞよるといふなるべし、又日ひんがしにかゝれば、そめやは
そめてかけ、ぬる者はぬりてほし、きたなき物をもあらひてほすに、
いづれものこらずひるほどに、さてなむひるとはいふ物よと、
、物しらずか勞療やみか

○なにへんともなき者ども三人つれだち清水へ参りみちにて先に行
く男、あの清水の観音はなに観音といふ物ぞ、奇特に人の尊む事や

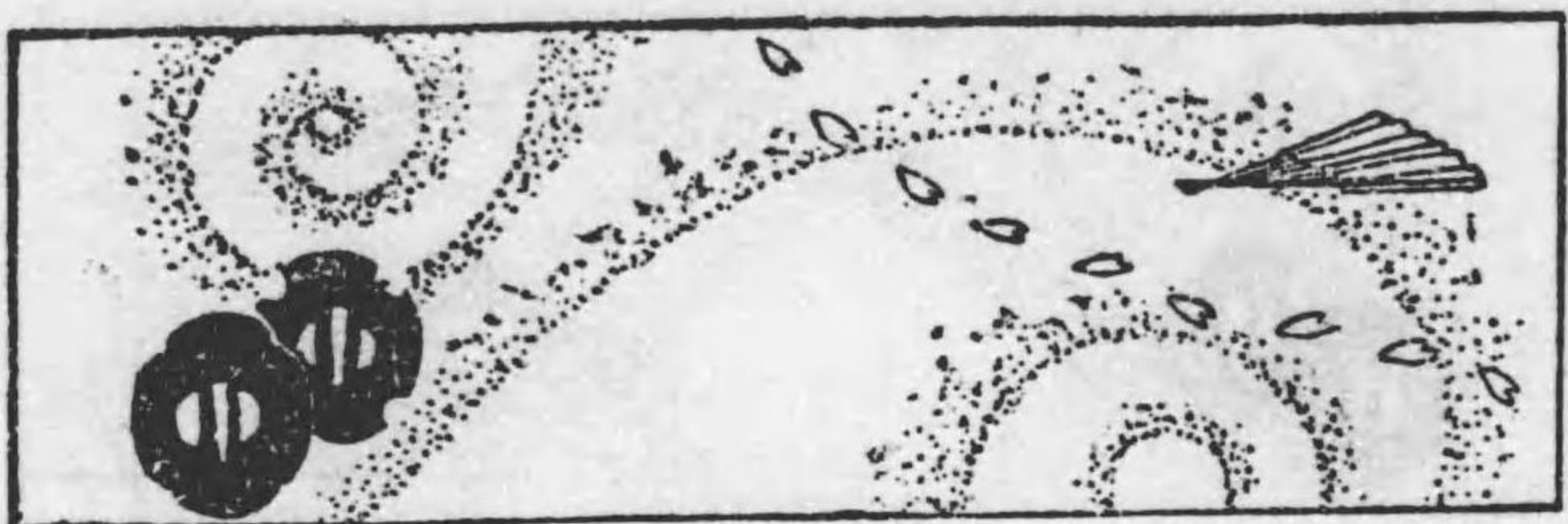




と、次なる者が、さだめて、釋迦か藥師か親類の觀音であらうまでよと、後なる男あたまふり、大に感じ、とかく物しりとつれだゝねば理がすまぬと、

○夜もいまだあけやらぬに、仲間たる者戸をあけ、さてもおびたゞしく雪のふりたるはといふ聲しけり、亭主聞付け、如何程ふりたるぞと問へば、されば深さは五寸ほどもりて候、幅は知れぬと申したり、

○昨日日吉太夫墨田河をして皆に泣かせたはと、語るを聞き、つひに能といふ物を見た事もなき者、あけの日早朝に行きしが、翁せんさいをしまひ、三番叟のとさ、さめさめと泣く、見る人は何事にや

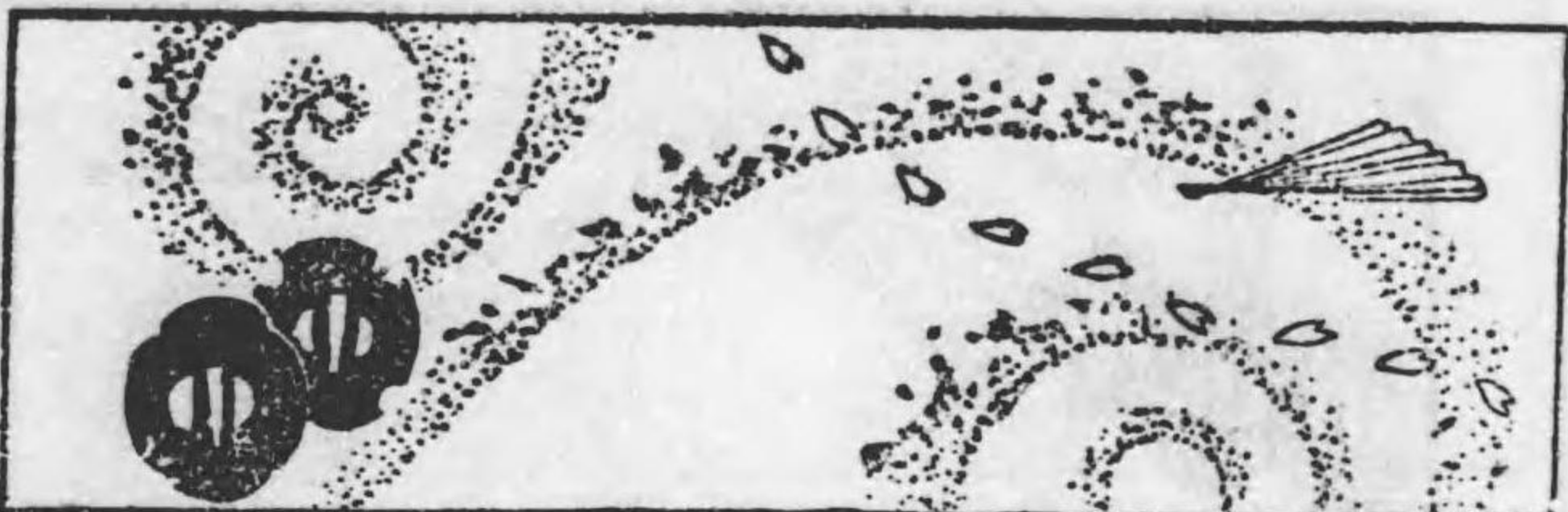


と問ふに、あの墨田河があれさに泣くといひしは、

○富士の人穴の勸進といふて、門々をありく者有り、不思議や人穴の上に堂が建つか、又常燈をもとぼさむとの事やと問ふに、彼聖おのれが口をがばとあきて、此人穴のくわんじんなりと、

○主君たる人の酒につよきあり、機嫌のよき時小姓に、われをば世の上に上戸といふか、いやさやうには申さぬ、下戸といふかや、いや其の沙汰も御座ない、推した推した中戸といふらう、いや、さ申す噂もあらない、さてなにと言ふぞや、唯世上には底しらずじやと申すと、

○なに、か思ひたちけん、一期酒のむまいと神文し、廿日ばかり後し



きりにのまんといふ、女房、こは勿體なし、天命をばいかと教訓しけるに、いや神明は人の心を見ぬいて、何としたりとえ堪へまい、やがてのみたからうものをと、疾くからしめされ、けつく大悲の御むねなれば、一つのませたいところおぼしめされんずれ、酌をする者、酒をほかとこぼしたれば、亭主、其の給仕は此ほどの這出にて候ゆゑ、聊爾を仕つて候とあれば、かの酌ちくと手をつき、我等這いては御座ない、伯父の馬にのりて参りたと申しけり、

○質屋の娘嫁入りし、夫婦のなかもよかりしが、かりそめの事をも九々のことばをはなさずつかふ、たまさかなる客のまへにても、と

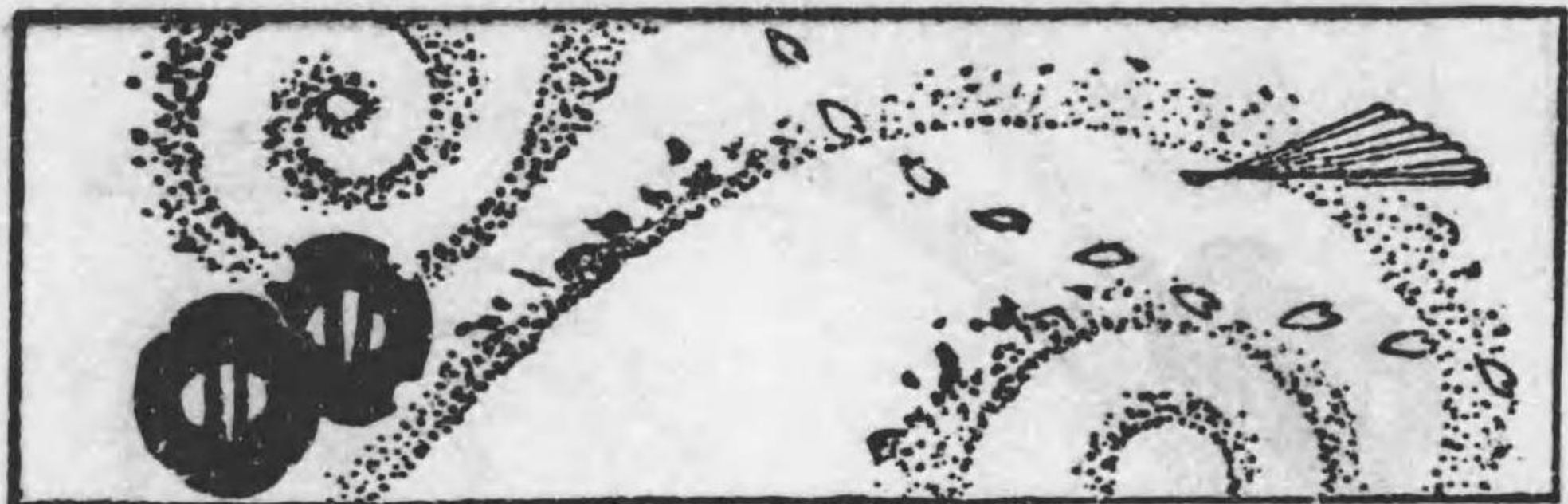
かく九々にて物をいふ、せんかたもなきはづかしさに、かの女をばさりてけり、妻家をわかれ行くにも、猶をさなきよりいひまなびたれば、三三十二でよめいりし、四四十六で子をまうけ、四五二十にてさらるゝよと。

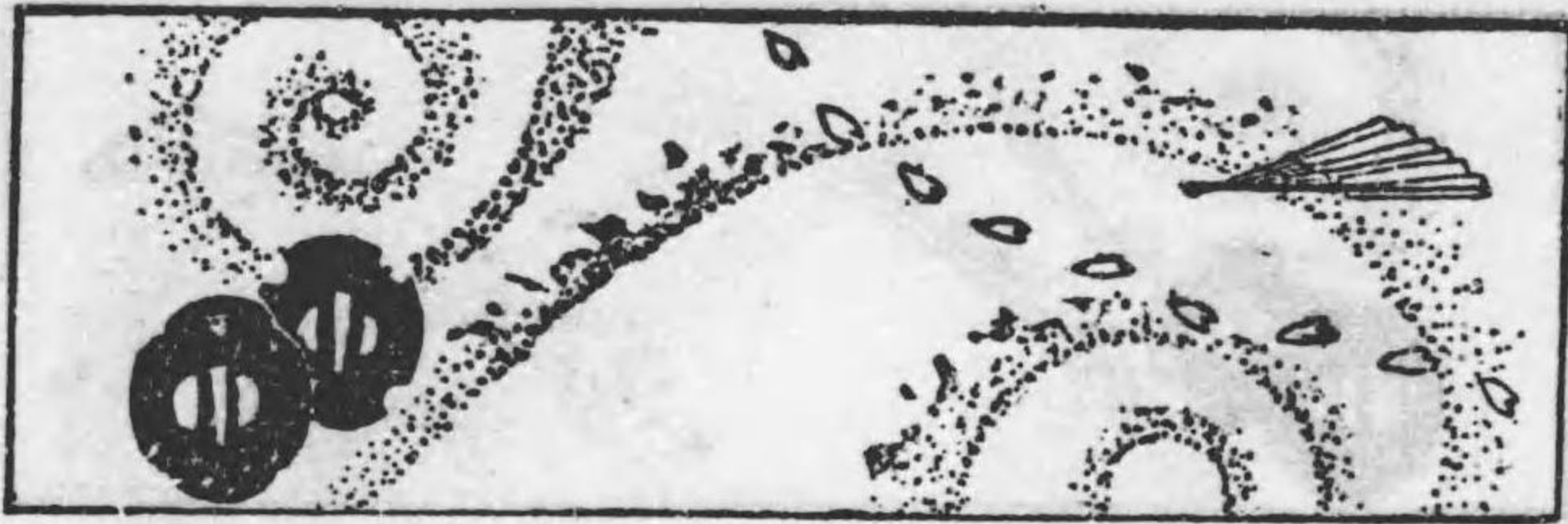
四四ならば十六つれて行くべきに

九九にもるゝか獨走るは

あだばなは二九の十八さげかな

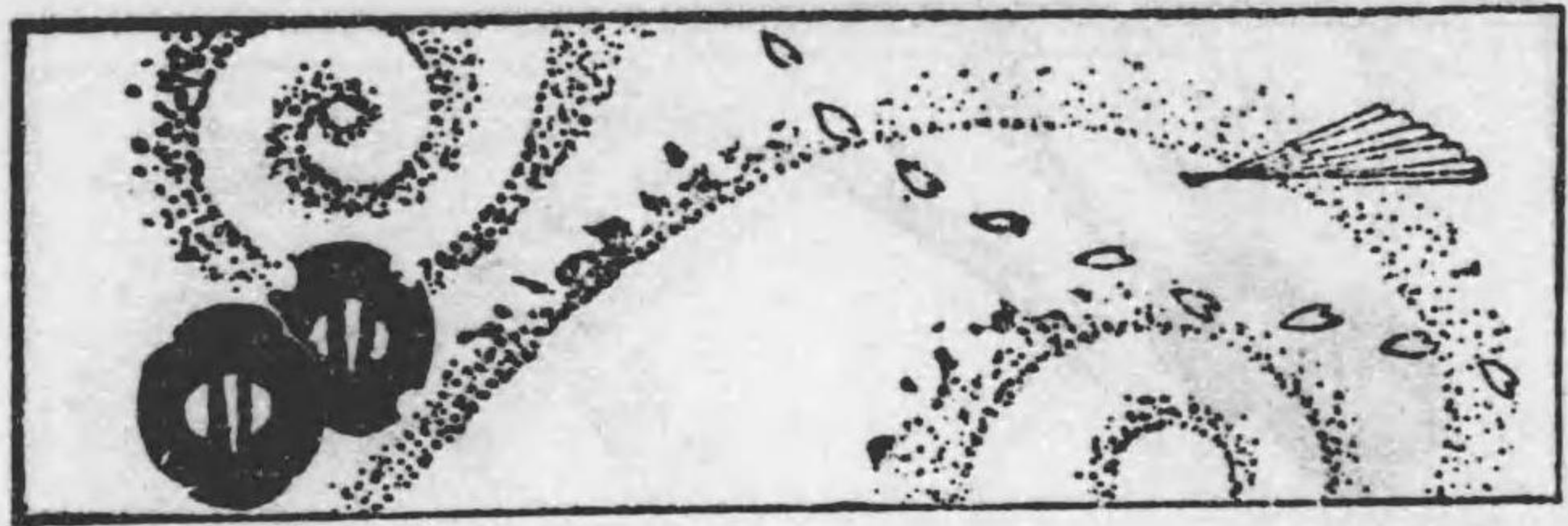
○屋根葺いかゞしたりけん、ふみはづして落ちたり、目をまはし忽ち死ぬる氣色なるまゝ、人々ふびんがり、あいすを酒にてあたへんとよらいすれば、かの葺師いきのしたよりいふやう、酒は生得下戸なり、





一口も咽喉へ入り候はず、たゞめしでならばのみたう御座あると、
 ○京の町を、氣力の毒買はう／＼というて歩く男の、姿を見れば、
 如何にもやせ衰へ、色せう／＼と勞瘁氣なり、可笑きものに思ひ、
 或所へ藥をうらんと呼入れ、そなたの風情には、違ふたる望なりと
 問ふ時、さる事あり、我等はそなたの御覽するにまぎれなし、それ
 がし連れたる女どもの氣力あまりつよく候まゝ、一服のませたうて
 尋ぬるとぞ申しける、

○夜半の比、隣りにいさかふ聲しけり、何事にやと夫婦ながら起き
 て聞き居たれば、男の徒なるによりおこりたる、りんささかひの
 修羅をたつるなり、聞き居る女房なりの理も非もなく、夫のあたま



をついけぱりにはりけり、夫これはなんといふ狂亂ぞといへば、此
 後もあの隣りのいたづら男のやうに、身をもつなといふ事よと、

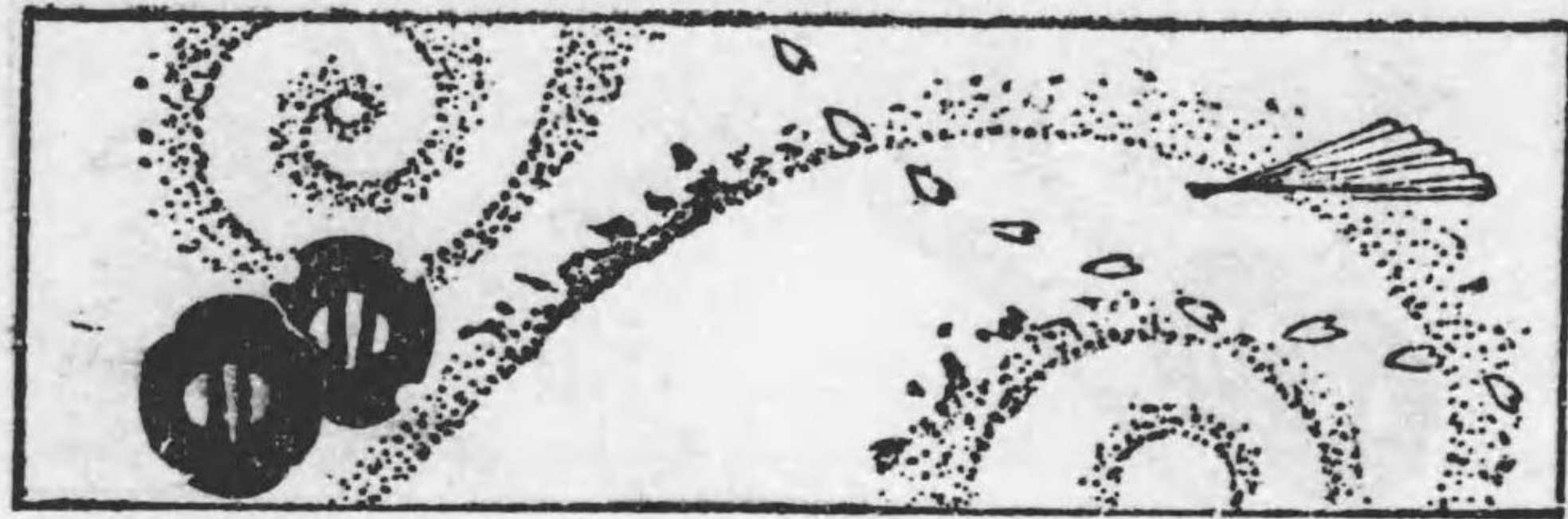
○おかたの方より紅梅が使に参りたるよしいひあげゝるに、何事ぞ、
 いやちと物の講をむすびたまふが、こなたへも人数に入りたまはん
 との儀に候、けうこつや、これほどいそがはしくいろ／＼なるに、何
 の講ぞとあれば、別の仔細にあらず、倍氣講をおかたの大將にて、
 たれ／＼むすばるゝと語るにこそ、りんささこうならばわれもふたま
 へまじろぞよ、

○或僧新しき小刀の大なるをもちて、鏗をけづり居ける所へ、知音
 の人おもひよらず來れり、あまりにとりみだし、小刀を鏗と思ひい

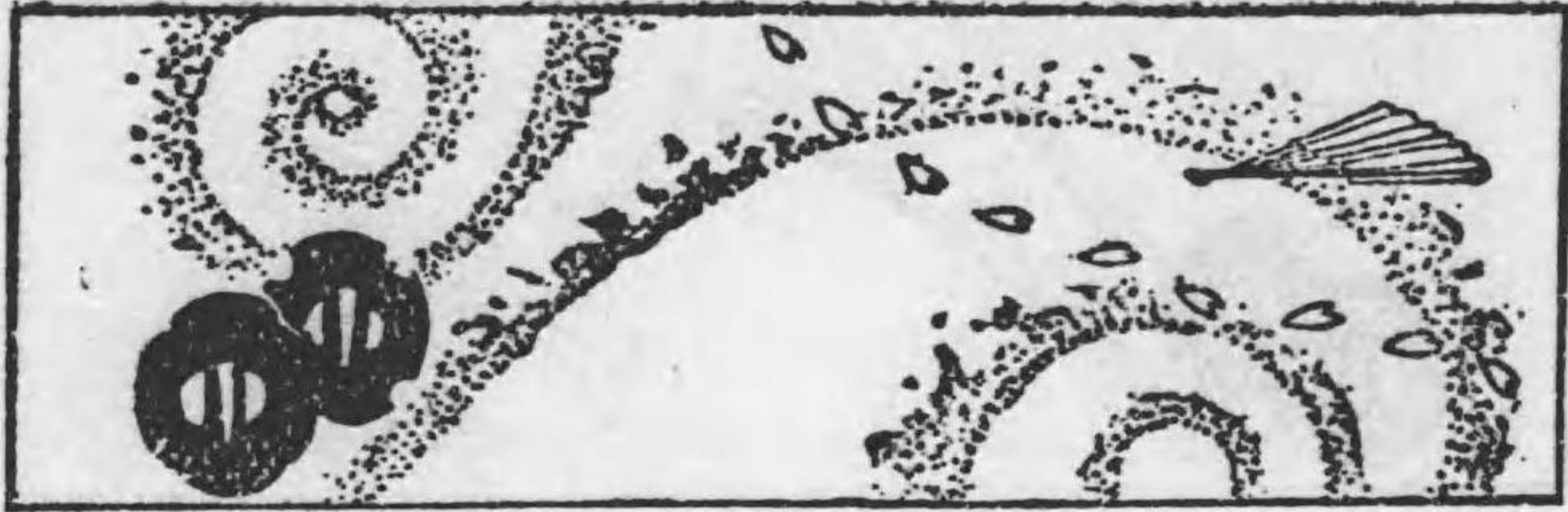
元和元年之頃安樂庵囃を所望いたし承候へば別而おもしろく存るに付て御書集候て、草子にいたし給候やうにと申候處、一兩年過八冊に調給候、紛失可仕かと存奥に書付置也

寛永五年三月十七日

重宗



おのゝほぢぢの物語選

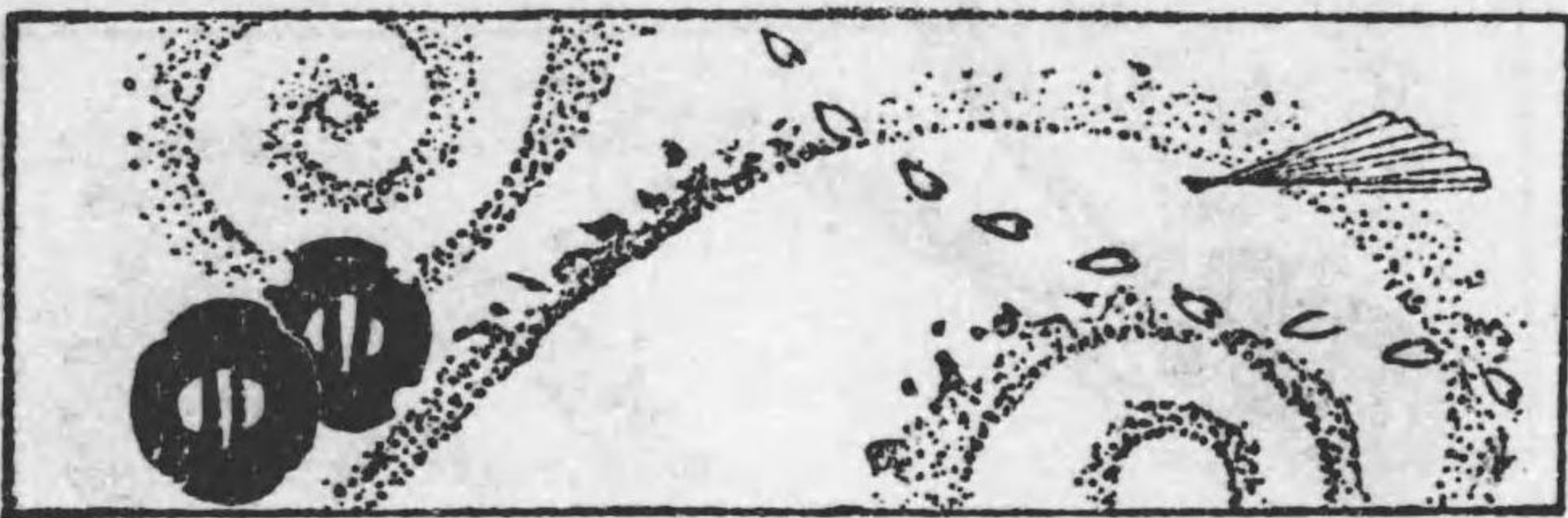


きのふはけふの物語選

醒睡笑といへる書巻ありて元和九年の比のおとし咄なり、此書年號なしといへども又これにつぐべし、予かつて櫻馬場のほとりにてきのふはけふの物語の下巻を得たり、その本九行にして別板なり、その比行はれしものなるべし、

蜀山人

○こゝにふしんのはれぬ事がある、なに事ぞ、公家しうはよう草木の名をつかせらるゝ事じや、先すゝき殿、松の木殿、たけの内殿、やぶ殿、はむろ殿、やなぎはら殿、さくてい殿、たけや殿、此分じや、いやまだある、たれぞと問ふ、さんせう殿、



○又ある者申やう、公家衆は鳥けだものゝ名をつかせらるゝといふ、なぜ、先から丸殿、わしのを殿、たかつかさ殿、ののくま殿、此分じゃ、いやまだある、たれぞ、まてのこうぢどのよ、

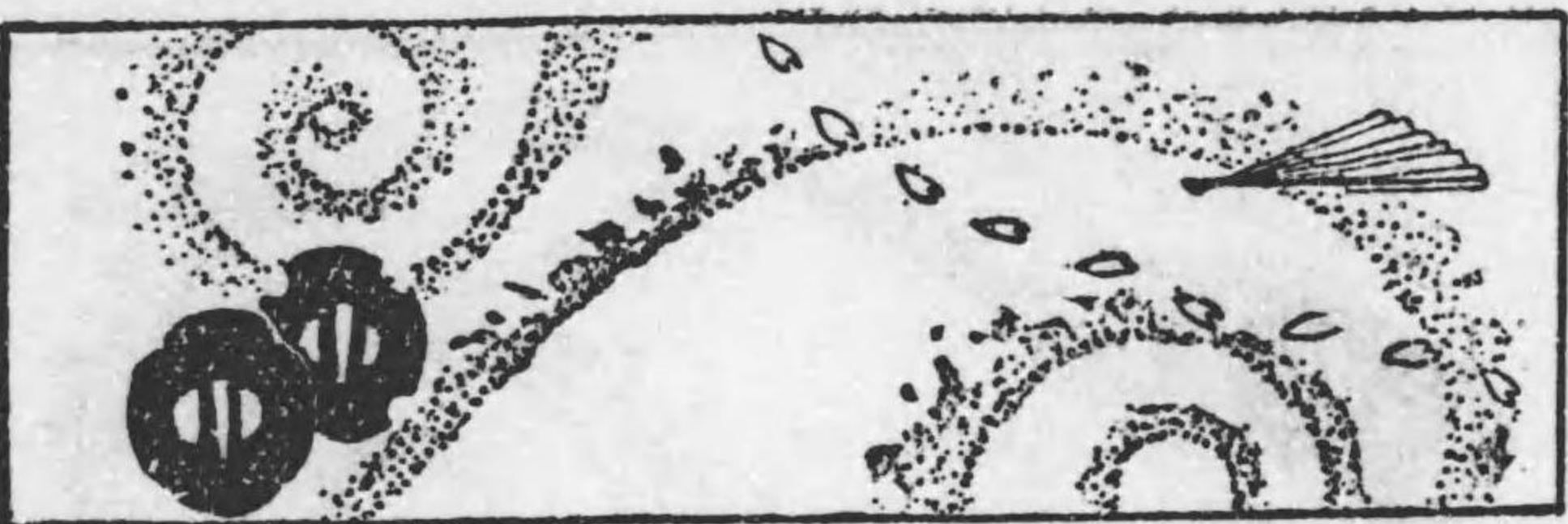
●さが大かく寺殿へ遠國のじゆんれいが参り、これはなにと申所ぞといふ、これは御もんぜきとこたへければ、三文にまけてけんぶつはなるまいかとて、いろく申た、五文のせきとちもひし事、口をしき次第也、

○田舎よりはじめて京へ上りたる人、三てうあたり宿をとり、東山へけんぶつに出るとて下人をよびよせ、京は家づくりおなじやうにて見しりにくいぞ、なににても心じるしをして、よくおぼえよと

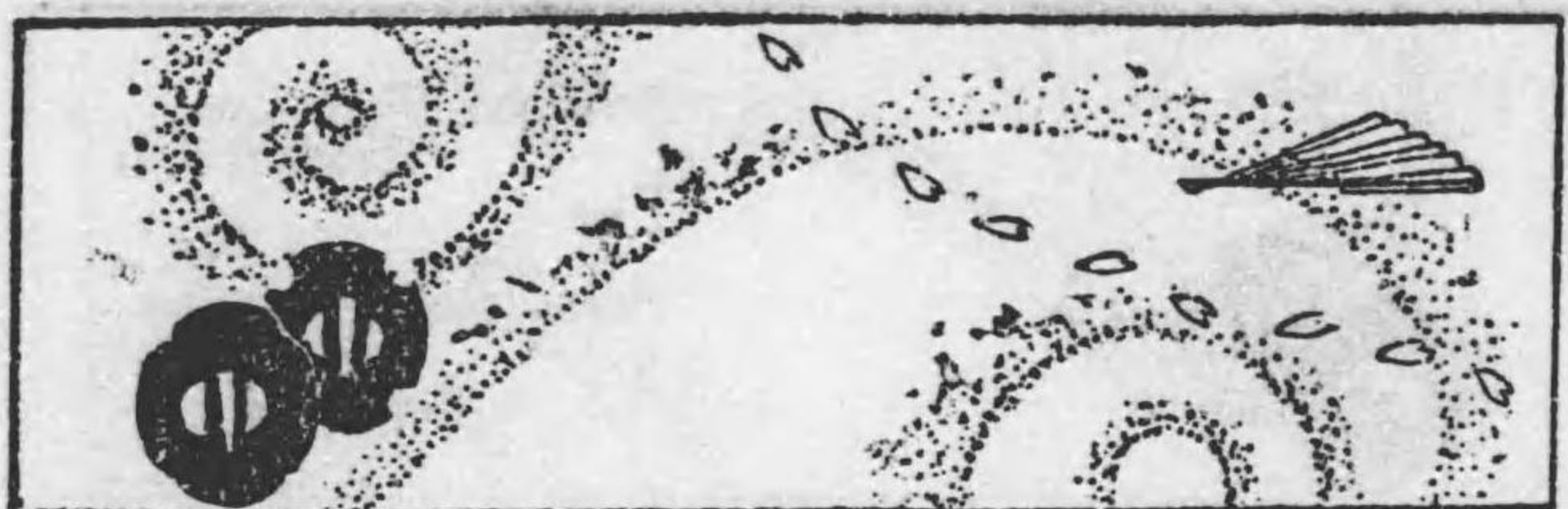


いひつくる、心得申たるとうけごうて、さて方々けんぶつして歸り、洗足とれとてさきへつかはしければ、あのごとく忘れて、こゝかしこをたづねありく、さればこそとちもひ、しるしはと問へば、いな事じや見えぬといふ、なにをしるしにしたるぞと問ふ、いやたしかにかどばしらに睡にて、書附をしておきたるといふ、さたのかぎり、それがやくにたつ物かとて、さんくにしければ、まだしるしがあるといふほどに、なにぞと問へば、やねに鶯かとまりてゐたが、これも居らぬよ、

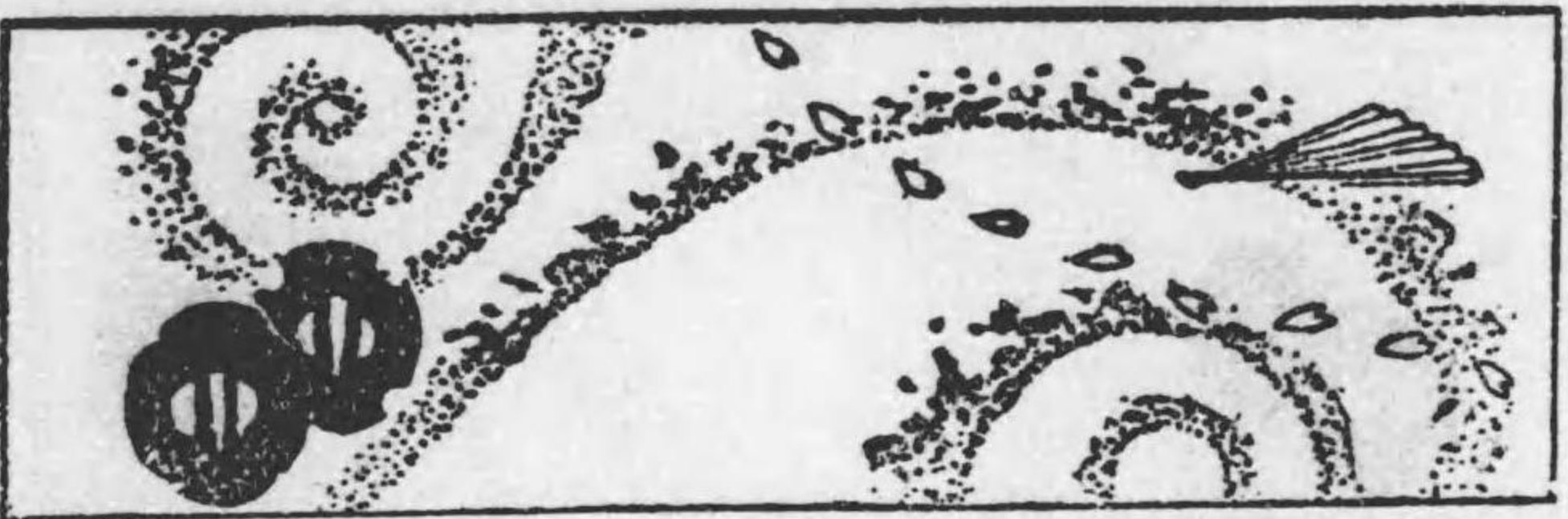
○ある人にはかに數寄に行とて、中ぞりをいたしたきが、たれかかれかとひしめく所へ、だんな坊主きたる、よき所へ御こし候、はゞ



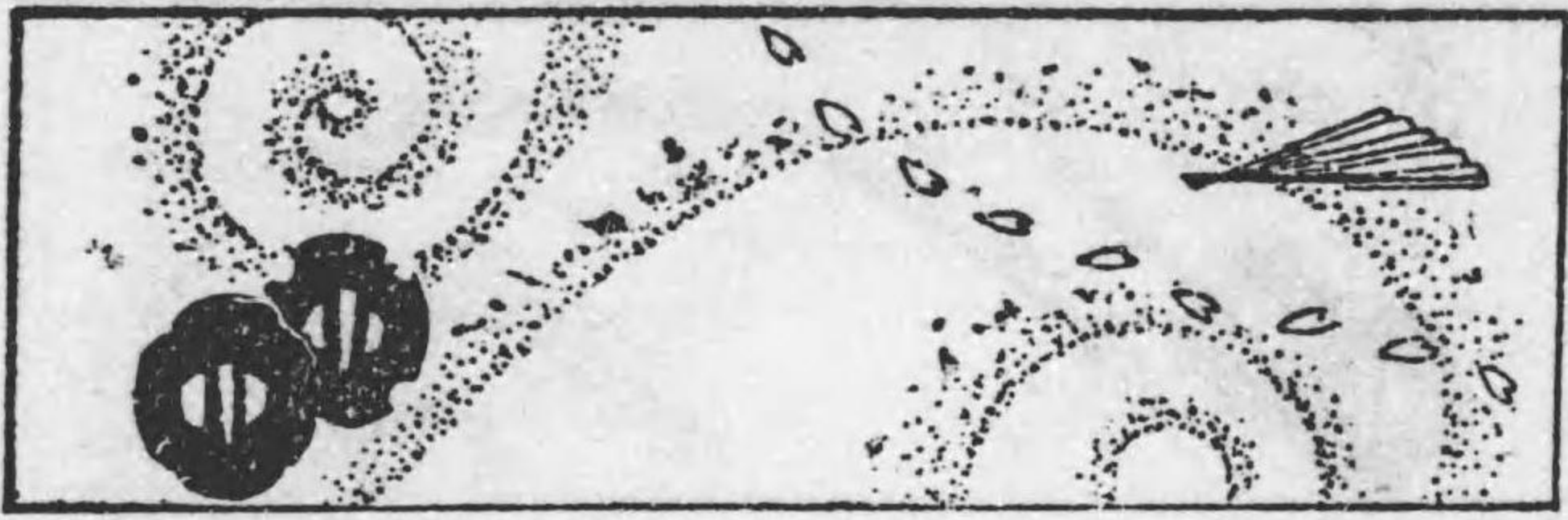
かりせんばんなる申事にて候へども、にはかにすきに参候が、中ぞ
りをたのみ申たいとて、髪をあらひてそらす。此坊主つねに出家
のかみばかりそりならひ、いつものごとくにおもひ、片小鬘をすら
くとそりおとす、此人さもをつぶし、是はくといへ共叶はず、
さてく言語道断、めいわくじやとてはらをたつる、坊主せきめん
して、けがと申ながらめんぼくも御座ない、御めんなされよ、惣じ
てせがれより山寺にすみ、つねに坊主のあたまをそりつけ、たまた
ま男のかみなれば、もくよく仕るとばかり存たるといへば、それは
いよく調伏かとはらをたつれ共、片小鬘そられて今さらなほら
ばこそ、此ぶんにてはすむまい、ふしやうながらほつたい仕らふと



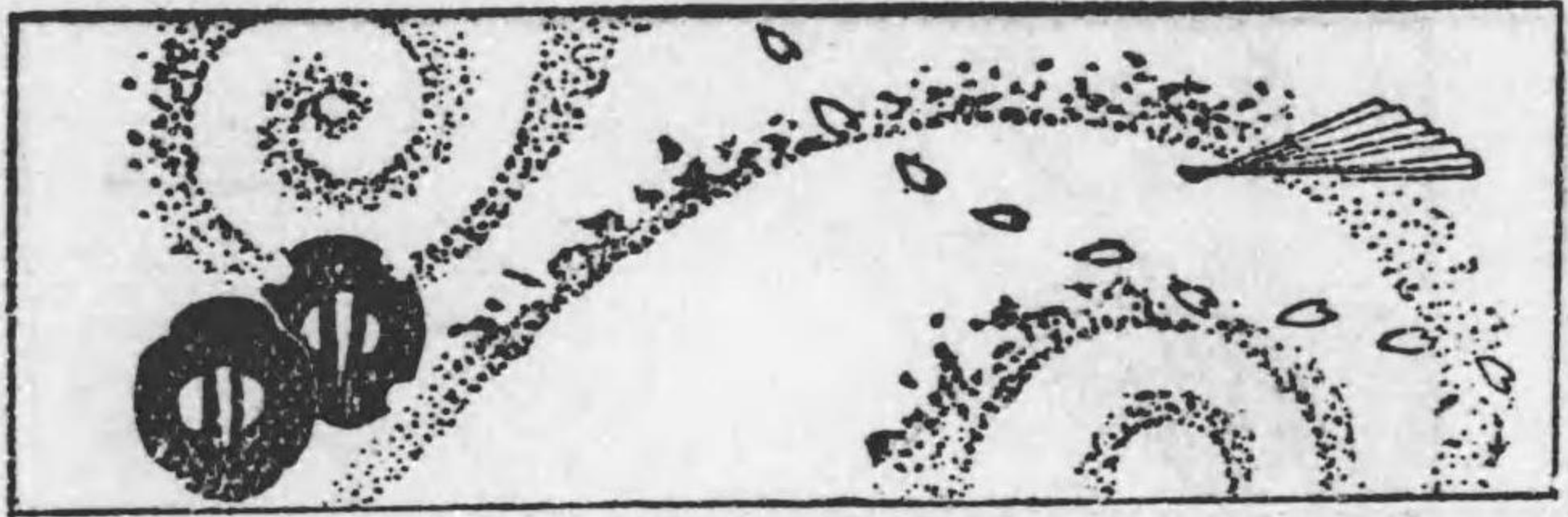
いへば、坊主聞て一段の御事、さらばかいみやうをつけ申さうとい
はれた、
●ある人寺へ参りて長老様といへば、留守じやと申す、はるばる参
りたるに御残ちほい事とて、しばらくやすらひけるに、折ふし竹の
子時分なれば、やぶをのぞきまはれば、長老さまは見事なる雁の毛
をむしりて御座有、そろりとそばへより、御見舞に参りたるよし申
せば、長老仰天して、さてく此鳥のひくげをまくらにいれ候
へば、づふうのくすりじやと申程に、か様にいたすが、なにとして
も手なれぬ事はならぬ物じやと仰らるゝ、だんな聞て、それはやす
い事御座ある、是へくだされよとて、くるくとひきむしり毛を



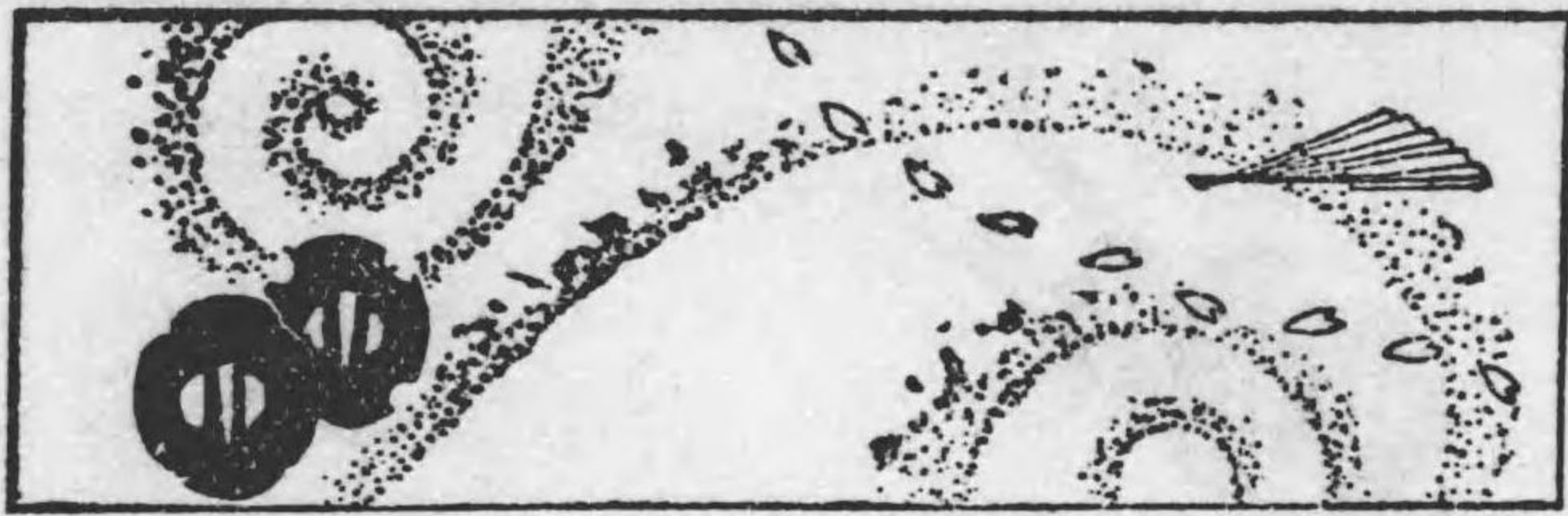
ばおしよせて、御枕に御入候へとて、此鳥のみはこなたにいらざる物よとて、やがて取て歸り賞翫す、
●西國のそら、東國のそらにとふていはく、上野下つけあつて中つけなきはいかに、ちくぜんちくごあつてちく中なきがごとし、
○或人もつての外に煩ひ、存命不定の時、女房を近づけて、此分ならば二三日中に死なんと思ふなり、あゝ御名残おしく候、又いかなる人にかそひ給はんと思へは、是のみ心にかゝるといふ、女房聞てそれは御心やすくおほしめせ、自然の事もあらば、かみをそり、後生一へんにして、御跡をとふらひ申候へしといふ、をとこ聞てそれはまんぞくに候、さりながら、かみはそりても又はへるものなれ



ばおなしくは、我らがいさのかよふ内に、そもじの鼻をそいて見せ給へ、さあらば後敷家くら其外さいほう一つも残さず参らすべしといふ、それはやすき事とて、身づから鼻をそいて見せける、此上は心にかゝる事もなしとて、書置などをこまぐとして、女房にわたし、死するをまつばかりなるが、此二三日ちと食がすゝむ、心もかゝるくなる、などいふ内に、やがて本ぶくして、さてくめてたい事とてひしめく所にをとこつくくおもへば、此鼻をげ殿を朝ゆふ見る事は、なにとしてもなるまじきとおもひ、ある時女を近づけて申けるは、近ごろめんぼくなき事にて候へども、そなたの鼻を見れば、命いさのびてうらめしく候、とかく申かねて候へども、そもじ



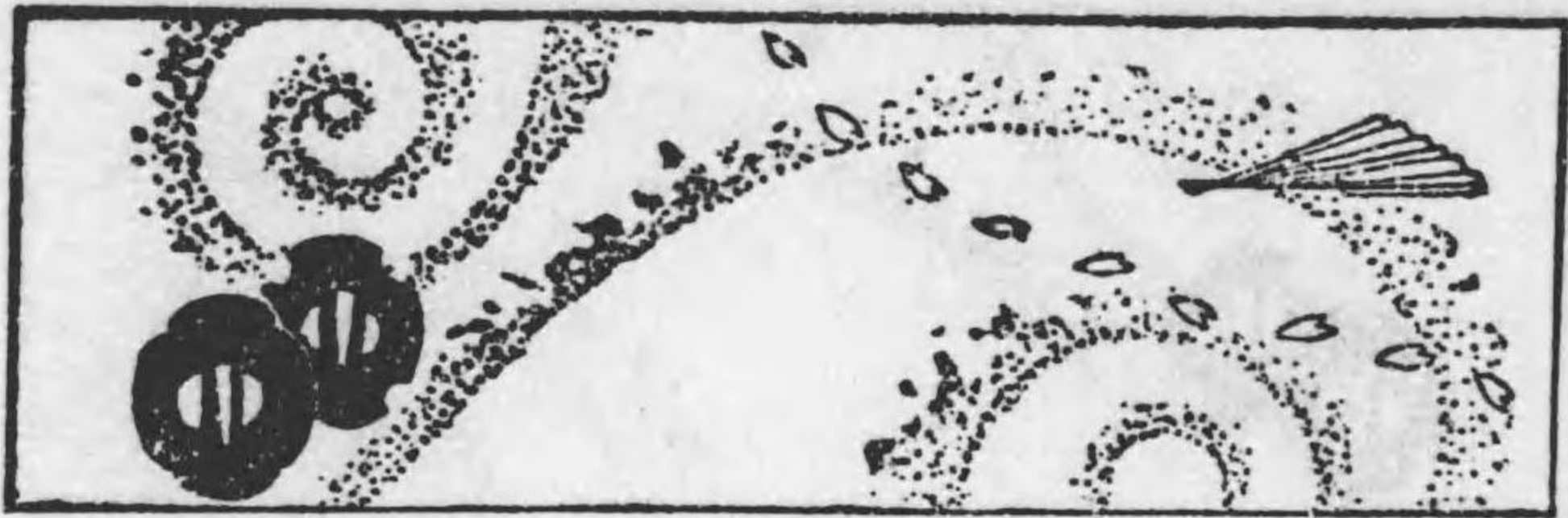
はいんきよして給はれといふ、女房聞て、是はあもひもよらぬ事を
 おほせ候、生れつきたる鼻なり共、此年月のなさは有べし、まし
 てそなたのしわざなれば、さほど見ぐるしくおもはし、和殿出よと
 てぶけう千萬也、をとこ聞て、尤理非にまがふ事はなく候へども、
 只今までのなさに、是非共いんきよして給はれといへば、女はら
 にすえかねて、所の守護へ申上ければ、やがて兩方めし出し、御尋
 ねなさるゝ、其時をとこまかり出て申けるは、さいぜん女ども申上
 候通、一々いつはりこれなく候、然ども我等わかきものゝ事にて
 候へば、あのごとく成ものを、朝夕見候はん事も、めいわくに存
 候、先いんきよ仕候やうにとの申分にて候あひだ、おほせ付ら



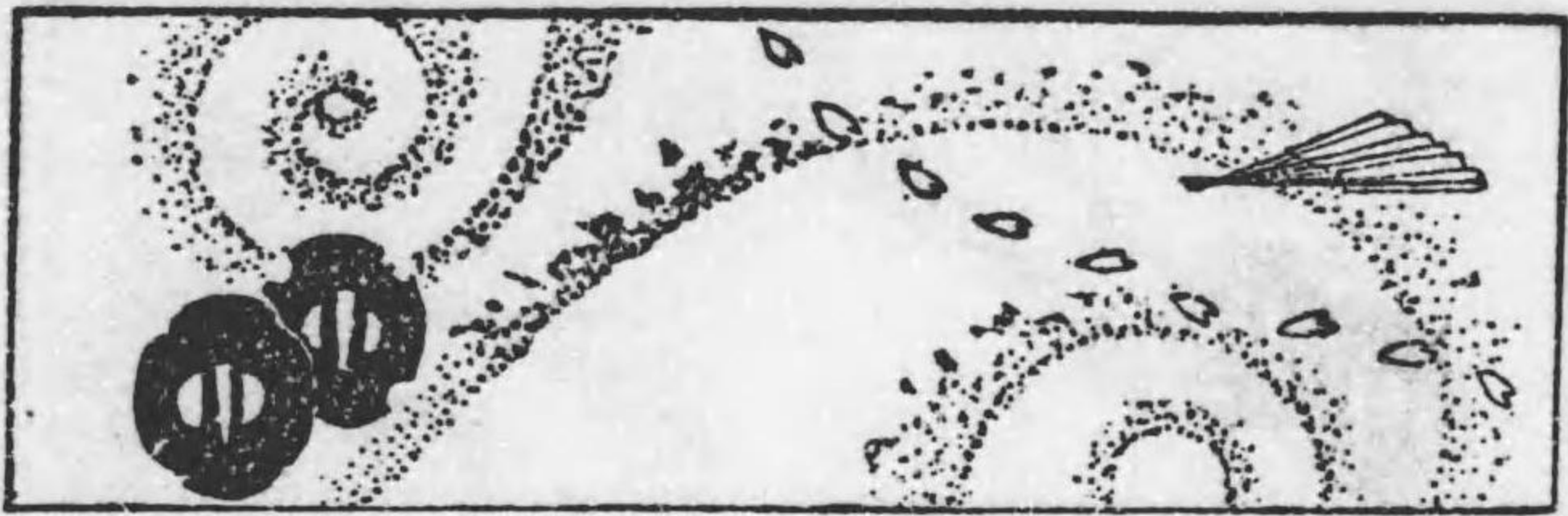
れて下され候へと申せば、奉行聞給ひて、しばらく分別して、彼男
 の鼻をそげと申付らるゝ、此男きもをつぶし、にげんとするを捕へ
 て、ずんとそいて彼女にとらせて、此上はたがひのうらみも有まし
 きぞとて、おつたてられ、すごくと歸りけるが、男心におもふや
 う、いやゝ、此なりにては、よき女をまうくる事は成まじきとお
 もひ、たゞもとの女になかうどなしとて、はなそげ二人手を引てかへ
 り、それより五百八十年まで、
 ○ちごと法師よりあひ、てんがくをあぶり、なにしても三つ撥ねた
 る事をいひて、賞翫せんといひて、うんりんのゐんの、なんばんじ
 んのせんさんひんの、しんぜんゑんなどゝいひて、一くしづゝとら



れけるに、小ちごこんけんたんとて二つ参る、是はといへは、一つはこげたを秀句にてくうとおほせらるゝ、新發智は一つもえくはずはや残りすくなになる、おもひ出したる躰にて、ちやんうんすんといひさまに、十ばかりひつたくりて、やがてしやうくはんいたす。○又ある夜、てんがくをして、秀句にて賞翫するに、大ちご、きよもりの長刀 なんぞ いつくしま、しんぼち、佛のつふり なそく みくし、小ちご、いしやの本ぞん なそく やくし、のたいらの太政入道殿の御馬の尾に、一夜の間にねずみが巢をかけ子をうみたと平家物がたりにあるが、むかしはか様のふしぎが、



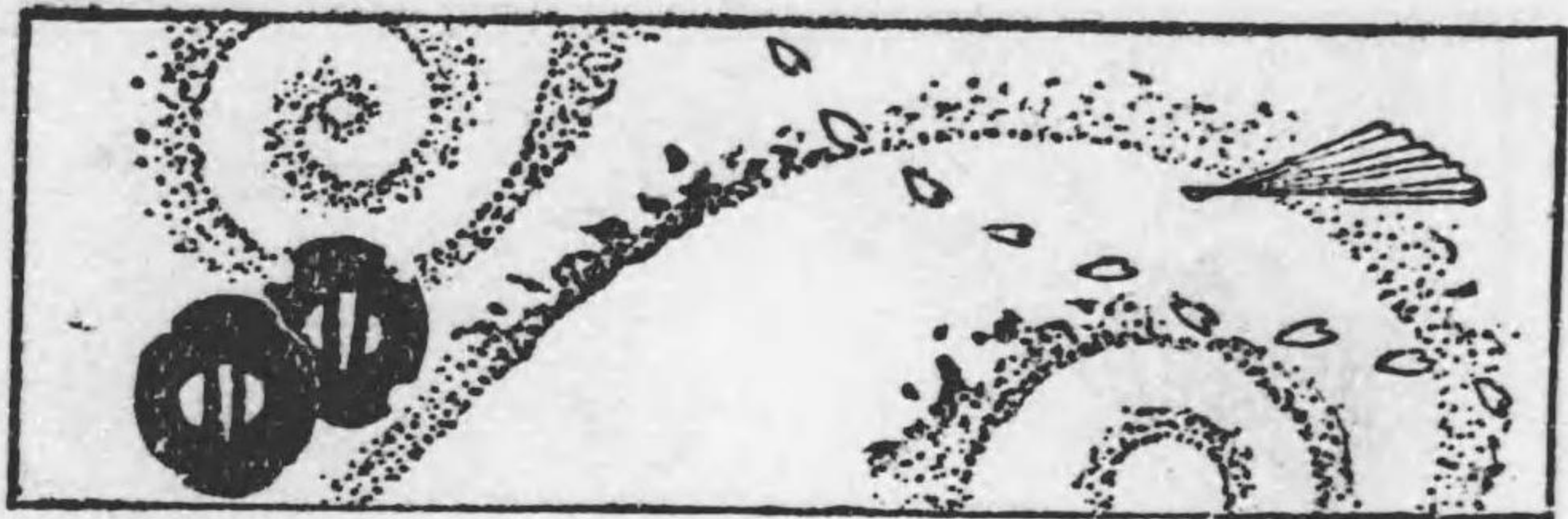
さまくあつたと聞たるが、今時は左様の事はなきといふ、或人聞て、是さのみ不思議にてもない、なぜに、我等せがれの時のあたまのかみに、なにとしやうやくしても、何時によらず、むしの子の五合や三合はあつたほどに、●ある寺に、鮑料理のさい中へ、だんなふと来る、坊主ぎやうてんして、此具は目の薬にて候と申が、まがしらにさし候か、又まじりにさし候かといふ、だんな聞てにくき事とおもひ、それは目により候、我ら見てさして参らせんとて、あふのけにねさせて、醋に鹽の入たるわたを、大はまぐりに一ばいほど入れれば、まなこの玉がぬくるとて、五躰を投げておめさける、其間に賞翫して、我等がま



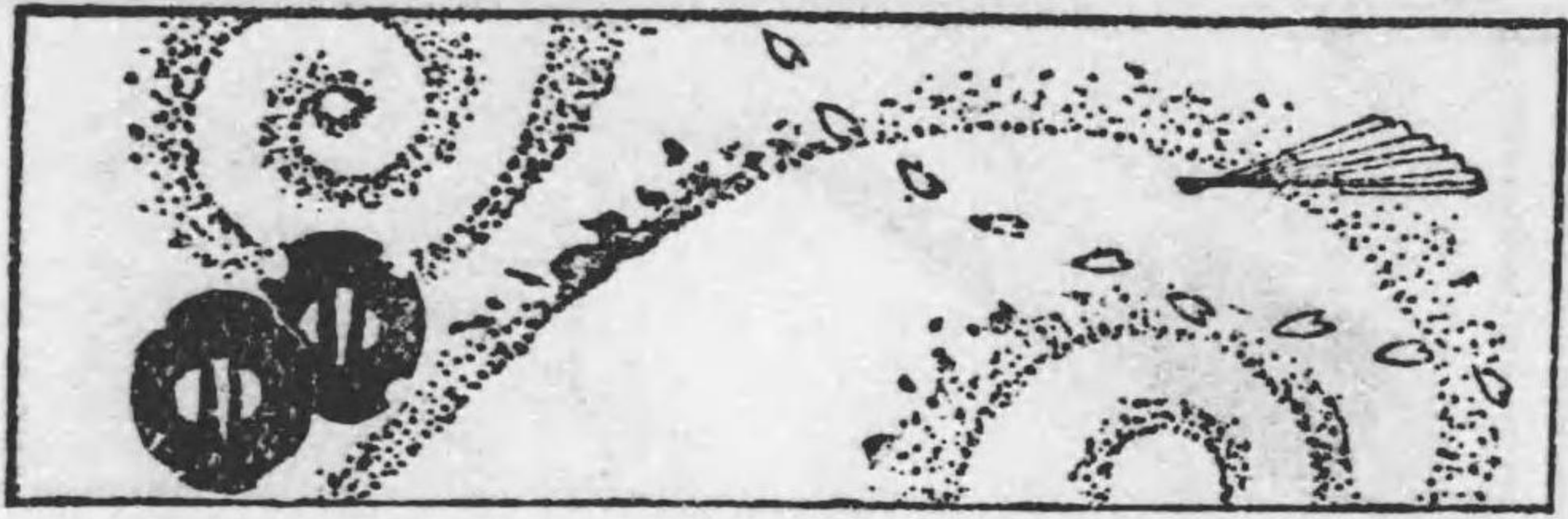
なこには、口からさしたるがふさふたるとて、みなしまうた、
 ○田舎より京へはじめてのぼりたる人、先誓願寺へ参り、御まへなる額を見て、扱々見事なる手蹟や、かいたり、せいの子ぐわんの字の筆勢は、たぶん子昂が石ずりてあらうとほめた、
 ○あづまの人の物語に、しなの、國そのはら山にて、たび人わらんづをふみさり、とくさにてつくりてはさければ、ひた物にあしのうらがみがいれて、やがてあしくびばかりになりたるといふ、つくしの人は是を聞て、尤さこそあらう、九州にても、あんらく寺のけんさんのでんもくを、夜ごとにねずみがさしりけるが、てんもくは堅し、ねずみの歯がひたものちびて、此程は尾ばかりに成たるというた、



○むかし下京に道無といふ者あり、よき娘をもつ、よき所へ肝を煎うといへば、いかほどの身上ぞと云、四國のぬしにてあつたが、今程はらう人じやと云、道無聞てさてさてきやうこつや、十石とる人にさへやらぬものをとて、中くさくもいれなんだ、
 ○あるもの婿入をするるとて、先へあん内のために、女ばうをやりける、しうとまんぞくして、様々のよいをする、扱ひすめを近づけて申けるは、そちのは何にてもげいが有かといへは、むすめ聞てたこれが上手じやが、みなかねをもちてならひにくるといふ、それは心にくい事じや、さらばやくしやをあつめよとて、方々よりそれくくのげいしやをあつむる、扱ひて殿御出にて、三々九度のしうげ



ん過て、しうと申されけるは、むて殿のたいこ承はりおよびて候
なにか一ばんあそばせとて、たいこを出す、大御酒にたべゑひて候
へ共、御所望を仕らねば慮外にて候ほどに、そといたさうとて、大
かたぬぎ、かたばちあつとつて、なむあみだくと六さい念佛をた
かくと出しければ、座中の人々けうをさましける、
○そこつなる若衆、もちを参るとて物敷を心がけ、あまりふためい
てのどにつまる、人々笑止がりて藥を参らせても、此もち通らず、
なにかといふ内に、天下一のまじなひてをよびければ、やがてまじ
なうて、そのまゝちりげもとを一つたゝさければ、林檎のごとく成
もち、三間あまりささへとんで出る、人々是を見て、扱もめてたい



事じや、此まじないちとあそくば、あぶなかつたが、さりとは天
下一程あるといへば、若衆聞給ひて、さのみめいじんにてはない、
あつたら物を内へ入るやうにしてこそ天下一よ、二でもないといは
れた、
○あるもの、火事にあひけるを見まひにゆきければ、其女ばう申け
るは、何にても惜しさものは御座ないが、こきん、まんえふ、いせ
物語、是三いろをやきたるが、何よりもをしきというたるよしを、
友だちの所にてかたり出し、さてくやさしき事かな、さほどなる
身上にてもなかつたが、さだめていにしへよき人のむすめか、又は
名ある人のかゝれた物共にてあらうと、此女ばうを事のほかにほめ



ければ、此友だちの女房つくくと聞いて、我も家をやきてほめられんとて、あやまちのよしにて、其夜家に火をつけ、ことごとく焼く、扱あくる日、知人諸親類あつまりて、扱々にかくしき事かなといひければ、この女ばういひけるは、何にても別にをしきとおもふものはないか、こぎね、まごども、いせすりばち、是三色が惜しい事じゃとてないた、

○むかし嵯峨のてんわうの時、無悪善といふ落書をたてた、御ふしんなされ、あるほどの物しりをよせて、御よませ候へども、さらにこれをあかすものなし、爰に小野のたかむらと申ものまかり出て、無悪善とよみた、其時御門げさりんなさるゝは、たかむらより遙



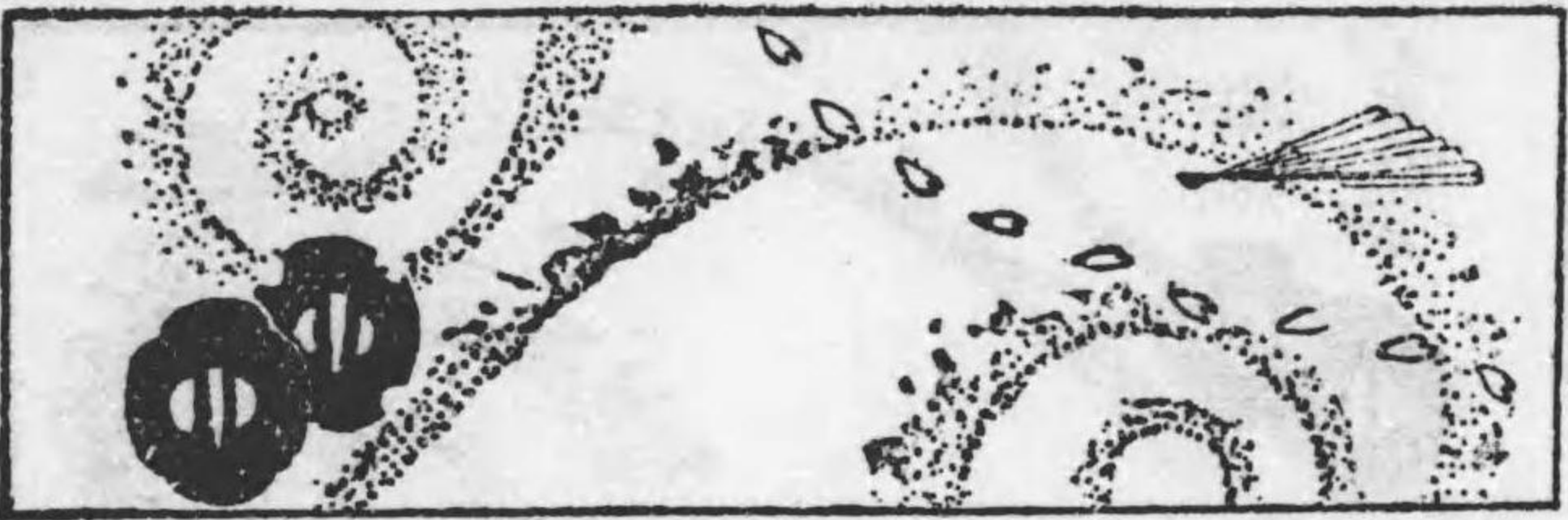
かものしりさへ、えよまぬ物を、此ものよみ申たるは、さだめて其たかむらがたてつらんと、すでに流罪におよびける時、たかむら申けるは、物をしり候へは、けつく罪過におこなはるゝ事、めいわくのよし申上ければ、物をしりたらは、さらは何にてもむつかしく、よまれぬ事をたくみてよませ候へと、物しりどもに仰付られければ、子の字を六つ書て御よませ候へば、たかむらなんなくよみけるほどに、さては物しりと仰られて、るごいを御ゆるしなされた、

子子子子子子

○ある人舞を一段とじまんして、月夜に一條の辻にて舞うた、よき舞かとおもひ、立よりてきゝけるが、一人づゝみな歸る、八九十ば

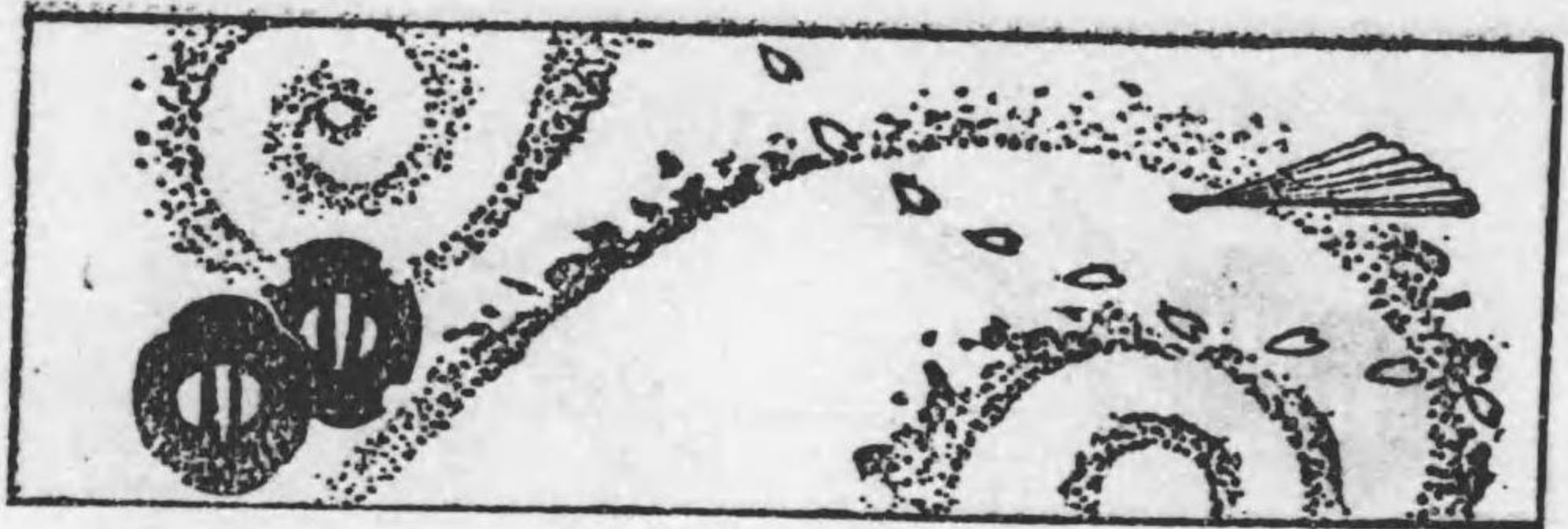
かりなる姥うば、一人残りてさめくとなく、あたりなる者申ものまをすやう、あれほど下手へたの舞まわが、なにほどあはれにてなくぞとてわらひければ、いやあはれにてはなかな、我等われらがざうりをかせと申まをされた程ほどに、かしてあれば、しりにしきけるが、此舞このまひがはてたらば、かへりたいと申まをた、

○ある人十二三なる子こを寵愛てうあいして、常にうたひを教おしへけるが、せつかくならへ、やがて十月十三日に成なるを、百はたご食くひにつれてゆかうぞ、よくおほえて其時そのときうたへと云いふ、程ほどなくおめいこうじやとて寺てらよりあんないある、いつものごとく、かならずとふれらるゝ、さて彼子かのこをよび出し、明日あすは寺てらへつれて参まをるぞ、うたひをわすれな、



かまへてよき時じ分に、とゝがにらまうぞ、其時そのときかしてまひ、あふぎを取となほしうたへと、ねん比ひにいひよくむる、さて十三日そのちにおや子こづれにて参まをり、方々はうくのつきあひにて、次第しだいくになほる、先まにあひ衆しゆへとてぜんをすえければ、むすこにつことわらひ、のうとゝさま、百はたごとは此事このことかと云いふ、おやめいわくして、きつとにらみければ、よき時じ分ぶんぞとおもひ、かしてまつて、まつがねの岩いばまをつたふこけむしと、たかくとうたうた、

○御若衆おわかしゆさま、御おすがたと申まをし、御心おこころねと申まをし、まことに残のこるところも御座ござない、されども余所よそへ御出おいでなされては、人の刀かたなわきざし、又は鼓太鼓つづみだいこなによらず、ねうちをよくなさるゝ、是この一つのきづが

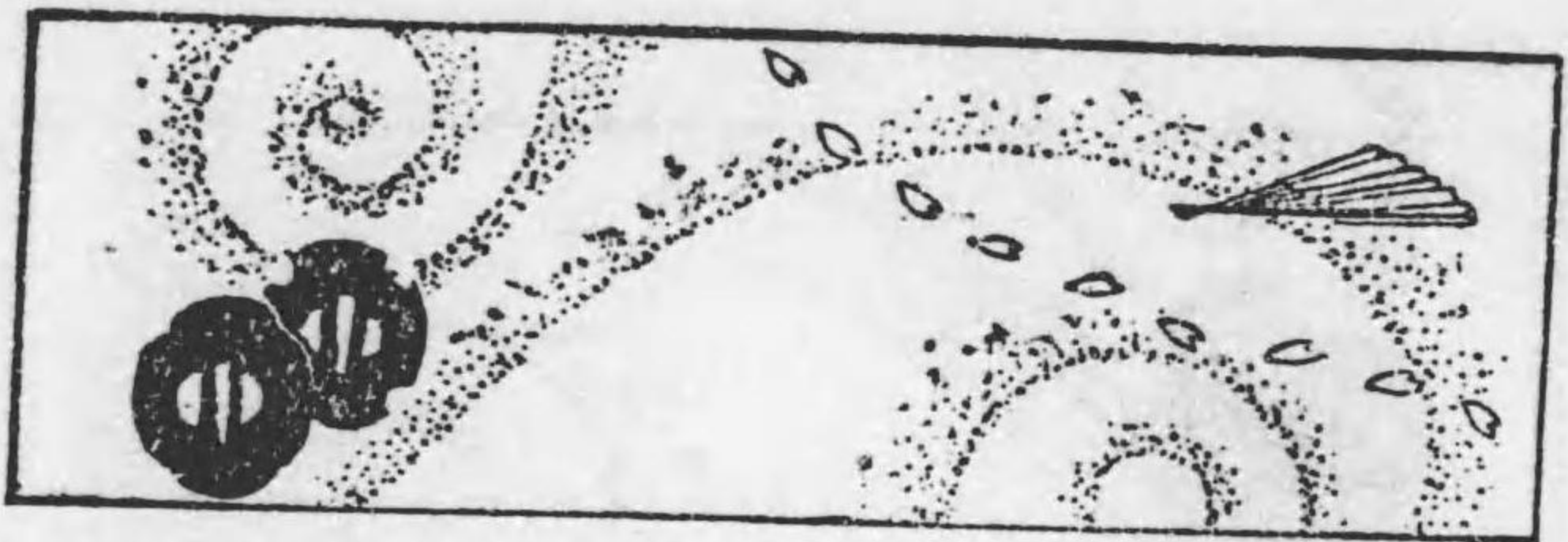




何よりのきづじや、今よりはちと御たしなみ候へと云、若衆さこしめし、扱々過分なる御いけんじや、ずいぶんたしなみ申さう、誠にこのやうなるかたじけなき御いけんは、百貫にてもかはれまいと、はやくはせた、

○ちちごさまへ申す、ほういんさまは御留主か、いやちぶつだうにかさして御座る、かさとはなに事ぞ、ひだるさにかんともきんともはねられてこそ、

○さる寺にて、じゆんれいとはちひらさと、寝物語するをさしければ、じゆんれい申すやう、さてくゝいかなるいんぐわにて、我等はかやうにあさましき事や、せめて天下を三日しりたい、さあらは國



く、つちだうのいたじきを、たかくとつくらせ、えんの下にて其はうちと、ゆるくとはなしたいと云ふ、はちひらき聞て、貴處はそれほど鈍なゆゑに、諸國をめぐる事じや、其身に應じたるねがひをしたるがよい、たゞ我等は京の國を、一日なり共しりたくなせに、町中の犬共を、みなうちころさせて、ゆるくとはちをひらきたいというた、

○上京にひらばやしと云人あり、此人の所へ田舎より、文をことつかりけるが、このもの平林といふ名をわすれて、人によませければたいらりとよむ、そのやうなる名にてはないとて、又よの人に見せければ、是はひらりん殿とよみける、是でもないとして、又さる者



きのふはけふの物語選

七十六

に見すれば、一八十ぼくくとよむ、此内ははづれじとて、のちに
は此文を笹の葉にむすび付て、かつこをこゝに付て、たいらりんか
ひらりんか、一八十にぼくく、ひょうりやくとはやし事をして
やがて尋ね逢うた、

鹿の巻筆選

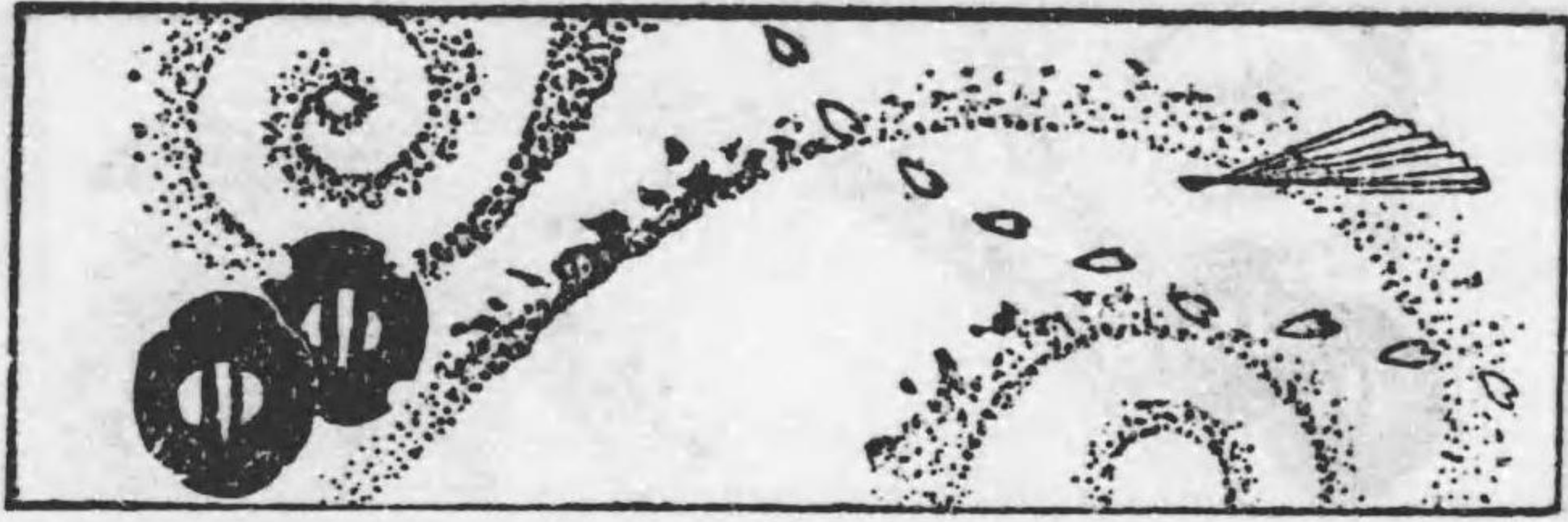


鹿の巻筆選

鹿の巻筆序

それやまとおわらひの初めは、むかしくあつた所に、曾呂利といひけるおどけものも、御機嫌なほしに出たる、もつてまゐつたといひしよし、初めて萬の言葉に花を作意の軽口は、あまれく世にひろまり、月待日待の眠を覚ます、お伽坊主の膝をいため、上つ方の御前にては下がりのさしあひ多く、かたり罵るも狂言綺語の道すぐに、三佛生の縁は異なもの、我が庵は都の戯言いひ鹿が住む隣にて、世をうち大和繪師古山師重、風流の繪そらごとは、誰が結び染めた鹿の巻ふてきは御免、

○通り町三丁目へ年頃なる男來りて、若き者に向ひ、ちと物たづねま

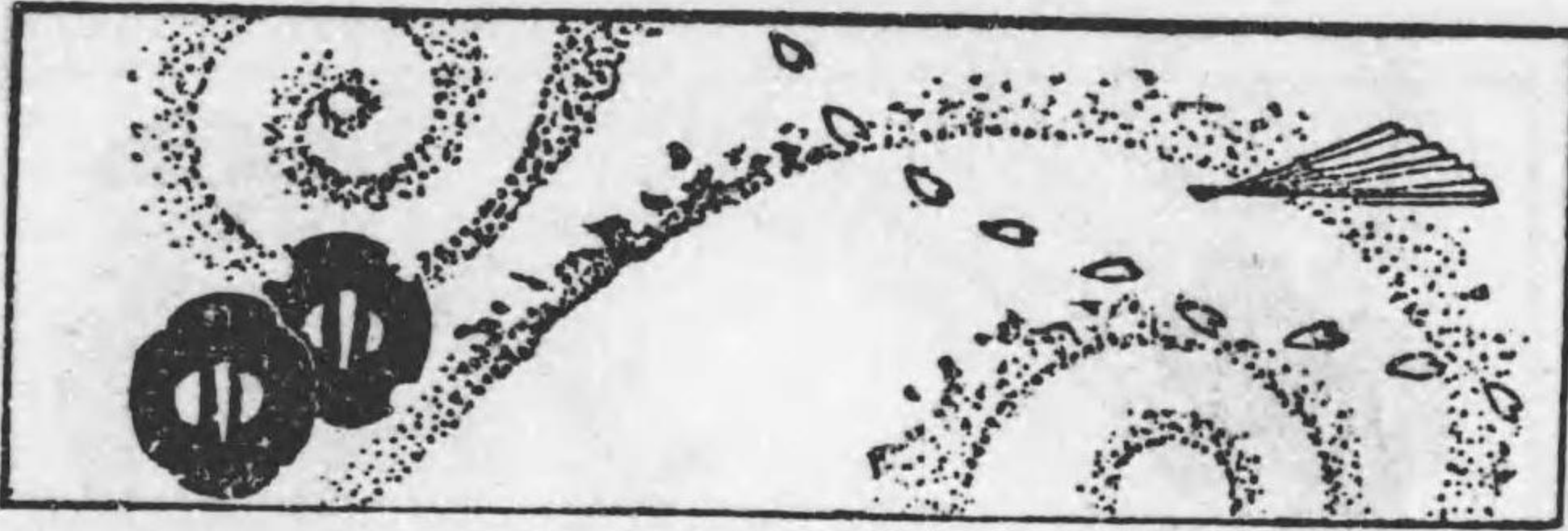


したといふ、何事ぞと問へば、此所等に尋ねたき人ありといふ、名は何と問へば、忘れ申したといふ、家名はと問へば、是も忘れました、さて途方も無い事をいふ人じゃ、それでは知れぬといへば、私にはるく遠き水戸からまゐつたものでござる、教へて下されぬば二日路の路を歸ります、さりとはいふ、此男も氣の毒に思ひて、責めてかたしろても覚え給はぬかと問へば、名も家名も皆さすやうなといふ、暫く考へて、さては向ひの上下やどに松葉屋有助が事であらう、松葉もありも刺す程にといふ、いやそれではござらぬ、扱はかみ屋はりみのかみかと問ふに、それでも刺ござらぬ、まつとさつく刺すものじゃといふ、今おもひつけた、伊賀屋の八兵衛かと

いへば、それくといふて尋ね逢うた、

○通り町にじゆりやうしたる筆屋あり、名を能登のかみといへり、十四五なるわつばを使ひける、おのれのと守の内に、長吉は似合はぬ、さくわうと附けうといふ、長吉聞いて、まことに長吉とは異なるものでござる、さくわうと附けて下されませい、わつばへも通じますと申しける、こゝにまたのとのかみの家主に八兵衛と申す男ありしが、後に暇を取りて、のとのかみの弟子になりけり、わつばの言ひけるは、のとのかみの御内に、八兵衛とは言はれまい、名を變へてよかるべし、おれも長吉とは似合はぬとて、旦那のさくわうと附けられた、そなたの名はつぎのぶと附けうとて、家主より来る





入兵衛を次信とぞつけにける、さてわつば入兵衛を次信と附けまし
 たといへば、のとのかみ聞いて、さてく憎い奴かな、次信はちの
 れが爲に隣敵なるに、何故次信とは附けたとて散々に叱る、さくわ
 う聞いて、さてく旦那はあろかな事をあつしやる、お前の大屋に
 わられましたさかいに、つきのぶと附けましたと申した、
 ●田舎者三人連にて江戸見物の爲に來りしに、先屋敷々々を見ある
 さけるが、火の見櫓を見つけ、一人の言ひけるやうは、國元にて聞
 き及びし雲の上人さまといふは、是にてあらうといふ、一人が申し
 けるは、見れば侍さうなほどに、天然浪人といふものでござらう、
 中にも年の寄りたるもの申しけるは、屋敷に何に浪人があらう、上

に太鼓がある程に、雷の下屋敷だというた

(田所町にかうしう屋の甚右衛門とて、代々法華宗にて物いまいを
 せらるゝ、舊冬二十八日まで商賣いそがはし、飾の道具もこしらへて
 る故、作介を呼びて飾繩を絢へといふに、作介手を支いて、不重寶
 なる私、飾を致さば碌ではござるまいといふ、亭主氣に掛けて馬鹿
 めがというて、そばなる薪を投げつける、作介これ旦那またなげさ
 をなざるゝといふ、甚右、さてく是非も無いたわけじゃ、左様な
 事を吐さぬものじゃ、明日は大つごもりぢやに、必ず粗勿をいふな、
 殊に元旦には諸事取り落し、物を打ちわりなどしても、目出たくな
 りたとはかりいへと吩咐けるに、棚より物あちかくりければ、作介





ちうにて取り、我があらん限りは、滅多に目出たくはせまいといふた、

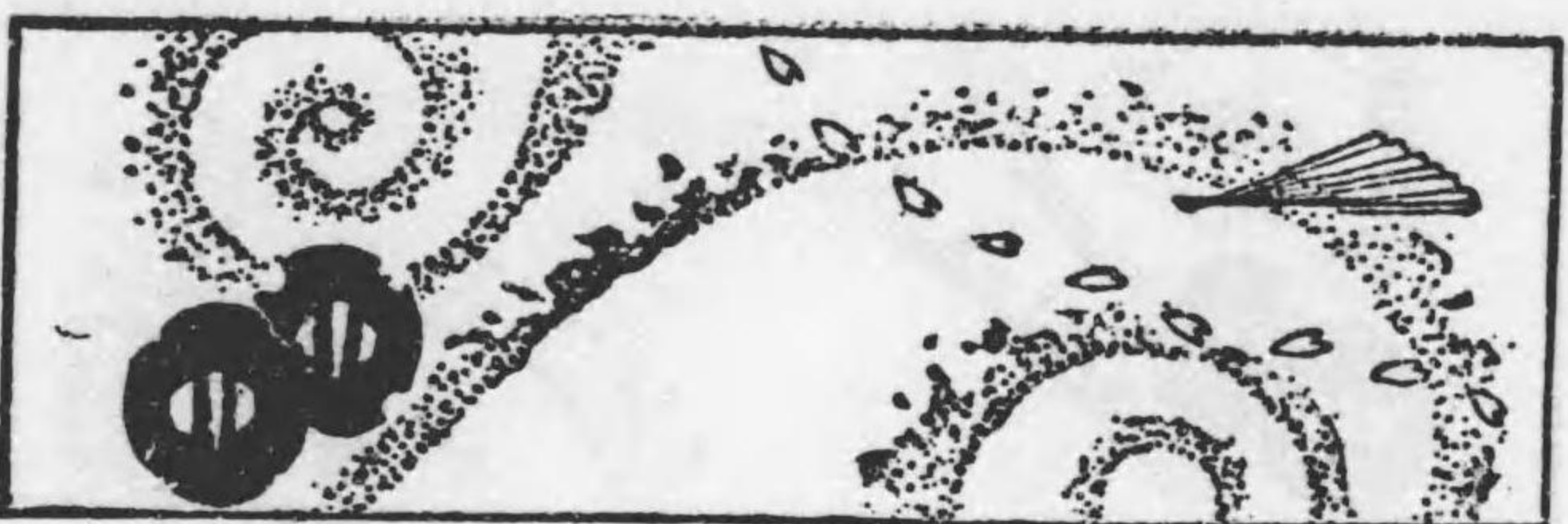
○とつと浮氣なる者吉原へ行くとして、道にて馬方に行き當り、殊の外に腹を立ちて、散々叱りければ、馬子も理窟ものにて、さまざまに言ひあひ、いよくに怒りて脇指に反を打つて、おのれたと一打にせんといふ、馬子も耐ぬ奴にて、おのれが首もかねぢやほどに、むざとは斬られじといへば、かねなりとも斬らんとて抜きければ、元の口には似ず何處ともなく逃げければ、抜いたる脇指をすごとくと指されやうもなければ、おのれでも斬らんと馬の細首を斬り落しけり、町のもの出合ひ狼藉者として捉へて、所の代官へ連れ行きける、



代官ふたがしらにて支配し給ふ所なれば、兩人出合ひて公事を聴き給ひ、さりとは物もいはぬ畜生を斬る事、人を斬りたるより尙罪科深し、何所のものなるぞ、ありのまゝに申せと仰せければ、通り町何町目、大屋は空右衛門、親は八兵衛、私は九十郎と申すといふ、一人の代官、兎角深き科人なれば、詰牢へやれと仰せけるに、又一人の代官仰せけるは、八兵衛子九十郎斬つたほどに、あがり屋へ遣れと仰せられた、

跋

嵐に散れる木の葉も、陽氣を急いでまたほの芽出ち、秋は元の如くに紅葉の色、かはりたるうき世の中、讀むとも盡きぬ話の、ほんに古めかしくも、座の興によ



りて改まること、聖の言語に古きを温れて新しく話す、是れ才覚たるべし、されば疵跡もなき虚事を見て来たやうにいひつゞくるも、衆なる女が源氏六十帖の許しを取り集めたる一と草は、林に繁き落葉などに等しけれども、鹿氏が心にかなへて、道の巧みなるは稀なり、さるによつて此あとよりは、はなし問屋と名附け、一冊に撰じ出すものなり、御望の方々は板本まで、御書付御越しあるへく候、鹿氏吟味を遂げ書き入るものなり、

元禄五年巳五月

作者 鹿野武左衛門

輕口露がはなし選



輕口露がはなし選

ふりにし元禄年中にみやこの名ぶつ露といへるものあり法會の庭に出てはけうあ
るかるくち咄しをせしに京わらんべのもてはやしてつゆの五郎兵衛とわらひける
がとしふりて露休とあらためて坊主あたまをふりありきしがそのうち身まかりて
今はむかしのものかたりその餘流をまなひ今にもかるくち咄しおほしといへども
名にきこえたる一くち今にはなしのたれのみ残りてあさなくわらひくさにおく
露がはなしとなつけこゝにちりばむることにいたしはむへれ
いはひの月日

某 序

○ずんと文盲成田舍侍、供人少々めしつれ、京むろ町をとほり玉ひ、
家々の暖簾の書付を見て行けるに、よめたる字一軒もなし、或所に

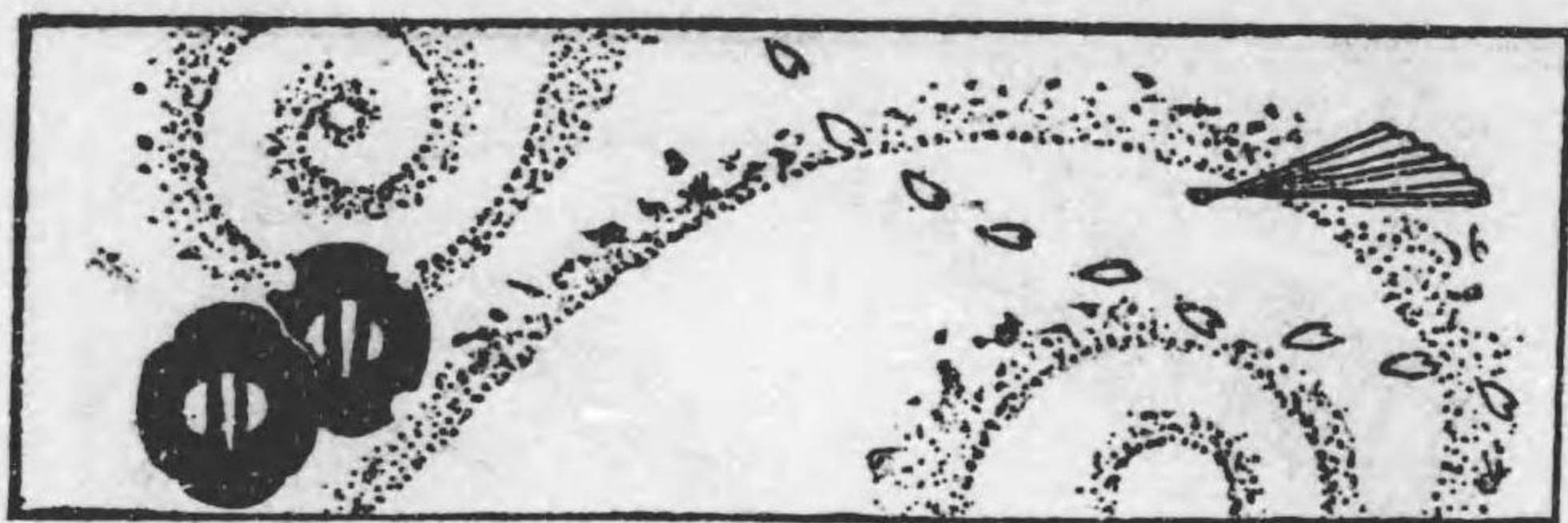
輕口露がはなし選

八十五



戸をさし、貸家かし藏と書付しを、しばらく立止り、ひそかに下人を呼び、あれは何といふ字じやと問はれけるに、かし家かし藏ありと申す、主人うちうなづき、尤手はよろしからねど、いかにとしても文章がよいといはれた、

○ある人のかたへ、夏の比容きたりて、素麵をふるまひけり、からの粉をたづぬるに、紙袋に書付なくて、氣のせくまゝにあれこれとさがし、漸々取出し振舞過けり、日暮におよび、むすこ外よりかへりき、親父いふやうは、あのかみぶくろには、それくの入たる物を書付せよ、惣じてかさつけのない物は、いそぐ時のやくに立ぬぞと云、いかにも心をましたとて、頓而親父ねられける時、紙帳に



大筆にて、此内におやぢ有と書付た、

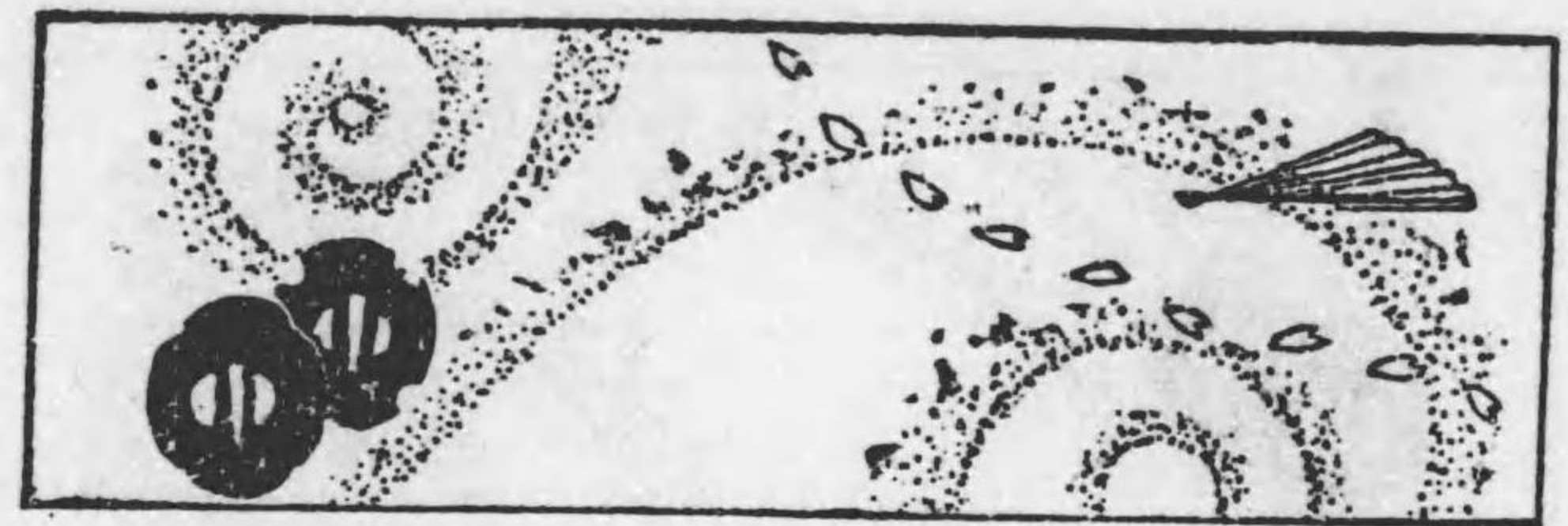
●利口成者の咄しに、茶道坊主といふ言葉を、そばにゐける人聞いていふ様は、尤ちやを立るなれ共、あれはさだうといふ物じや、惣じて茶にはさといふこと葉を用とをしへければ、彼者がいふ、それは其方の申されやう無理也、さとちやと同じことならば、笹屋の三郎兵衛を、茶く屋の茶郎兵衛というても大事ないかと云た、

○重言をいひ付たるくせにて、夜の夜中にもあらばこそ、晝の日に、山中の山なかにて、馬からあちて、落馬して、うてのかひなを打をりて、醫者のくすしに懸て養生して、りやうじゝたれば、やうくなほりへいゆしたといふを、友達聞きて扱もそちが言葉は



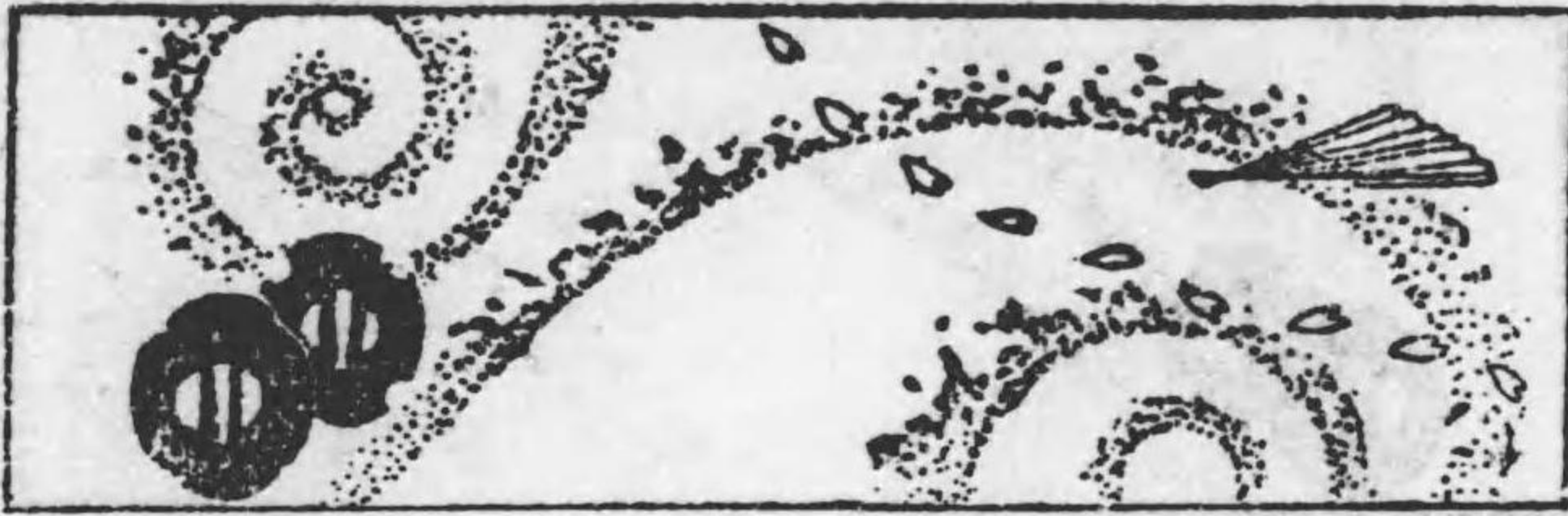
みな重言也、よそにて左様の言をかならず申されなと、かたく異見すれば、彼者へらぬ口にて、返答せしは、其方は文盲な人じや、聖人賢人の語に多く重言有といふ、それは何の書物に有といへば、諷の本に有、高砂の浦に着にけりく和有、それは目出たい事故くるしからず、然らば跡とぶらひてたび玉へくといふ謠も有ぞや、

○或在郷に七十ちかき姥あり、にあひたる者の方へ、よめ入をするに、牛にのり二十許の孫に牛の口を引せ行なり、道にてさはる荷物の有をみて、孫牛に聲をかけ、のいてとほれと云、姥これを聞、そらて通れといはんこそ本意成に、のいてといふ言葉は氣にかゝり、不吉也、いやくけふは行まいと、よめ入をやめけるも興あり、

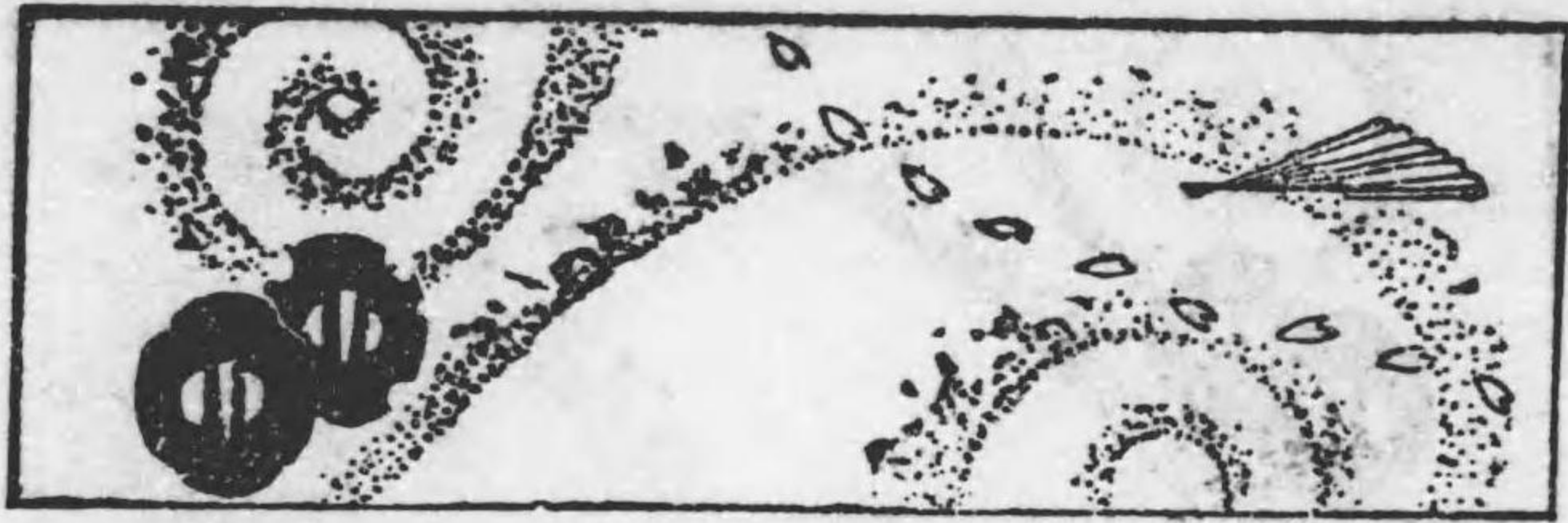


○或町に寄會有けり、二階座敷にてつとめける、事過てかへるるに、長座にくたびれ、そさう成者はしごのもとにて、大あくびすると、尻の邊よりほんと言のせしを、そば成人とんさくを申された、扱も天下大へいて御座るといへば、彼者も、さればこくどあんどいたしたといふて笑うた、

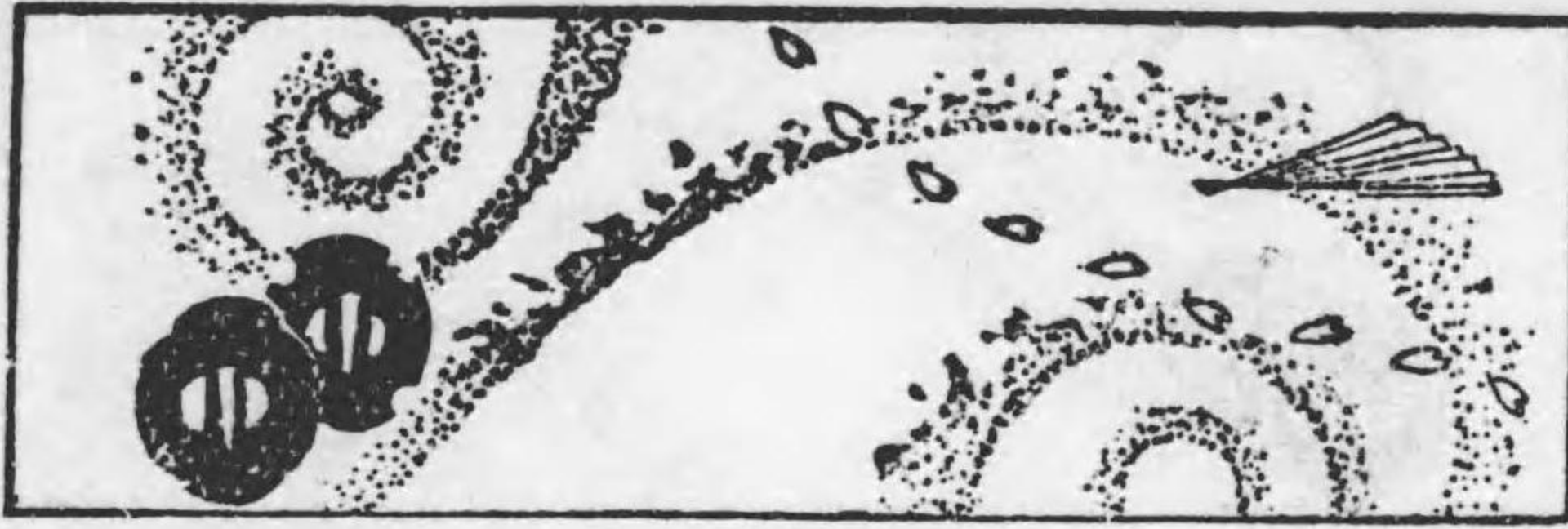
○さる寺にうつくしきお兒有けり、旦那參られて、小僧を近くよびて、あの見はどなたの子なれば、あのやうにうつくしいぞといふ、小僧あれは屋敷方のお子なり、爰の弟子に成に御出有といふ、旦那きゝて、あれが思ふやうならば、あの見を女子にしてほしいと申せば、小僧がいふやう、いづれ人の目は九分十分じや、さたはないこ



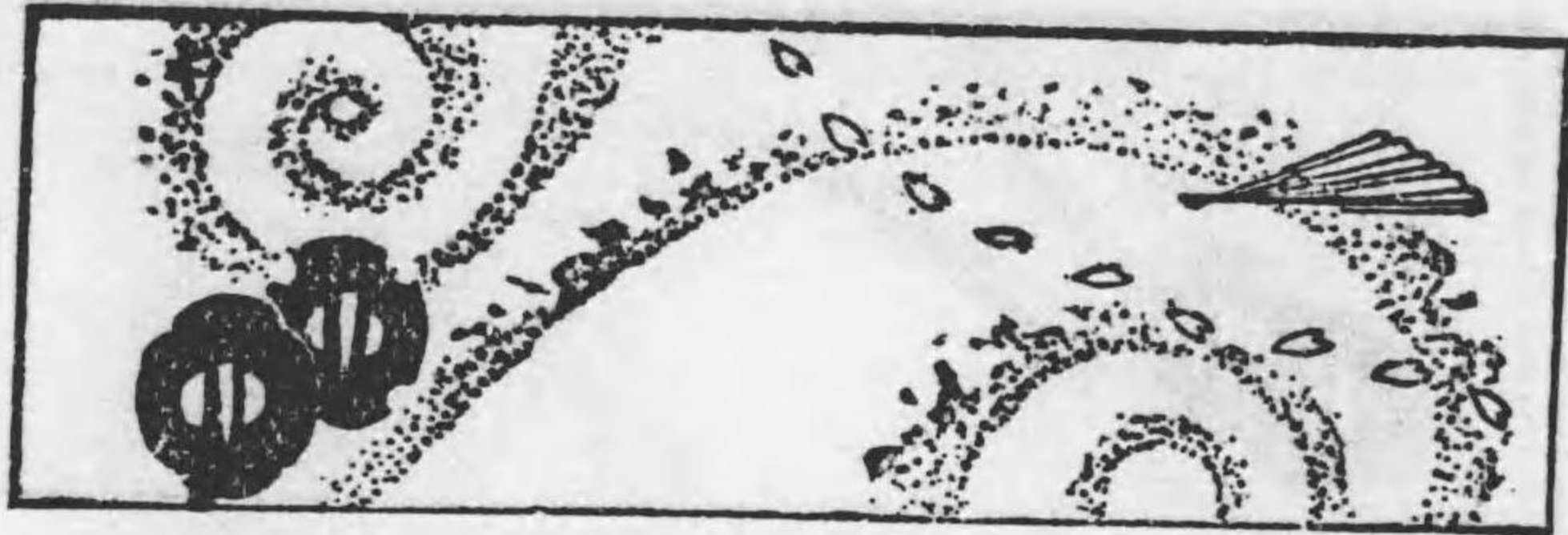
と、長老様も左様に御申あるというた、
 ○夫婦おどけ者にて、嫁も娘もあつまりて、冬の夜寒の折ふし、と
 うふを二三丁もとめ田樂にする、親父いひ出すは、おのゝ秀句を
 いうてくふべしと、嫁やがてわれは佛のつふりと申て、三くし取て
 のく也、ひすめはいなば堂とて、やくし取たり、母は屏風のかげよ
 り出るをみれば、髪をばつとみだし、たすきをかけ、左右の手にて
 目口をひろげ、われは鬼なり、みなくはうとて有たけ取たれば、せ
 んかたなさに親父は、ふるき手ぬぐひをあたまにかぶり、手をさし
 出し、乞食に参りた、一つづつとらして下されといふ、
 ○さる醫者いせ講の有し所へ、風と立より、此はいかうにぎやかな



る跡じやと申さるれば、亭主申は伊勢講にて御座候、それは御太義
 といふに、されば貴様の薬と同事にて、よくまはり候といへば、
 ことの外醫者よろこびかへりけるに、又存知たる所へ寄ける、爰も
 ごたくたと、いそがしく料理しけり、亭主申は、今ばんはいせかう
 つとめ申也、さいはひの所へ御出なされた、勝手にて酒ひとつまい
 れといふ、これは御太儀ながらも目出たい事と申すれば、亭主され
 ば貴公の薬と同じ事にて、さいくあたりますというた、
 ○じやうのこはき者、二人寄あつまりる所へ、門をはなし
 鳥くと賣ありく也、一人が云やうあつばくらといふ鳥は、とび
 魚に成といふ、又一人いやそれは大きにうそなりというて、兩人赤



面してせりあひける所へ、わるじやれなるをとこ一人來り、此せん
 さくを聞、むかしよりも山のいものうなぎになる杯といひならはし
 けれども、つひに見たる事もなし、然れどもさも有べし、おれも此
 廿五日に、北野の天神へまゐるとて、はちくのかはごうり一足十九
 文にて買はいたるに、宿へ戻りみれば、長刀になつたというた、
 ○十二三成むすこに親見するは、おのれに何をいひ付ても返事せ
 ず、打うなづいて許ゐるていたらく、近頃見ぐるし、おし五郎にて
 はあるまい、人の物いふには、いやをの返答申せよ、但しうなづく
 許にて物事濟ば、しぜんおれが目が見えずば、その風俗は見えまい
 し、然らば一代塚のあく事は有まいなど、さんぐにらみ付けし



かりける、子がいふやうは、返事を高聲にしたればとて、もし親父
 つんぼの時はというた、
 ○さる田舎に、一村皆一向宗にて、道場へまゐりて、御讃嘆を聴聞
 いたし、事おはりて講衆申さるゝは、佛前のみつぐそくの内、らう
 そく立を仕なほし申さずばなるまい、あの鳥を何んぞ餘の鳥に好み
 申度が、何とおもはるゝやといへば、いづれも此義に同じ、されば
 鳥やには鳥もいかい也、何がよかるやとせんぎしけり、其中に小ざ
 かしき男のいふは、とかく白さぎにめされかといふ、座中此義然
 るべしと談合さはめけるに、坊主罷出て申さるゝは、いや〜さぎ
 はむやうになされ、其しさいは、どちやう坊主にさし合じや、



○上京新在家あたりを、三十許の男とほりけるに、西の方よりとし
ころ成女房、下女一人めしつれ來るとて、此男をみてほやくと笑
より、粗忽ながら其方さまを、私所へ御供申たさと語る、此をとこ
常に色このまぬにもあらねば、早速に同道して、かの女の所へ行見
れば、れきくの家ゐなり、やがてろぢの戸をあけ、屏風引ちらし
たる座敷へよび入、種々料理をくはせ、さて最前の女房いふ様は、
ちかごろ申かねたる義におはしまし候へども、わたくしはこれの養
君に、乳をまいらせしうばにて御座候、今年十六になり玉ひて、あ
ちこちより縁付の事のみ申參しが、そもじ様に、一めあはせまい
らせたく存、さてかく申入たる事に候まゝ、是非御あひ下されよと、



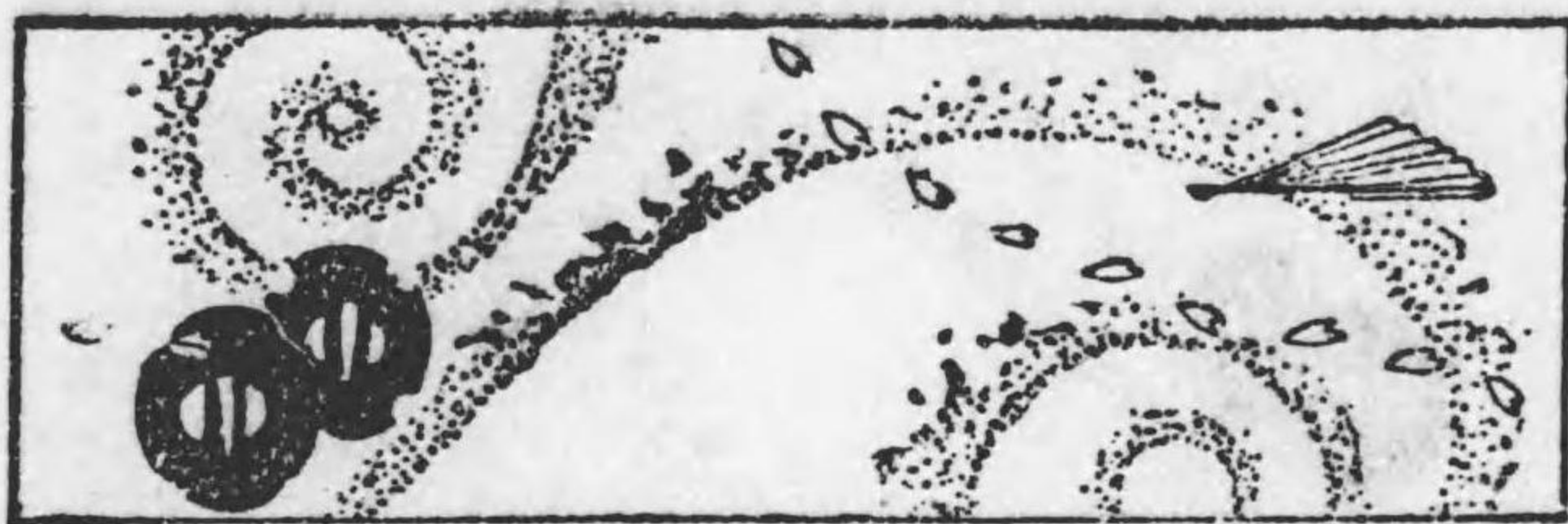
手をとりのくの間へつれ行けり、男夢かうつかなどと思ひなが
ら、ふるひく屏風のそばまで行けり、かのうばむすめの枕もとへ
寄ていふ様は、もうしおまへ様に、かゝせられますなと申證據は、
此人を御覽じませ、おかきなさるゝとひとしく、あの人の顔のやう
に、みつちやが出来ますというた、
○ある山家に欲ふかさうばあり、人の物と見ては、木の葉ひとつわ
ら一すじ成共、きれいくとたくしもらふ也、ある時大さ成鼠をと
らまへそこなうて、尾許引ちぎれ捨けるを、それをくれよといふに、
人これはねずみの尾なり、そなたにやりてもやくになぬ物よとい
へば、かの姥成程やくになつと云、何にするやとへば、その尾を



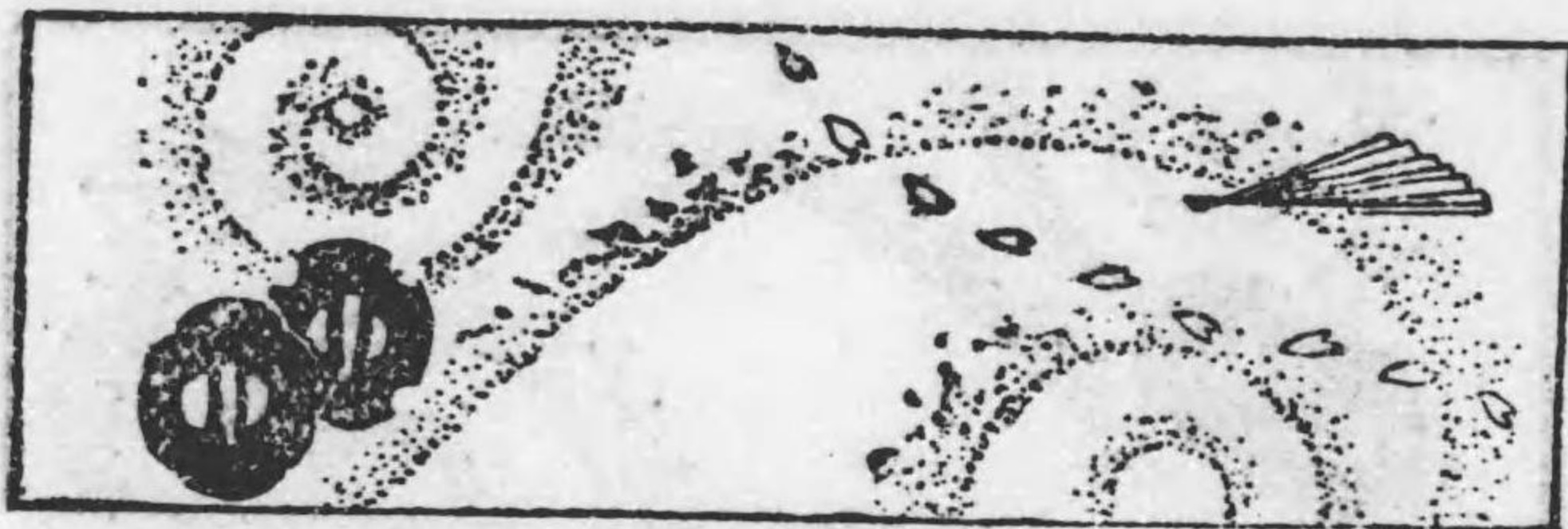
干ておき、姥が家に代々傳りたる、錐のさやにするというた、
○ある寺に年ふりたる松木一本あり、老僧は少人にたはふれ、あの
松は男松であらうか女松であるべきかといはれたり、歌よみの子が
申さるゝは、女松にておはすらん、月のさはりになるほどに、土民
の子がいふには、をとこ松じやと云、あれほど松ふぐりの有物を、
○それ／＼に忌こと葉のあるぞかし、茄子には、まふといふことば
を百姓も思ひ也、都七條朱雀にて、なすびを植うる百姓あり、又そ
の節は吉祥院開帳の折から、參詣の人に勸進をせし舞をまふ男あり、
或時とほりあはせ、見れば大きな土工李に盃をそへて有、ちと是
をなん望にや思ひけん、島へ立より、さらば一ふしまはんと云ふ、



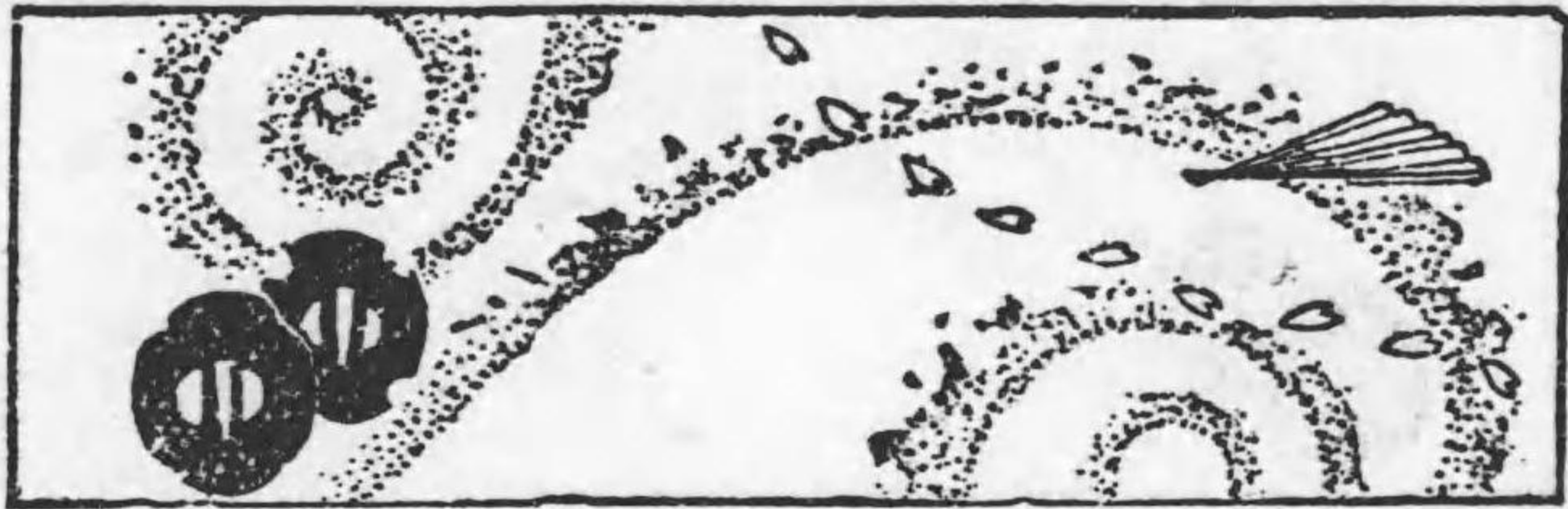
百姓聞てあらもつたいなや、門出あし、と大に腹立しけれど、とかく
いひより、酒をのみのませけるが、立て行さまに、ささほどの腹立
は、たがひにねもはもをりない事よと上ぬりを申た、
○されいずさ成もの有、けぬきを持って口のはたのひげをぬきむた
り、そば成もの少それをわれにかし玉へといふ、かし候はん間、む
さい所をぬき玉ふなとてわたしける、扱もよくふけぬきじや、なん
てもたしなみ人かな杯とほめちらし、大かたしまひ、のどの下をぬ
きければ、かの者いふやうは、それむさい所よと、ゆびさし、けれ
ば、のどの下にむさき所が有やと、がめければ、成ほど／＼むさい
御身の下帯をはさむ所じやといふ、



○夜ふけて三條大はしを通る者あり、むかふより來る人に、橋の中
 ほどにて行あたり、それをとがめ、たがひに口論になし、一人は大
 男一方は小男、双方につかみ合、大男は苦もなく小男をくみふせ、
 馬のりにしてゐたり、小男今は、やこれ迄と思ひ定め、九寸許のさ
 すがをぬき、つかんとせしを上成大男、これを見て高聲に、やれ人
 ごろしよ出合〜といふたは、組ふせて居ながら比興者ぞと、
 ○おどけたる者、或時長老を申うけ、齋を進じけるに、老僧だんな
 にむかつて、今朝の追善は、六親の内たれ人の年忌、どなたのため
 にて候と申さるれば、亭主いんぎんにかしこまり、手をつきまさ
 舌の口上にて、高く〜と申けるは、御尋にて御座候條、つまびらか



に申上へき、今日は、拙者か兄嫁や妹むこのしうとの日て御ざると
 申た、
 、、こびたる口上うるさし、只親の日といはいて、
 ○ひがし山黒谷の邊に畠をうつに、となりの百姓通りあはせ、是は
 何をまくぞといふに、彼はたうち小手まねきして、あゝ聲がたかい
 ぞ、ひきう〜といふ、扱は世にまれなる唐物の種を植うるにやと
 思ひ、心得たりとさし足して、ちかく寄たれば、いかにもあのれが
 聲のてうしをひきくいふには、大豆をまく、烏や鳩がさく程に、
 ○月花の遊興に、琴三味線を引もよほすは、人間のならひ也、さる
 程此度われら西國より上り、海上永々かゝり、めづらしき事を見侍



輕口臺がはなし連

るといへば、座中何事なるぞ、おもしろき事ならはなし玉へといふ、
さればしやみせんは人間許のなぐさみてない、海底の魚も引ならふ
といふ、それは近比聞およばぬめづらしき咄しなり、但貴所も久々
西國の住むにて、口かしく、御江戸にはやるけいあんことばを申
されけるといへば、いやしかも小うたにのせて、鱈とぶくと毎日引
あそぶ也、其小うたは、たんたらふくつるてん、たらふくつるてん
と引、

○むかしは大金持の大じんなれど、世の盛衰とて近年おちふれ、雜
式の金ぼうよりいたきびんぼうにたゝかれ、あしこしもなやみはて、
せんかたもなく乞食になり、或時は清水寺、又は北野七本松の邊に



て、往來の人に袖乞してけり、然るところへ當流の大じんと見えて、
友たち多くつれだち、大に交りにて辨當したゝかにもたせ、上下さ
ざめきありく所へ、かの乞人やぶれあみ笠かぶり、物を乞、折ふし
おとに聞えし幫間にへたとあふむ也、はづかしく思ひ、ちやくと見
ぬ顔せしが、何が當世のとほり者の幫間なれば、むかし恩を見たる
よしみあり、彼袖乞人にことばをかけ、少し小腰をかどめいふやう
は、もうしおまへは、そんじようどなた様にては御座らぬか、扱も
久しや、して是はいかなる事にて、かやうの御すがたにならせ玉ふ
ぞと、いとしみくとたづねければ、むかし僧上いうたるくせに
て、あゝ音たかしく、必さたはない事、わざと此身に成て、親の

輕口臺がはなし連

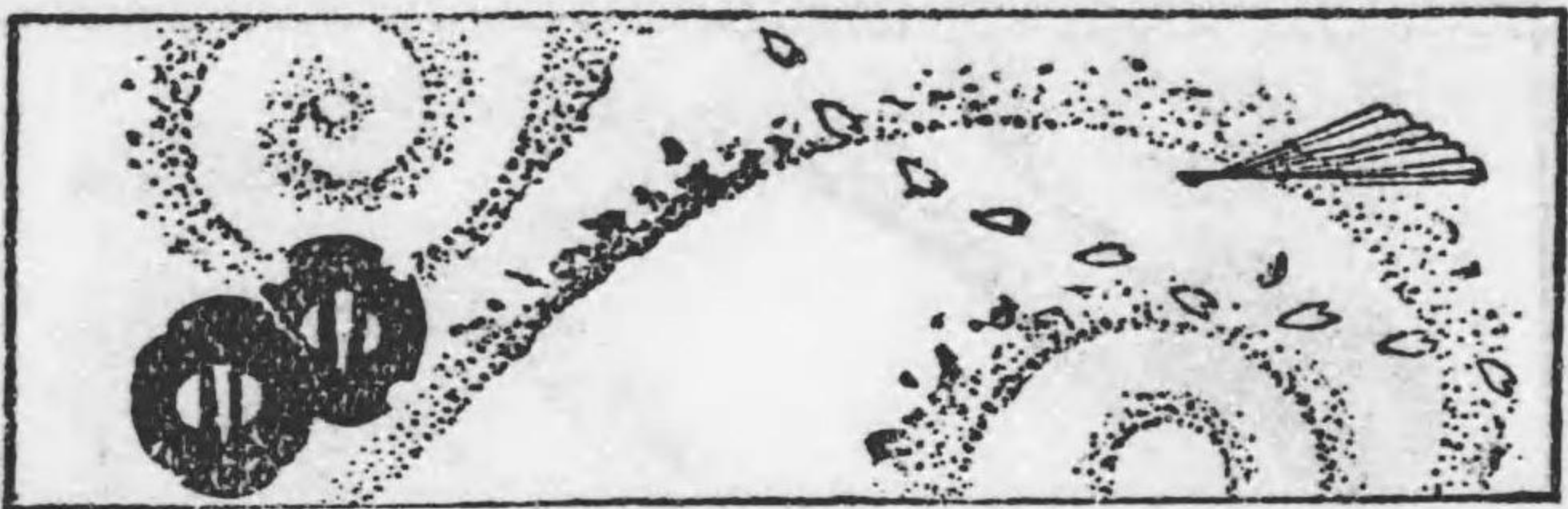


かたきをねらふといふた。
 ○ある所に、印判屋はとし比の親父にて、常に眼鏡をあて、細工せられける、去人いんばん一つ誂へ、さき銀をわたし、いつくの日
 は出来申けいやくして、扱其日印ばんを取に行ければ、折ふし親父
 他行いたし、百の錢十二文ぬけたる廿許のむすこがいふやう、
 其方様は見知りませぬといふ、先日あつちへ申時、そちは爰に居て
 よく存たるはずじゃに、何とてさやうには申ぞ、今日夜舟にのり大阪
 へ下る也、是非いんばん請取べしといふ、件のむすこ今しばらく御
 まちなれと、いふよりはやく親父の目がねを取出し、わが目にあて
 て此人を見て、私は見知らねども、おやぢの目金で見れば、先日御

出なされた人じやといふて印判を渡た、

○さいく醫者衆へ出入をいたしたる人有、醫師病人にむかひて、
 瀉するか結するかと問はるゝを聞て、ある時其子細をとふに、瀉す
 るとはくだる事也、結するとはくだらぬ事也、是はこびたる言葉や
 と思ふ折ふし、親類中の商人來りて、明日長崎へ罷下が、なにも御
 用の事は候はぬやといふ時に、何と長崎へ瀉するとや、やがて無事
 にて結せよといふた、

○あけくれぶらく類ものあり、醫者の許へ行て脈を見せければ、
 薬ばかりにては中く治しがたき性也、これはふじ三里に、おもさ
 ま灸をすえられよといふに、病人、かさねて談合申すべしといそぎ



宿にかへり、扱々うつけたるくすしの申されやうや、富士はきよちよびたる大山也、其ふじ三里が間に、灸をせよとは、いかに病かなほるとて、そもやそも、もぐさがつとく物かと、

○明後十一日靈山宿阿彌に於いて御酒進上申度候、御出可忝候以上、あのく同道していそぎける、亭主本走の小法眼が書し龍虎の二幅一對をかけられけるを、みなく立より詠め居て、ひとりの文盲成をとこ、つくく虎を見て、扱も此猫は上手のかいた物かな、此やうないちもつを一疋持ならば、夜の目のあはぬ事はあるまいといへば、又ひとりがいふやう、ねづみ取やうな目で、何やらにらんでゐるといふ時、宿老龍の繪にゆびさして、實くそのはずで御座る、



爰なからざけをねらうてゐまする、

○有徳成町人せいじんの子供に世を譲り、その身は禪門になり、裏座敷に隠居せり、同町に又さのごとくなる人有けり、あけ暮暮を打てたのしみ、相手もかはらず、此兩人より外に碁の友とする人もなし、或日一方の人ついでに二番まけられ、赤面して打程に、又三番めの碁もまけにみえける、大石死にたる所を、一手みせよといへば、中く見せるけしきはなし、是非共これを見よ、みせまいとたかひに盤の上にて手をねぢあひ、あげくの事に黑白の石をつきくずし、たかひに腹立して、あのれおのれといひ合、向後一生そちと碁はうたぬぞ、いかにも参會止にいたすと、勘當言葉にて罷かへりける、



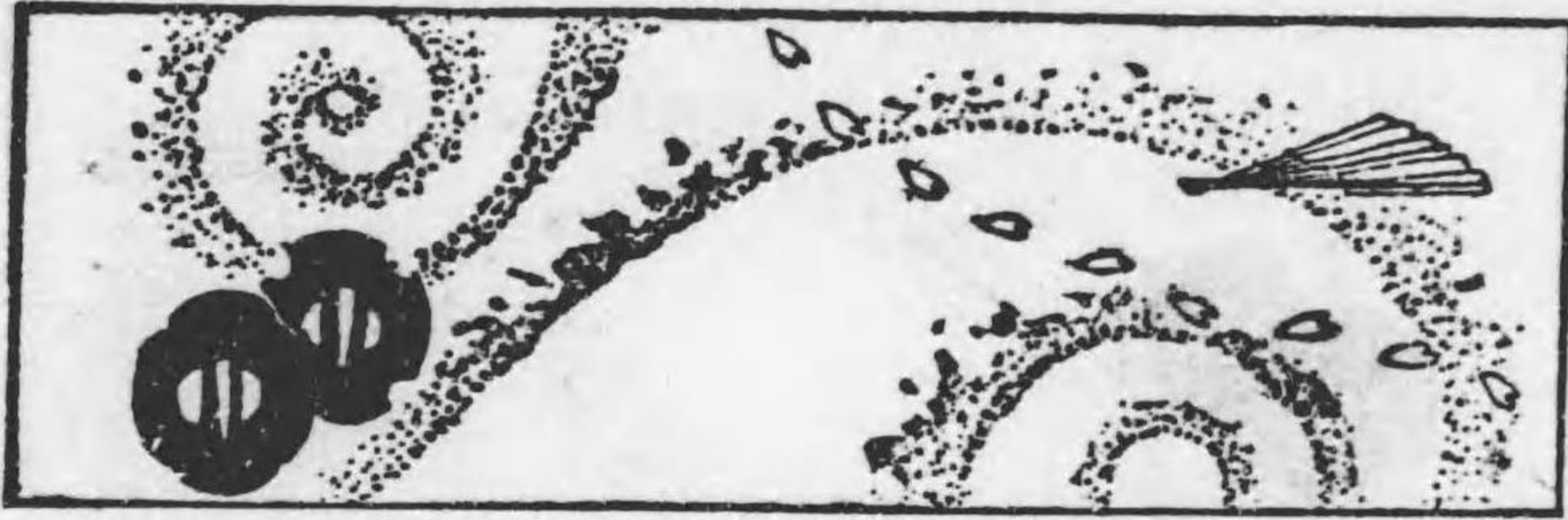


扱其日も西にかたぶき、外の友とてもなく、枕引寄つくくとけふの口論を思ひ出し、とかくひかしより、短氣は損氣といふは爰ぞかし、先程の碁、一番まけて打ならば、今時分まではしこりかゝり打てなくさまん物をと、兩方ともに後悔しける、同町の事なれば、明れば早天より、かの相手の門を通とて、たがひに尻目にてにらみあひ、一方よりいふは、なま年よつて朝はらから、碁のうちたさうなつらなといへば、門を行過たるが立止り、打たいがものれにまかしかと、目に角入てとがめける、打たくば爰へうせをれ、慈悲にうつてこそせうぞといふ、慈悲にもせよあたにもせよ、さあゝ打て見くされと、誰あひさつなしに中をなほりた、



○九州矢ばせの船にて、九州肥後の者なるとて、年十二歳なる小供、伊勢へぬけ参として兩人船に乗ける、此もの路錢すくなく持けるにや、たゞし腹中ひもじさの折からにや、一人がいふやうは、あの三上山が飯ならば、唯一口にせしめん物をといへば、又一人端的の返事に、此水海がとろ汁ならば、おんでもなう食いかねはせまいというた、乗合の中に心ある人や、此言葉を不便にや思ひけん、船中にて勸進をあつめ、錢一貫文くゝり、此兩人の者につかひける、誠に神徳有難しく、

○乞食は座入してより、袋を首にかけてありくとや、ある所にて辨説にまかせ、口をすごしける乞食を、さんぐたゝきければ、此こ



じきしたゝかたゝかれて後いふやうは、おれも神主のながれ也、汝
 にかならずばちがあたるべしと、大きにのゝしりけり、それいかな
 ればさはいふぞと問ふに、此袋は、忝も社也、それをいかにあれ
 ば、紙の宿り玉ふなり、社だんじやというて、りくつにつめ、なぜ
 に打ちやくしけるぞ、弓矢入まん堪忍ならぬと、大きにねだれば、
 打ちやくもたゝきもせぬ也、おのれ乞食にて、くれよといふにより、
 慈悲にもさまくはしてとらしつたといふ。

○眞言寺へ村中のこらす入院振舞によばれ、住寺弟子に申付、寺の
 住物ごとくくとり出し、それくの道具の名をいうて見せられた
 り、何れも見物いたし、其中に輪によくにたる物は何と申ぞといふ、

是はりんぼうと申物じやといふに、もんもう成百姓、さてくむか
 しより、つひに見た事がない、耳にきくさへいやじやに、まして目
 に見る事うるさし、はやく捨玉へ、其びんぼうをと、

○江戸の芝居をしまばらと云、京のけいせい町を島原といふ、江戸
 よりさる人はじめて京へ上り、上京に何共ならぬこめん成人の方
 に宿取のけり、或時四條がはらの芝居を見物してかへりけるに、亭
 主今日はどこを見物なされたと問ふ、客は何心もなく、今日は島
 原へまわりたるが、扱々おもしろい事かな、酒をのむ所もあり、近
 年のなぐさみ、又明日も参るべしといふ、亭主色をうしなひ、扱も
 く悪性人かな、きのふけふのぼりて程もなきに、はやけいせいぐ





輕口露がはなし選

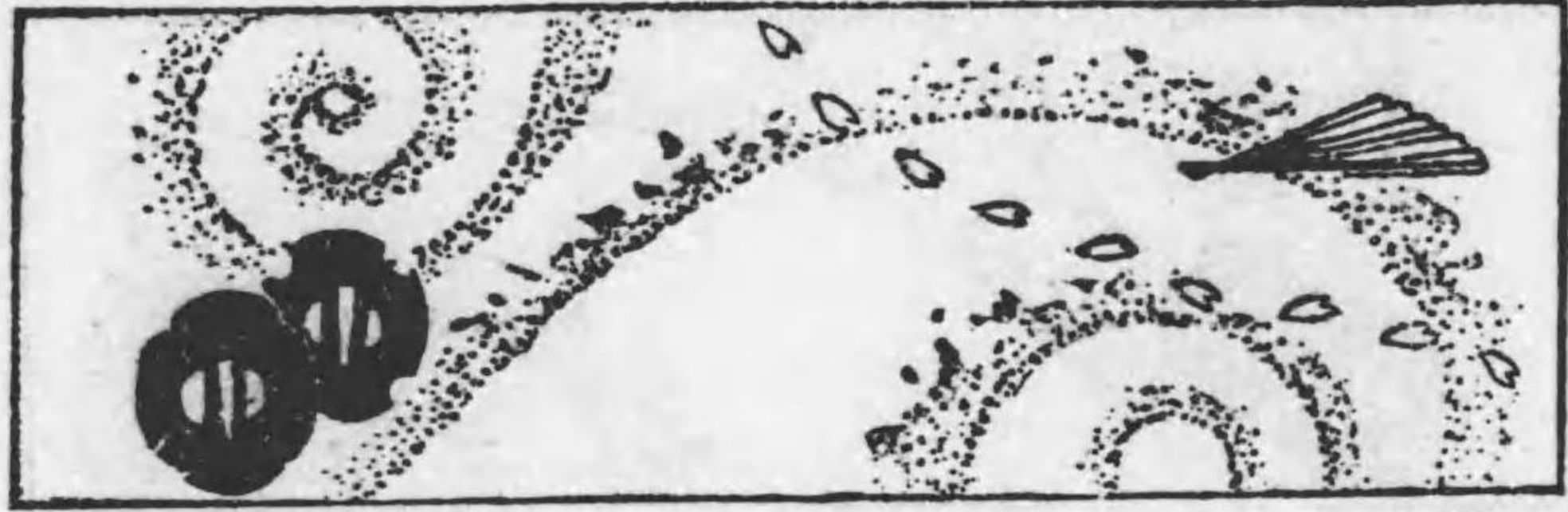
るひをめさるか^{おほい}と大に異見^{いけん}した、

元禄四年未七月吉日

百十

書林開板

輕口あられ酒選



輕口あられ酒選

○さるていしゆ、なげふしがすきにて、よろよそへゆく、かどを
うたうてありく、あるとき、夜男留主なりけるに、おもてをなげふ
しうたうてありく、内儀こちの人じやとおもひ、おもてのとをあけ
てまちゐられた、かどをうたひて下の町へゆく、ようにたこゑとて
又内に入るところへをとこ歸りけり、女房申は、扱もよくにたこゑ
有、今おもてを、うたうて通つた人、こなたかとおもひむかひに出
候が下の町へゆかれたといふ、いやおれてあつたが、うたが餘りた



により、下の町までゆきうたひしまうたといはれた、
 ○さる法花宗申は、いかに淨土、その方は何をたのみ佛になるぞ、
 こちらはあみだ如來を頼むと言、法花宗申は、それはひだるいものを
 頼む、如來は、をんなきたるとかく、女らいが何がかたじけないと、
 云、妙法の妙はちんなへんに少ほうれんげきやう同し事といふ、
 ○町方に、わかいしゆ貳參人つれにてまちをとほりけり、むかふよ
 り廿三四許なるわかいしゆ、びんあつく、まゆほそく、きりやう
 よき仁まいり候處に、二三人の内より、一人、ほめけるは、扱々よ
 きりやうかな、しやうじんの、今なり平と申し、中に一人こゝ
 ろに、おもひけるはあのようなるは、なりひらと申す、我等も、な



り平と、ほめられんと、やどに歸り、かみゆひを、よびにやり、さ
 かやきをこのみ、びんあつく、まゆほそくと、このみけり、かみゆ
 ひ仰のとほりすりけり、かの人よるこび、町方をとほりけり、久し
 き人にあひ、さてく久しうあひ不申候と一禮ありて、さて貴さ
 まは、いつのまに、なりになりやつたぞ、かの人、さて貴様は平
 をのけて、なりとはしやれた申し分、いはれたと祝ふ、眉細きゆゑ
 か。
 ○さる町にけんくわあり、さんくにふみあひければ、あたりの人
 ひらにく、かんにんあれ、こなたのあひては、にげたといふ、む
 ねんや、せんをこされた、おれがにぎやうと、おもうたに、



○極月のころ、さるざしきのところに、すいせん一本、いけてあり、さる人見て、さてめづらしいと不審がる、ていしゆ見て、その方様にも、花にころがありさうなといふ、いや心はなく候へども、かんのうちに、にんにくに花のさいたは、見はじめというた、

○高直な米、次第にさがり皆々よろこぶ、折節雨ふり道わるし、こめやの男、げたをはき四斗俵かたげ、得意へゆく、町の宿老見て米をもつてゆくかと云、米屋の男も、宿老にあひぼくり履くはりよぐわいと思ひ、たかうござりますといふ、しゆくろ、きもつぶし、又あがつたかというた、

○粟田口ににせ金いたしたものの、はりつけにかゝり、木の空より、皆



様一違たくせうの、お念佛頼まするといふ、やつこ、にらみ、今は念佛申也、重而あたしなみやというた、

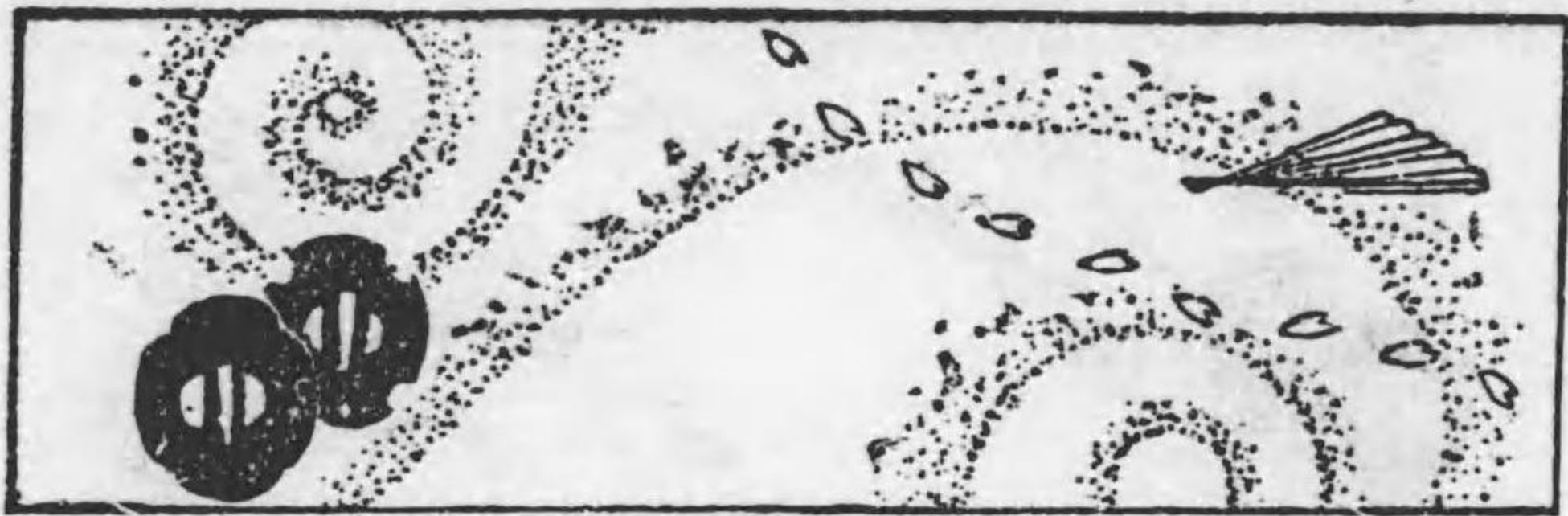
○さる人、碁に癖として、助言云ずきな人有、うち手衆、いやがり、今から助言やるならば、くわたいに錢百文宛取ほどに、かまへていやるなと申せば、かの人、助言云をこらへかね、五十文でまけてたも、そこな黒石、渡れと云すて、性んだ、

○さる所の親仁目鏡をあて、物の本見てゐられたが、とろくねいり、後には、いびきをかゝれた、内儀見て、ねらるゝならば、めがねもはずして、ろくに休たらよかろうとおこせば、おやじぬからぬかほしてゆめを見るといはれた、



○さるもの、ひたひに手をしきて、さてく、忘れた、そばなるもの、何ぞといふ、いや去年の、八月十五日は、月か、やみか、わすれた、そばなる人もたらぬ人にて、こよみをみやといふた、
○ぎやうさんぬけたる男を、紺やへ使にやるとて、色は花色にして、あられと紋をつけてといへ、あられを、わすれたらば、二月十五日にいりてくうたあられを思ひだせといへば、心得ましたとゆきけり、紺屋にてあられをわすれて、色は花色にして、しやかのはなくそをつけてたもれというた、

○さる、しほうりのちやぢ、鹽になひほそきはしをわたる、けつまづき、なみだをながす、さる人見て、さてくほそもとてにて、し



ほをこぼしなげがれ候事、もつとも也、しほうり、いや二升ばかりの事ことなるが、かはいや川の魚共が、のどがかはかんとぞんじ、それが、かはゆうござると申た、

○さる所に、御たけ二尺ばかりの、あらたなる石佛のちごうあり、さる人此地藏にむかひ、まことに、此ぢごうさま、げんぶくしやにて、むしくひばなど、御なほし被成候、わたくしも、何ぞしんだいのやくにおん立下されと申、ある夜ぢごうぼさつ、枕もとに來り玉ひ、なるほど、やくにたつべし、當年は、菜大こんやすし、何時なりとも、くきをいたし候は、おもしになるべきとの、御ことなり、



○さるかみ結のわかい衆けいせい町のあげやへゆき、上娘よびにつかはした、遊女したくの内、かみゆひのわかい衆、上娘をまらかね、いねむりゐられた、しかる所へ上娘きた、こゝははしぢか也、とこへさこしらへといふ、かみゆひのわかい衆、いや今日はとこへはゆかね、日手間をやとうたというた、

○さる人あたらしき、人のせぬ事、いたすれば、大分かねまうけるほどに、何なりとも、人のおもひつかぬ事を、仕いだし、大分にこしらへ置、一度に出し、るゐのなきうち、大分にかねをまうけんとおもひ、六疊敷ほどのところに、取こもり、一人も人不入、半年程かゝり、六疊敷にいつぱい出かし、うりにだされたが、一文にも



ならなんだ、雛の葬禮の道具をこしらへた、

○さる時、五條はしを、夜中時分に渡る、はしのまん中に、小坊主一人ゐる、やれわれはばけものか、小僧にばけるはふるいといふ、此ばけ物かぶろにばけた、いや、かぶろもふるいといふ、化ものも是非なく、小ばんにばけて、あし元にある、こばんと見て、よくがてき、ばけもの、事わすれけん、天道のあてがひありがたじけなしといたときければ、小ばんひたひよりはなれず、きもをつぶし、こばんにばけたはふるいといへば、ばけもの、今吹もふるいかと、いうた、

○江戸にては、さむらひ衆よりいしやをよび寄候ふむかひに、馬を



やる、さるいしや、うまは不得手なれども、馬にのり、くらにかぶりつきてゐられ、さう病人なればむまはやくゆく、道にてちかづき申されけるは、道才様いづれへと申す、此くらいならば、どこへ参らうやらしれぬと、申された、

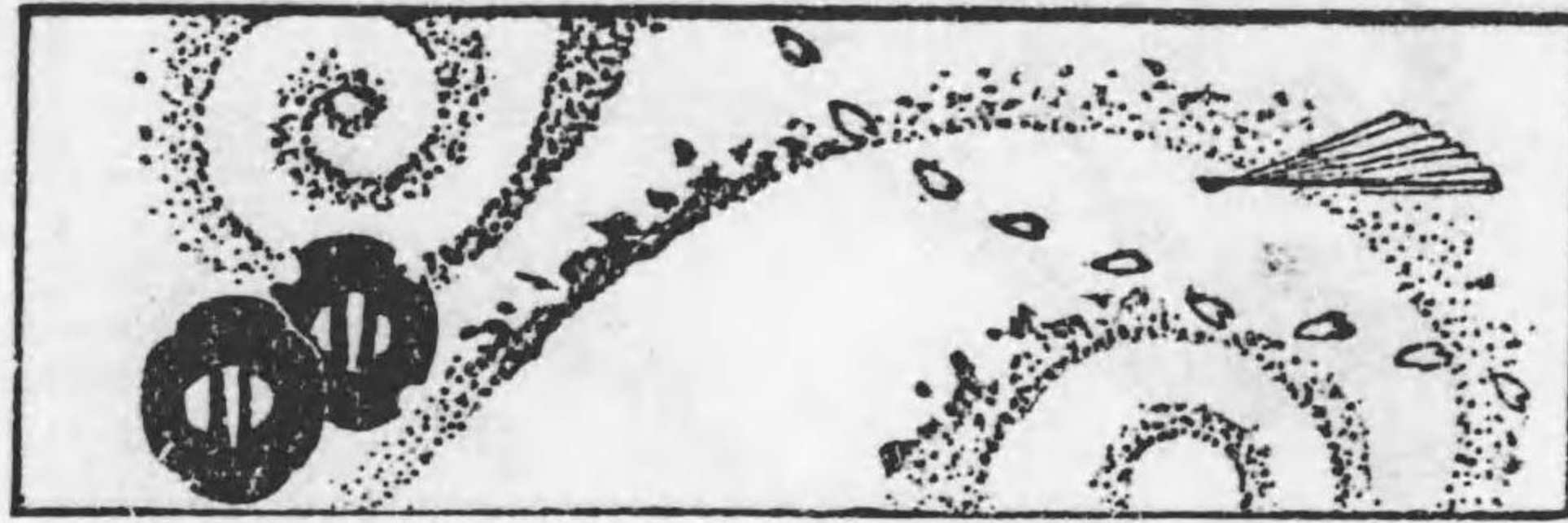
○さるおもてに、ぞうりわらんじ、大分つり置あきうとあり、そさうな人、ふし見へはかう行くかと、ひければ、内より、むかうは四文まへは六文と申す、とうた人もかたじけないとて、ゆかれけり、

○去人申され候は、世間に子は多く持べきが、おれが子程きようなものはあるまいといふ、またさる人いふは、御子息御きように御座候よし承り候が、碁はたれ位に、御うち候ぞ、本因坊に先手と



云、將碁は何と、そうけいに片香車はづし候といふ、小鼓はなにといへば、かうの清五郎に片皮はつしますというた、

○大阪からうら橋にけんくわありて、どう切して本人にげたり、あたるの人、さもつぶし、まづいしやをよぶ、外科道齋さらく来り、扱も、大分の手おひかな、かうやくを、つけられた、さつそく、なほりたり、しかし、きりこ口一處へよせてかうやくつけたらよからうに、されはなれ成につけければ、二になりてそく才になりたり、こしからうへは、手にて這う、腰から下は、足にてありく、先づこしより上は江戸へ奉公に下す、江戸にて、火の見やぐらの遠目に有付、こしから下は十年切に、ふやへ奉公にやりて、今にふんでゐら



る、
 ○さるだんな、下人よび、いけぶねの中にて、大きな鯉一ぼん、川にてあらうて来いといふ、かしまり、やがて川へゆき、水につければ、こひの一はねにて、にげにける、しつゝいへども、かなはず、やがてかへり、かやうくと申、だんな大きにはらをたて、ごんご憎きやつかな、しかしたわけをつかふゆゑ也、今はゆるす、重而、さやうのもの、あらひをらば、ゑらへなはをつけ、川のくいへ成とも、また石へなりとも、くゝりあらひ候へば、たとへ手はなれどもにげぬと云、喜藏こゝろえ、又重而、さけをす、あらへと有ければ、やがて、かはへ行、からさけのゑらに繩をつけ、川ばたな



る石にくゝり、からさけを川に入、あしにてふみつけ、さあにげて見よといふた、
 ○さるもの申は、善光寺の、によらいは、座ぞうか、りうぞうかといふ、さる又ひと申され候は、いやさねぞうてあろう、いかにといふに此程もどうしんじやが、ぜんくわうじへつきにけりと云うた、
 ○或人、加茂の芝原にてあそびゐたり、辨當をひらき、いろくのさかなとりいだし、あれよこれよといふをりから、赤犬来て、一つくはへてにげた、旦那、久三郎よ、あの犬めをすかしよせてくはせいといひすて、宮へ参られた、かへりて、酒をのみ、さかなをだせといへば、久三郎、先にくはせよと仰られましたにより犬にくはせ



ましたというた、
 ○うつけたる男、かもの競馬に、餅を賣に行たり、或もの云やう、
 此やうな人ごみには、すり有て、賣物をぬすみ、又當世の六方は、
 物をくうても錢をださず、にげてゆく程に用心をしやれといへば、
 心えたりとて荷をおろし餅をならべてゐたり、かゝる所へ、馬さ
 てさわぎけり、かの男大はだぬぎて、ぬかる事ではない、人にくら
 はれんより、おれがしてやるとて、かたはしから食うた、

寛永二年正月吉日

寺町通佛光寺下町

谷村多兵衛
神原理兵衛 板行

福 祿 壽 選



福録壽選

福祿壽序

鬼は外福は内目出たき年徳の御出苑の梅もまみふくみ谷の鶯も口なめづりする
豊あしはらの國の春大黒屋の徳左ふびすやの利州其外ぼうぐみ四五人布袋やの隠
居にて嘉例の日待ありけり彼さもしき黒札の取遣なく葦荇の煙は雲をあざむき爛
鍋の酒は泉に似たり腹筋の用心なく願のかけがれをばづし新しき輕口あることな
いこと我先にと噴出してやがておぼの茶呑時になるをもしらずあるが中に筆に
まめなる男ありて語り捨しことの葉ども書あつめ敷の巻となし笑を催す縁爾師あ
れば福祿壽と號づく予も其むしろに侍しまし月待日まち雨中の徒然などをなぐさ
むる一助ともなりなんといふことをかきつけ書林にあたふれば是を序とせり

寛永正戊子載孟正上卷

福祿壽選



○さるところに、はひ出の家來おきけるに、よそへつかひなどに行きては、わが主の事をだんな様の仰られますといふにより、その様にはいはぬものじゃ、よそではさき様の人をあげていひ、わか主の事はきたなういふものじゃとをしへおきけるに、正月の禮に旦那のともをして、或かたへゆきてものもうこひければ、内より人出どなた様とへば、あいつめてござりますというた、

○本町あたりに、長太郎ととんぼろをようさすむすこあり、げんぶくをしても、いまだにとんぼろを捕る、あまりにあほうらしきゆ



ゑ、町のなぬしどの、長太郎おやちよばれ、とんぼろとるも、ちいさいときはもつともじやが、げんぶくしてからはやめさしや、といはれければ、長太親仁はいはるゝは、とんぼろ取は命ながらふともふ、なぜにといへば、はてうらしま太郎は八せんさい、とんぼろさすは九せんさいといはれた、

○ある人たれにあふてもづきんとらぬゆゑ、友だちいけんせられけるは、われより上の人にあうては、かならずづきんをとるものじやといはれければ、心えたとて、それからいつぞはとらうくとおもはれて、ある時町のしゆくらう殿にあはれ、何がせきにせかれけるほどに、わがづきんはとらずに、宿老どのゝあたまのづきんをと



られた、おほきなちがひの、
 ○ある所にて醫者ぼん三人出あひ、ちかづきになり、たがひに名所
 をたづねあひければ、一人は魚屋町に居申といはれしに、お名はと
 たつねければすゝきたひあんと申す、またおまへはといへば、わ
 れらは八百屋町に申候、お名はときけば、あをさじゆんざいと申、
 又一人にとひければ、もはやわたくしは御ゆるしといふ、それはどう
 した事にて候や、かやうに御ちかづきになりまするうへは、いご
 も御心やすくいたしたさにたづねます、せびにくといひければ、
 然らば申すよう、けいせい町に申、名はおかさんせいと申す、
 ○さる寺の長老、ことの外鮮好にて、ふだん鮮つけおき給ひけるに、



此寺の小僧いづぞはぬすみくはんくとおもふ折りから、長老のる
 すになりければ、かんにんしかね、ぬすみくひ、長老様御歸ならば、
 さためて御せんぎがあらうとおもひ、すしのめしを佛様の口のはた
 につけておく、扱長老もどり見られければ、すし一つもなし、小ぞ
 うよびよせ、だんくせんぎせられけれど、さまくちんじける、
 それより佛前へまわり見られければ、佛の口にすしの飯つきてあ
 り、さてはすしぬす人しれたり、そのまゝ庫裡よりはうさもちき
 たり、おもふさまたゝかれければ、此ほどけ金佛ゆゑ、くわんくと
 なりけるに、まだくわぬといふかとして、なほしもたゝかれしが、あ
 まりきつきたゝきやうゆゑ、あたりでありしむはいども、かたはし



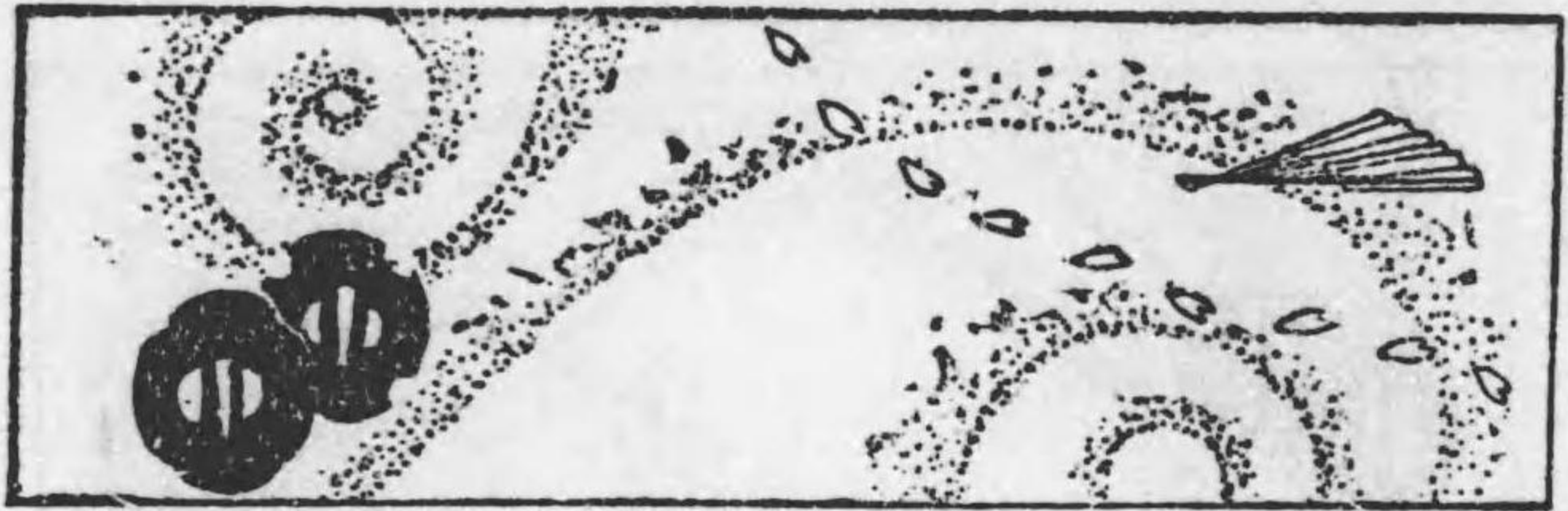
からくわらくとこければ、はてくはぬ衆はさほぐまいく、
 ○みなかより丁稚おきけるに、ちやうちんといふ事をしらず、ある時
 旦那夜ばなしに、ちやうちんもたせゆかれしが、旦那さしきへ上ら
 れければ、御供の衆もあがつてといへば、ちやうちんもちながらあ
 がり、火吹竹かり火をふきけし、てうちんもつてたつてゐる、よの
 とものをかしく思ひ、ちやうちん下におきやといへば、下におけ
 ば大事のちやうちんに、しはがよるといふた、

○ある人三人よりあひ、ひとりがいふやうは、あとの月の十五夜は、
 月夜であつたか暗であつたかと問へば、ひとりがいふは、おれは大
 阪にゐたによつてしらなんだといふ、ひとりがいふは、月よかやみ

か、こよみを見たがえい、

○客十人ありければ、さゞえ十とゝのへしに、内ひとつ猫えんの下
 へ引てゆく、だんな氣をせき、えんのしたさがし、せめてからばか
 りなりともたつね出せといひければ、長三郎からをたづねもて出る、
 それに大こんを入れて、これはおれにすえよとかたくいひつけしに、何
 とかしたりけん、取ちがへ客にすえければ、旦那さのどくがり、何
 とそこらへしやうじんのさゞえはまいらなんだかといはれた、

○ある文盲なる醫者、香齋散のさんの字に、三文字をかいてやられ
 ければ、もらひたる人あまり笑止がりて、いけんせられしに、なる
 ほどわしもしらぬではない、御心やすさにさうかきました、はれな





所へは山といふ字かきますともいはれた。

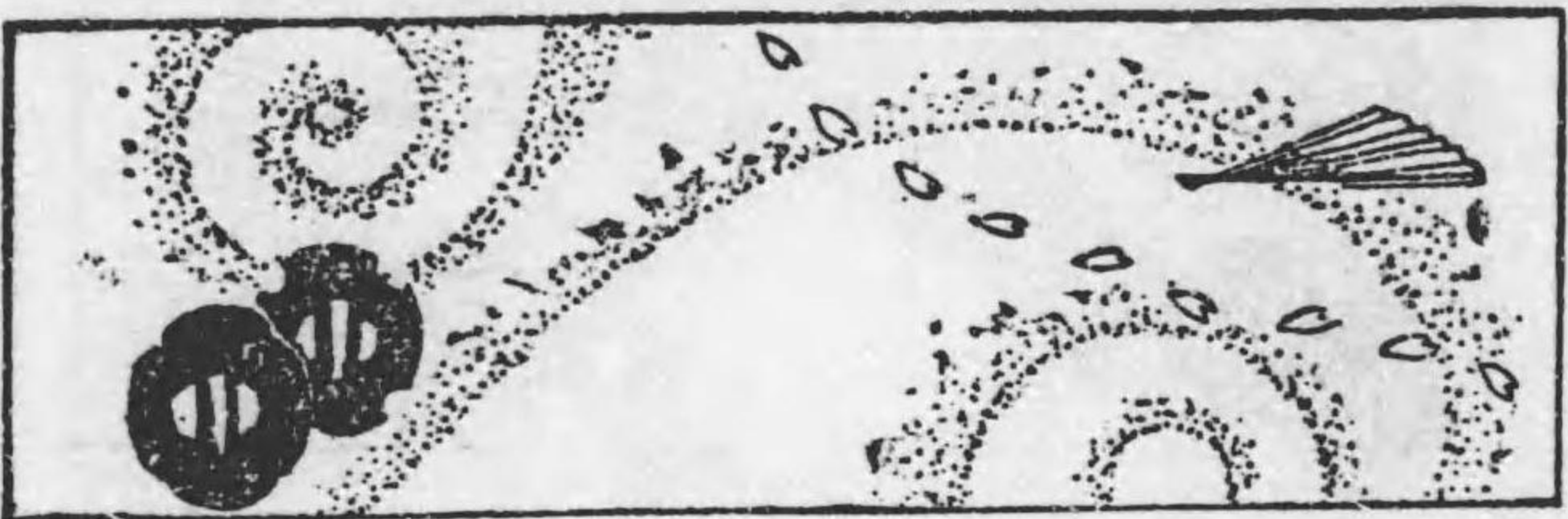
○或人貴様の鼻はさてもく見事なはなじやとほめければ、見かけはかやうに見え候へども、なかは皆はなくそばかりて御座るとひげをせられた。

○あるしはき、その隣へ金槌かりにやりけるに、あやすいことなれど、此方には御座りませぬといひておこせければ、さてくしはいやつかな、なるほどあそこに有をしつていうてやつたに、そんならこちのかなづちをとん出せといはれた。

○ある人のむすこ、俳諧をすいてようせられたれば、そこもとの御子息様は、俳諧が御上手で御座るとほめければ、あやぢのいはるゝ

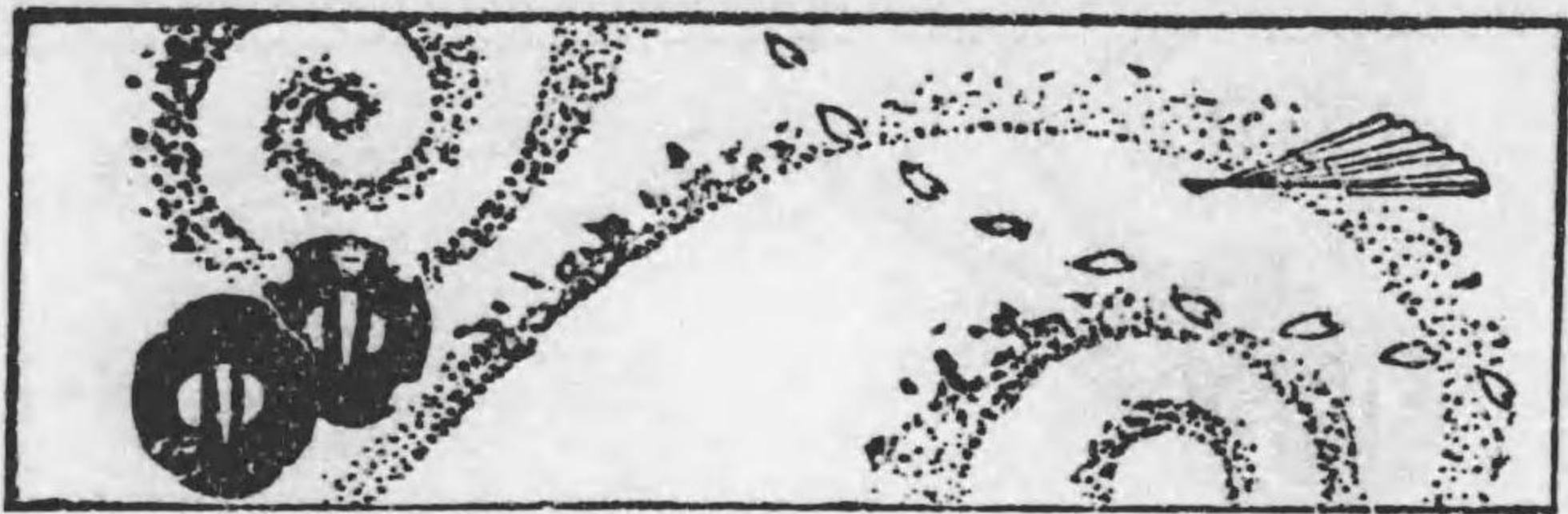
は、すいていたすさうにござるが、いかにしても生れついで、小音に御座るとこたへられた。

○ある夫婦かけむかひに住ひける人のかたへ、盗人しのび入り、よひからえんの下にかくれぬける、夜半の比せどの戸に風あたりて、ふうとなりたるを、ていしゆ聞、女房に、今のはそなたのとりはづしかといへば、はてわけもない、わしがいつそんな事したこともないにと、大きにはらたてければ、ていしゆてもちあしく、そんならぬす人めがな、どこぞにゐてこきをつたものであらうといへば、えんの下から盗人其まゝそつと出、これはめいわくて御座るといふた、○さる人いひけるはさせるのがんくびをつぶしてせにするは、む





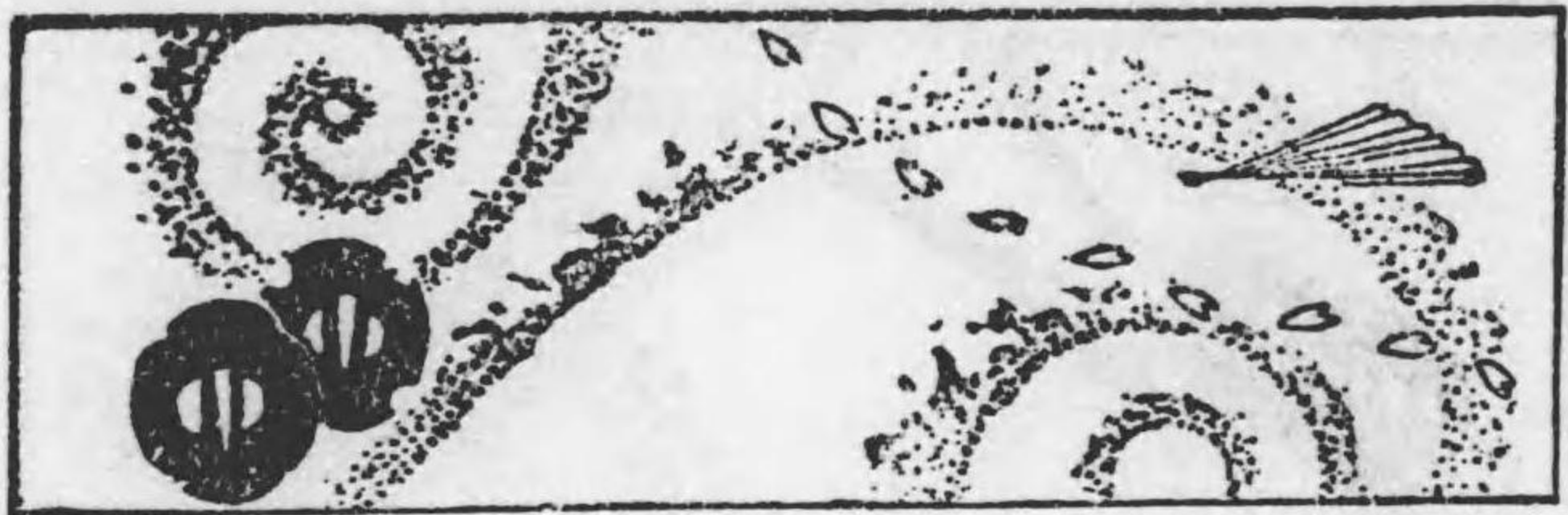
りな事ことじやといへば、友ともだちがいふは、させるのぜに、なるはあま
りむりでもない、せつたさへ長刀ながやになるはさて、
○或人あるひとの家來けらいに正右衛門しょうえもんといふ者ありしに、またその、ち抱かかられし
ものも、名なは何なんといふそと、ひ申まをされけるに、庄右衛門しょうえもんと申まをす
いふ、はじめからつとめるものに其名そのなあれば、名なをかへよとあれば、
私わたくしの名なはちとやうすある名なにて、かへ申まを事は成申なりまをさす候さう、御家おいえに
とめ申まをからは、此名このなをかへねばなりませぬなら、くるしう御座ござりま
せぬ、御おんいとまくたされといふ、此人このひと用に立者たつものなれば、いとまやる
ことはならぬ、そんなら閨かん正右衛門しょうえもんと呼よはさて、
○さる遊女ゆうにょ町へ、初はじめてて山やまぶしゆきてあそひ歸かへりしあとにて、今いまの客



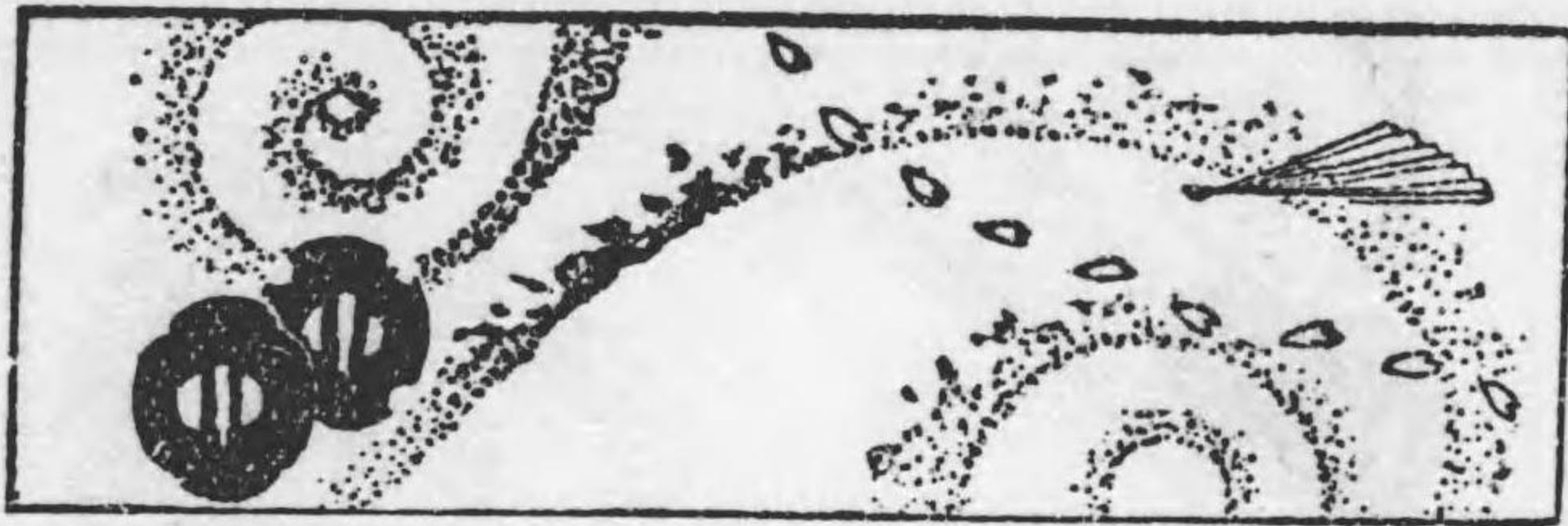
は山伏やまぶしであらうと、何なんもうわさしける、その、ちにまたかの山伏やまぶし
たりしかば、山やましゆども、おまへは山やまぶしさんかえといへば、それ
はどいつがいうた、いのりころそものといはれた、
○或あるわかき衆しゆ、二三人にさんづれにてあそびに出い、ふとしたることにてけ
んくわし出でし、つかみあひ、一人ひとりの顔かほをかきむしりければ、さんざ
ん腹はらをたて、そのかきし人ひとのものゝをわきざしにてゑぐりける、ゑぐ
られし人ひといはるゝは、かほは少すこかきたればとて、此このやうにもゝをゑ
ぐるといふ事ことがあるものかといはれければ、かほかゝれし人ひと申まをされ
けるは、もゝをゑぐりたるは、ついなほるものじやが、われらのか
ほはながびくといひける、それはあちらこちらじやといへば、はて



もくくり三ねんかき八ねんとはいはぬか、
 ○さるれきくの御侍、無筆にていろはのいの字もしり給はず、家
 来もあなじく無筆ゆゑ、式日の禮帳なども繪にてふだんつけにけ
 る、ある日のれい帳に、さくらの枝にむすび文一つ、松の木に田が
 へす鉄一挺、二王にけんもたせたる繪あり、主人帳をくり返し見て、
 櫻之丞の御出か、松野作庵ひさくにてわせた、此一人どうもよめぬ
 とけらいにとはれければ、りきのけんもつ様で御座りますと申す、今
 から此やうなあて字をかくな、ふどう院にまぎれるぞといはれた。
 ○あるちんばなる人、夜咄にゆき、一ばいきげんの歸るさに、いけ
 もせぬ半太夫ぶしなどかたりて歸らるゝ、あとよりゆく人ほめらる



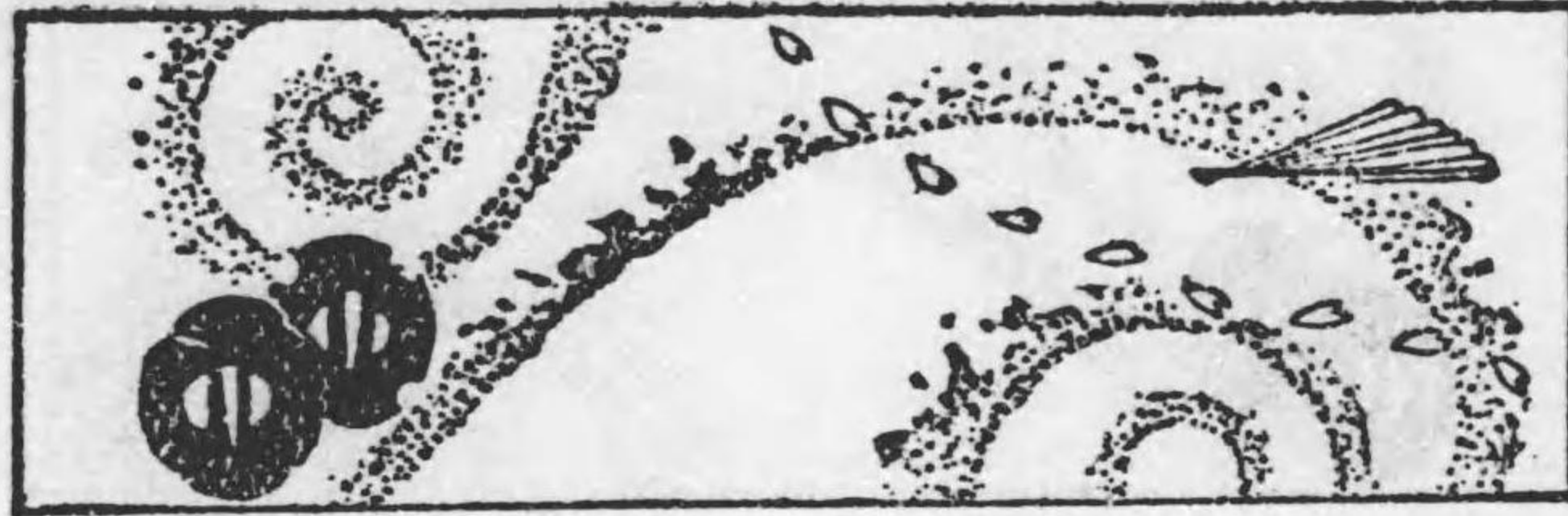
るは、ようくひいたりかたつたりとほめた、
 ○去明神様へ、地鎮の後、ほうくより湯をあげて氏子とも毎日参
 詣いたしける、ある時ふしぎや此明神様の、戸帳も御簾もぐわらり
 とひらき、明神出現し給ふ、氏子どもこはありがたし、さだめて
 よろしき御たくせんあらんと、皆くしつくと申て、かうべをさ
 げておければ、明神様仰らるゝは、みなくさわぐな、此ほどは
 あまり方々からゆをたくさんにくれるゆゑ、小便しに出とおつしや
 つた、
 ○さる侍衆のかたへ出入の者まゐり、久しう御見まひも申さず、御
 ぶさたいたしました、御袋様には、御さげんよく御座候やとたづねけ



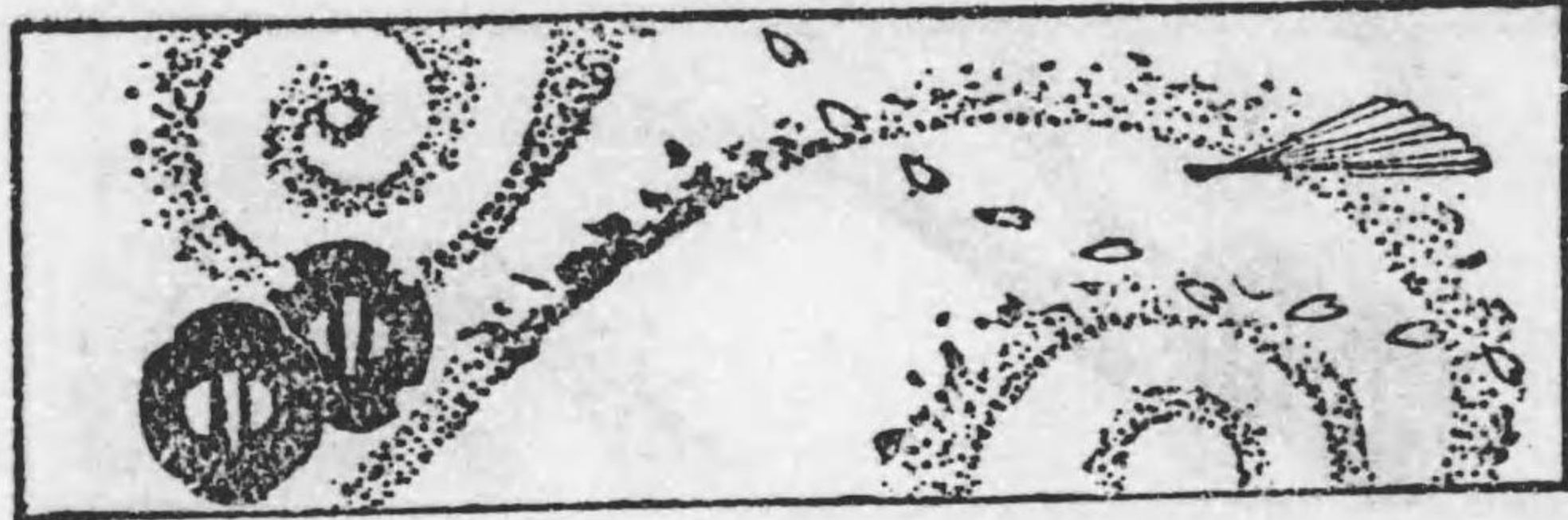
れば、さふらひことの外はらを立て、おのれはにくいことをぬかす、
 かんにならぬといはれければ、出入の者おどろきける、おのれみ
 が母を御袋とは何事ぞ、みが母がおふくろなら、おのれが母はだん
 ぶくろよといはれた、
 ○さるやつこども、ふとしたる事よりいひあがり、たがひにぬきあ
 ひ、一人はおとがいをとおとされ、また一人はきびすをきりおとされ
 たがひに手をあひし折から、辻番衆たち出、兩方ともにしづめられ
 ければ、ぜひなくとどまり、せんかたなく、せめて此きりおとされ
 しをひろひ歸りて、つぎ申やうに養生せんとおもひ、兩人ながらた
 がひに此心にてひろひかへりける、それより外科本道にかゝりけれ



ば、つぎたる所もさつそくいえて、もとのごとくなほりけるが、ふ
 しぎやなほりたるとおもへば、一人のきびすにはひげがはへ、また
 一人のおとがいには、冬になればあかがりがされる、よくくおも
 へば、いそがしまぎれに、とりかへりしゆゑとり違へたものである、
 さてくおとがいときびすは、よくにたものじや、
 ○さる町人衆二三人つれだち、近所へ咄にゆかれ、ていしゆともく
 あそびるけるが、少あひだありて、勝手より、どなたもおしやうじ
 んは御座りませぬかとふ、いやたれもしやうじんはなきと申さる
 る、ていしゆも何ぞ夜食かな出すものであるとおもひて、いよく心
 よくはなしてゐられけれども、もはや四つにもすぎけれども、何も



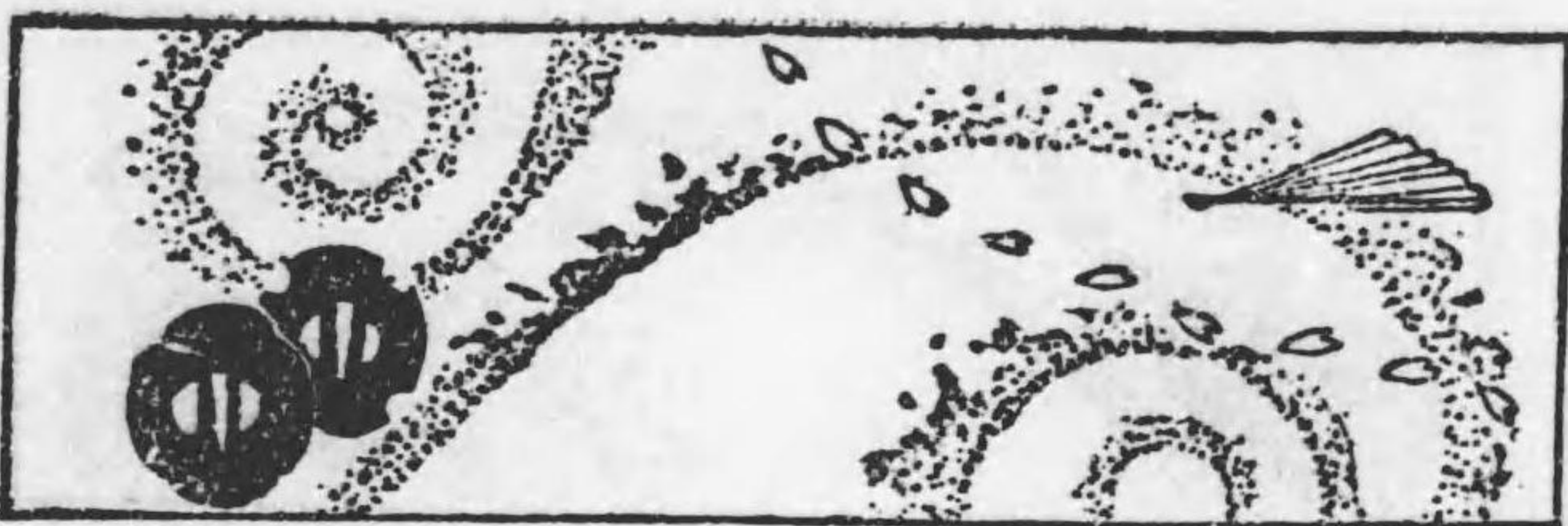
持出るていもなく、客も亭主もふしぎにおもひおけるが、餘におそ
 きゆゑ、ていしゆかつてへ見に入られけれども、何をこしらへるて
 いもなし、長吉をよび、何ぞこしらへたらはやく出と申されるれば、
 いや何もこしらへはいたしませぬといふ、そんならなぜさき程精進
 はないかとたづねには出たと申されければ、それは茶びしやくの柄
 があれましたさかい、貝じやくしておちやをくみましたといふた、
 ○比叡山の僧二人、地震にちどろき山のうへへあがりけれども、
 山の上もことの外ゆりけるゆゑに、一人の小僧いひけるは、扱も是
 ほどたふとい山なれども、ぢしんはぢなじ事じやといへば、今一人
 の小僧申けるは、すてに實語教にある、なんとあるといへば、山た



かきがゆゑにたつとからずとあるはさて、

○或田舎の庄屋殿の一番子、はじめて花の都へのぼりしが、なまじ
 いに一門は、みな京のれきくの町人なれば、其知音の方へ振舞に
 ゆきけるに、酒とりまへになりて、ひやし物出ける、その中にはす
 のわぎりあり、それをかのむすこふしぎさうにまもりおけるにより、
 つれだちたる男氣のどくがり、小聲にて、あれははすといふ物じや
 といひ聞せば、成程私もはすは知ていますが、あなをようあけた
 ものじやとやられた、

○ある所に夜半過に盗人一人ゆきて、見世の下をごとく掘りわけ
 る、亭主聞つけ、そのまゝ火をもちてゆきて見れば、見世の下から



手を出し、内のくろくをはづさんとしける、ていしゆやがてそのてをとらまへ、物にくくりつけ、さてくにくきやつかな、おのれをころしやうがあるといはれければ、盗人めいわくがり、戸ごしに色くわびことすれども、なかく聞かれぬところへ、ていしゆのおふくろさつけ給ひ、もつともにくさはいはうやうはなけれども、何もえとりもせず、そのうへあすは大事のほとけの日じやに、せひくかんになしてやつてたもといはれければ、親のわびことなれば、せひなくかんになするとあれば、あふくろあくよりおあし二百文もて出、くくりつけて置し手に、ぎらせ、盗人よよくさけ、あすはほとけの日じやによつて、おれがわびことをしてゆるしてもらうた、す



ぎはひこそ、かならずく是にこりてぬすみやめい、此錢をもとてにして、菜買りなりともせよといはれければ、ぬす人もなみだをながし、いのちを御たすけ下されますうへに、鳥目までを御意にかげられます、どうも御禮の申様も御座りませぬ、かやうなされてくださりますれば、かさねてまわりにくうござると一禮をいうていんだ、

○さるかごかき、富限になり、れさく町人衆とおなじやうに、茶の湯の會にゆかれしが、床に探幽の筆の富士の懸物かけてありしを見て、扱もく見事な出来、繪さうに御座ります、山坂はとりわけかきにくいものじやにというてかんしんせられた、



○親子ともにつんぼうありけるが、元朝にむかひにゐらるゝ源兵衛といふ人、ものもう源兵衛で御座ります、御禮申ますといはれければ、ちやぢかたじけなう御座りますといはれ、今のはむかひの源兵衛殿ではなかつたかといはるれば、むすこちやぢは何をいはいはしやる、いまのはむかひの源兵衛殿じゃあつたにといへば、ちやぢおれは向の源兵衛殿かともうたといはれた、

○去所の辻に、俵三びやう捨てあり、町の衆立寄、ふしぎにおもひ、いろ／＼とせんぎすれどもしれず、とかく中は何じや、あけて見よと、口あけてみれば茶かすなり、是は／＼ちやかしをつたといひさま、あくり状をひらき見れば、ひろたやつめは、をかしかると書て



あつた、

○雪降寒き折ふし、主人家來をよび、我はそんじよそこへいつてこいと、道の二三里も有所へやるとて、扱もさついで雪じや、寒い、酒のかんをせいといはるゝ、家來はいつになき旦那の心づきじやとおもひ、そのまゝかんする、もはやかんはてきたか、なるほどてきますと申せば、こゝへもてこいとて、大きなさかづきにて、二三ばいのみ、扱／＼よい氣味じや、此きあひに、はやういてこいといはれた、

○さる所に無筆な人ありけるが、ちかづきの方へ手がみをやられけるが、此さきの人も、かたのごとくの無筆なれども、返事してこさ



れける、内外の者見て、さてくがてんのいかぬ事じや、何をたがひにやられけると、ふしぎにもひけるに、だんな申つけらるゝは、ばんにはたれがおじやるはずじやほどに、何々をこしらへておけとあれば、いよくふしぎがりて、ある時旦那に問ひければ、(是をかいてやつたといはるゝ、がてんまゐりませぬと申せば、さてくこれがとてんがいかぬか、ばんにはわしやうかといふてくこれをかいてやつたれば、成ほどわしやうとて、○此ごとくにわがたしてきたといはれた、

○あるすんばくもちが、げはふにむかひいひけるは、あたまの大きなは何のとくがあるぞといへば、げはふがいふは、あたまの大きな



は、よりとも殿じやというて、人が上座へなほすといふ、きんの大きなこそ何のえきもないものじやといへば、すんばくやみがいふは、きんの大きなは水風呂へ入ときゆが多うなるというた、

○ある遠國の百姓、五六人づれにて京へのぼり、三條の宿にとまり二階座敷へあがりゐられしが、下女、水風呂へ御入なされませといふ、ついに二階へあがりしがはじめてなれば、どうしてありやうぞとあなじゐる、其中に少分別らしき人、此ちりやうをしられぬか、あれがありるやうにしてありやといひ、四つばいにしてありける、それはどうした事ぞといへば、だまりやく、おれが見ぬ事はいはぬ、さきに猫がかうしてありた、



福祿壽選

寶永五戊子正月吉日

百四十八

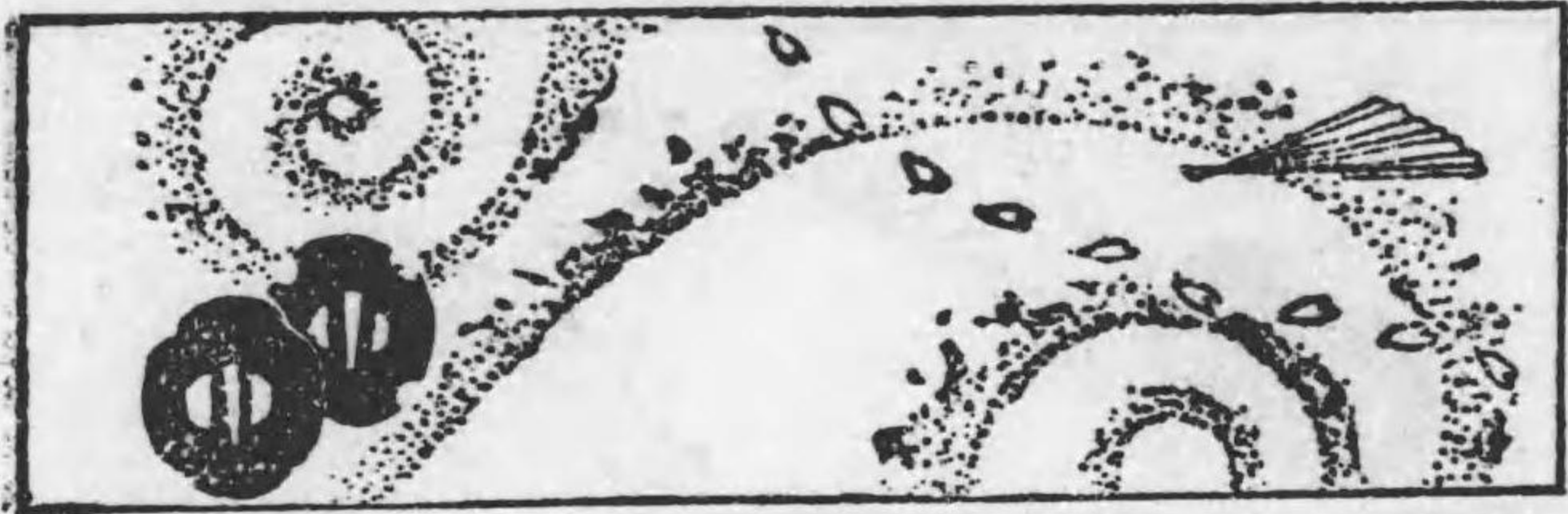
江戸本白銀町貳丁目

古河新七

京寺町五條上ル町

古河三郎兵衛

輕口福德利選



輕口福徳利選

富久徳利序

目出度千代の春、年神棚の供もの、蔵く神酒には壽命を延、屠蘇の酔には邪を除き、踏白に敵を延す、辛口に喉をならさせ、甘口に下戸を慰め、輕口には目を覺し、むだ口に夜を更す、兎角唯笑ふ門には福來ると、そのより所に樂あり、貧乏權は止にして、福徳利の口明けいざ一口づつ、

寶曆第三酉の長閑なる日

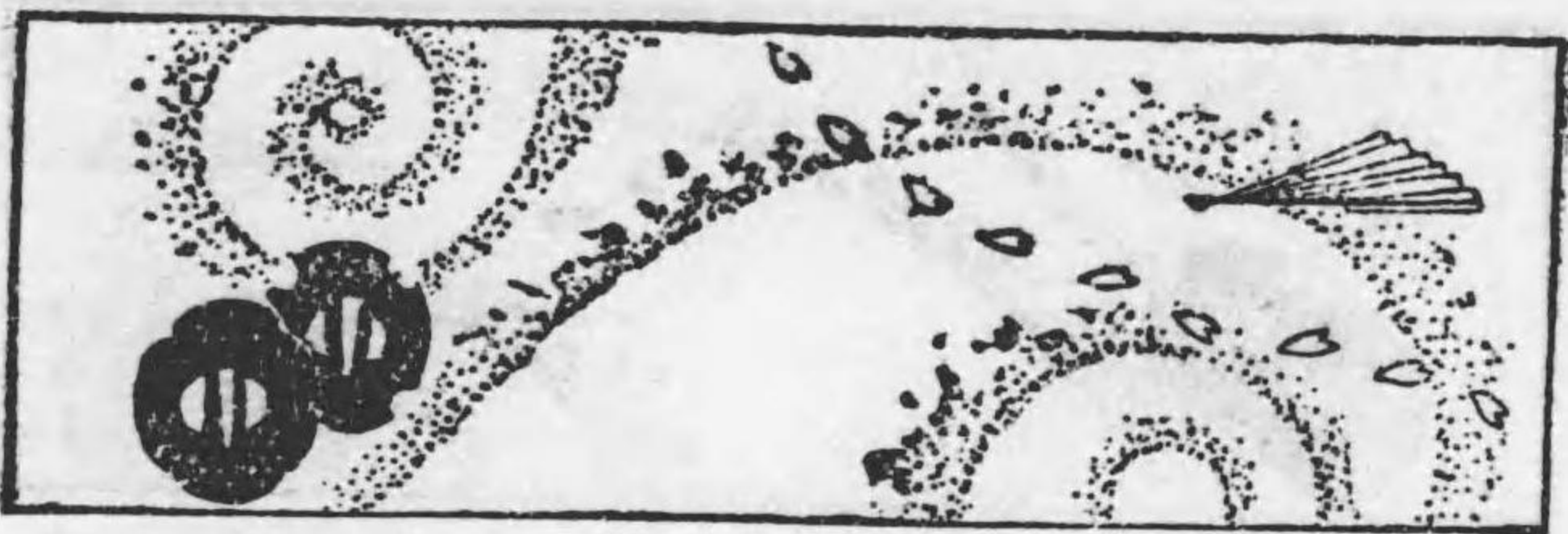
故應齋 玉 花

○かくれもない、つき米屋のそさう男、是も年始の御禮とて上下を著し、先雑煮まへにこしらをつとめんとて出けるが、いかじしたり

輕口福徳利選

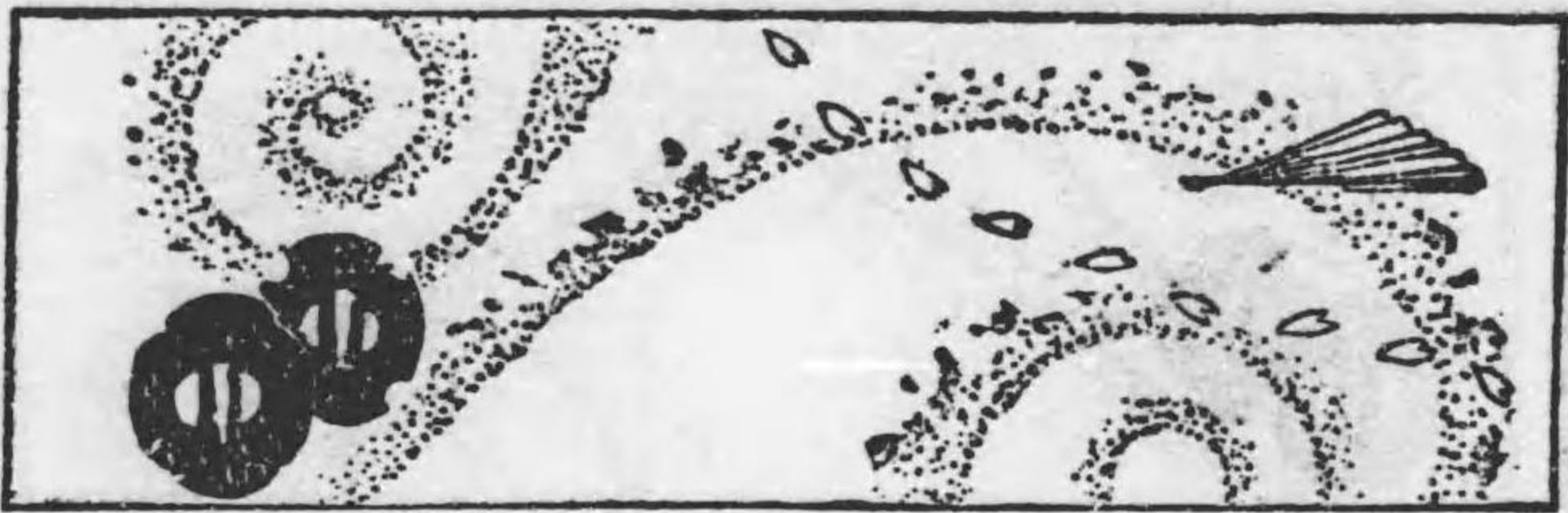
けん四五軒禮しまうてわが家の内を覗き、つき米屋俵、右衛門御禮
 申入れますといひけるにぞ、女房も肝をけし、是内の人、こゝはそ
 なたの家でござる、あまりそさうなゆゑ家をも見ちがへ玉ふかとい
 へば、俵右衛門手をついて、いさく御盃ははるながに仕りませう
 とて出られた、

○黒羽二重に毛どろめんの羽織、茶宇島のこりくしたるはかまに、
 金作りの大小、その外いんろうさんちやく足袋雪駄までひとつとし
 てあだなはなく、出立たるさふらひ、伊勢丁のある米やへ來りこめ
 とゝのへん由いへば、手代たち出、先ちあがりなされませ、それお茶
 よたばこよなど、あさなひ口にいひちらし、わりひさにもみてして、



お米はいかやうなるが御望にござりますといふ、さふらひ聞、とかく
 ふえて甘のが買たい、手代聞、ふえてうまいのは白河がようござりま
 すといへば、しからばそれをとゝのよう程に、そのひやめしがあら
 ば、一はい味て見たいの、

○是もなつの事なるに、井の水ことの外かはきつて、みな人のな
 んぎこゝにきはまり、われさきにはしりまはり、つてをもとめて
 水をもらひけり、折ふし、さるおろかなるをとこ、わが前の井戸へ
 六味ちわう丸をひた物なげこみけるを何のためそと、ひければ、か
 のをとこ答へて、されば、この地黄丸は井氣を熾にして水をますと
 聞しゆゑ、けさからひたものもらひますが、いまだげんが見えませ



ぬといはれた。

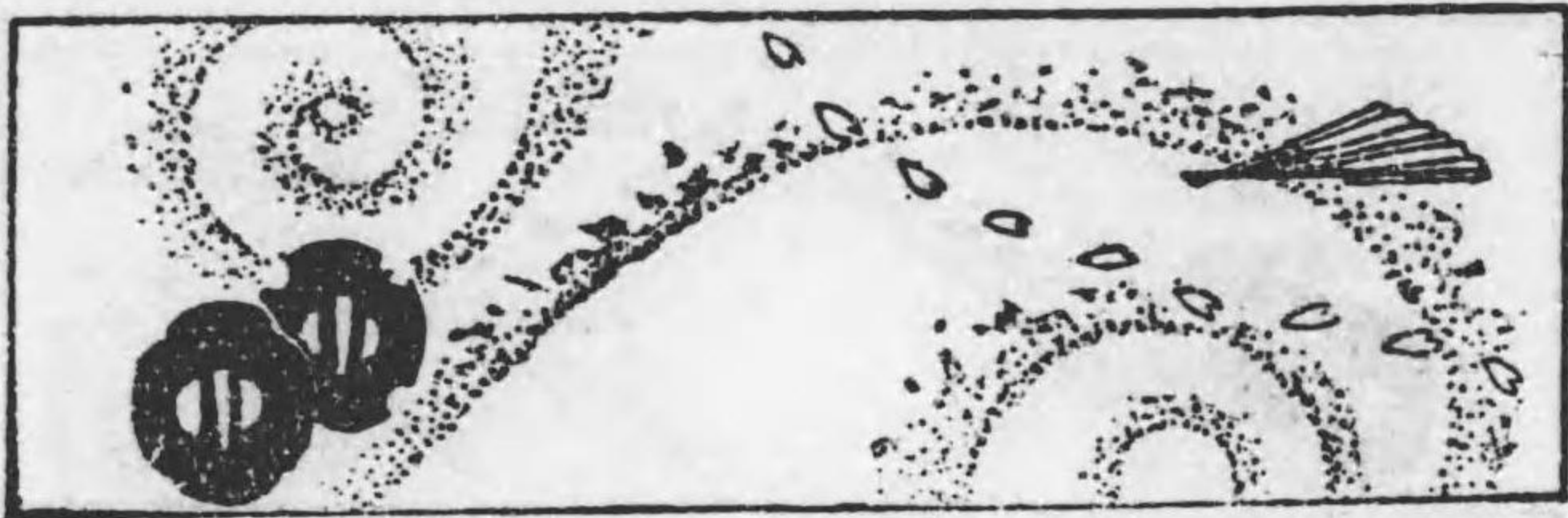
○碁をうちけるに、そばより、何もしらぬをとこ見て、それあぶな
い〜といふを、どこがあぶなうござるといひければ、いや此隅の
石が、したへちさうてあぶなうござると。

○兩國はしのほとりに、よなく、狐ばけて、ゆきかふ人をちびや
かしけるを、かみゆひどこのわかいものどもにくきことにちもひ、
或夜二三人いひ合せてかのきつねをとらへ、ちのれこのあひだ人を
ばかして迷惑する、にくいやつのと、いそぎ縛りからげ、打てよた
たけなんどさま〜にてうちやくし、以後をたしなめとてすてに、
がさんとせしが、ちもへば〜、た〜にがすも無念なれとて、やが



て、とうけんびたひにぬきあげて追ひはなしけり、それより四五日す
ぎてある夜、かみゆひ床の戸をた〜くものあり、誰そと〜へば、い
やわたくしは先日せんじつのきつねでござります、御かげにてひたひは抜い
てもらひましたが、こよひまた御隙ごひまにござりますなら、何とぞえり
をぬいてくだされませ。

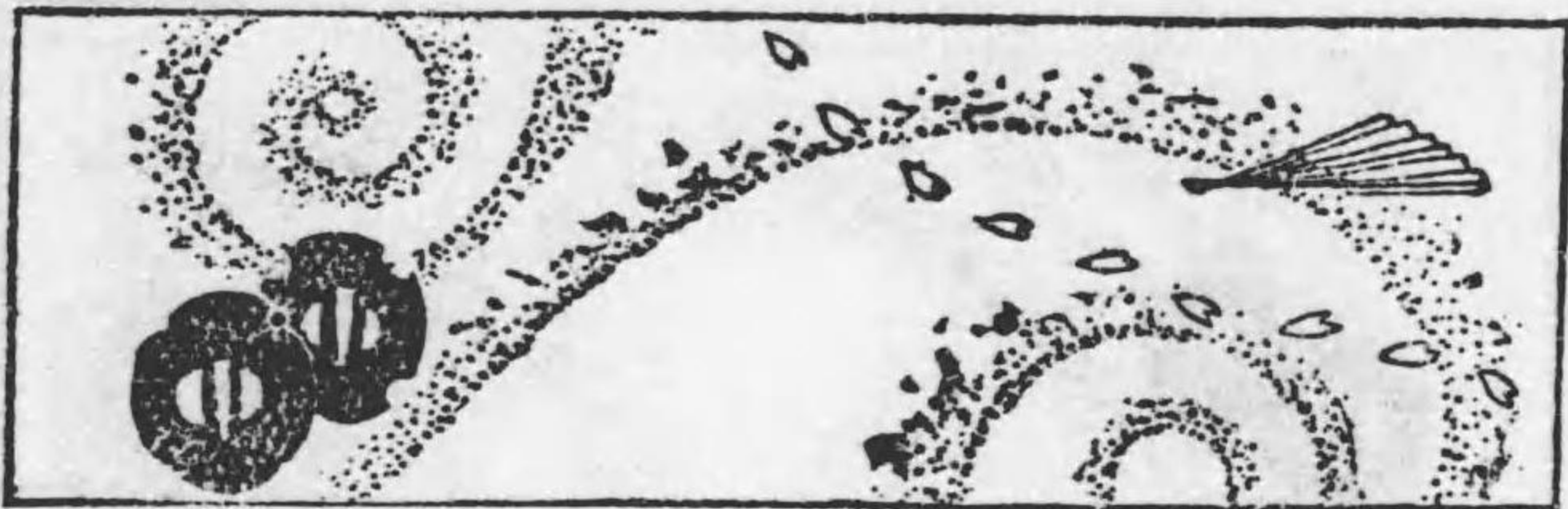
○小ぬすみの源六といふをとこ、品川のいろぢややにとまり、あさ
のなごりのかへるさに、そつとからかねのたばこぼんをぬすみ、せ
なかにかくして出けるを女はやくも見つけて、そのま〜かけいで、
これかへらんすかとせなかをた〜けば、ぐわんとなる、こはなんて
ごんすといはれて、源六はつと思ひながら、そしらぬふりにて、い



やどらのまねしてあそぶ。

○さんく、痔のおこりけるまゝ、いしやをよびてやうすをかたりみやくなどゝらせけるに、寸鐵とくとかんがへ、これは大切のちてござるによつて、わたくしのくすりはえしんぜますまいといふを、なにとぞ御慈悲にたのみあげますと、やうく願ひてくすりをもらひぬ、さて此ちはなにと申すなれば、かほど大切にはござるといふ、寸鐵さゝさればこのちはなんぼでもなほらぬ、してのやまぢといふてござる。

○徳入とかやはいかいずきの樂ばうず、ある夜、おなじ友二人とつれだちて會よりかへりけるが、ひとりのともがいふやう、わたくし



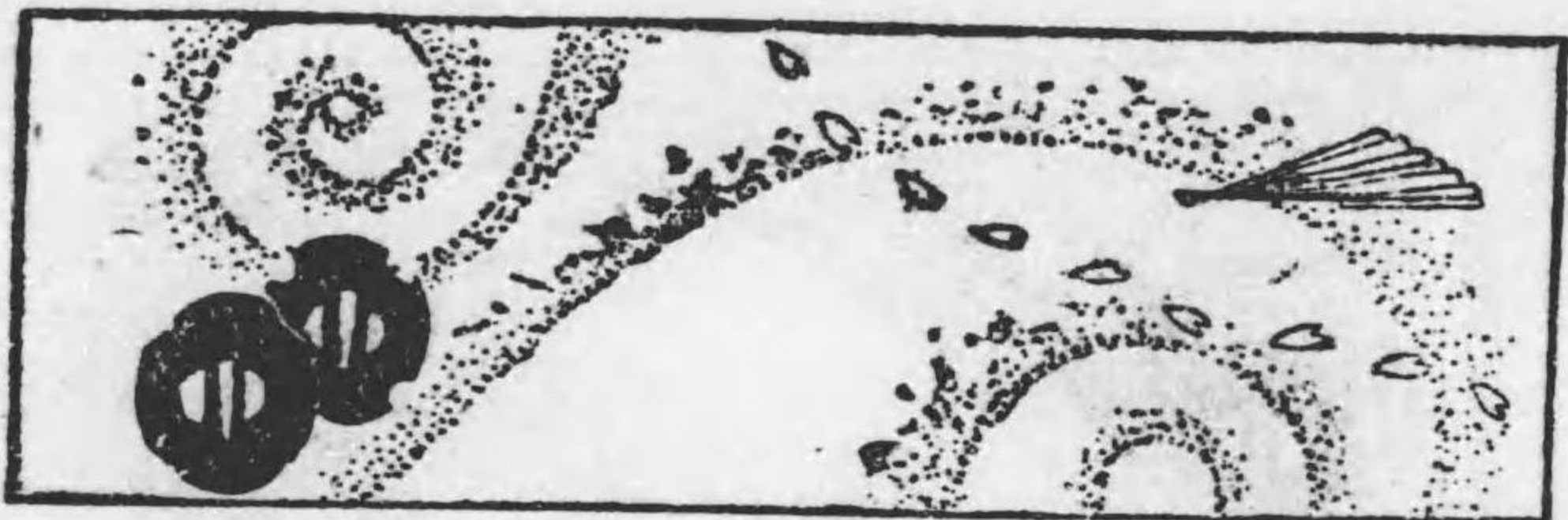
が宅はこれてござる、かさねて御目にかゝらうといと申してわかれぬ、徳入みて、いま一人のつれにむかひ、あいつは久しいすきなれども、いかい下手てござるのといへば、つれもさやうてござるなどあいさつするうち、いや、わたくし宿はこれてござる、そのうちといてこれもわかれぬ、いまは徳入ひとりになりて下人にいふやう、いまのやつもひさしい下手じゃが、三人のうちにてはいづれが上手じゃとあもふぞ、六介さゝ、わたくしはなにも存じませぬが、とかく人より跡にのこつた御かたが御上手てござりませう。

○無筆なをとこ状を五つ六つことづかりけるが、名がきが知れぬゆゑ、どの状がいづちへゆくやらしれぬと、てんほのかわと思ひ、ま





づ近所きんじよからしまはんとて、三丁目ちやうの伊豫いよやへしかゝり、あんないこ
 ひて狀じやうひとつとりいだし、これは京都きやうとよりことづかりましたとてわ
 たしけるに、とりつぎのをとて見て、これは名ながさがちがひましたと
 かへす、またひとつ出しければ、これもそてないとかへし、とり
 つぎいふやう、こなたは無筆むひつそうな、その狀じやうどもみないだしてみせ
 たまへといへば、かの無筆むひつかしらそふり、狀じやうをみな出ださしておいて、
 なかてよきのをよりどりにせうといふ事ことか、それはなりませぬく、
 ○三月がつ四日かのなみだ雨あめ、一年中いちねんしかりとほした三介すけも、ひつにあし
 だをからげつけ、破やぶれすげがさに古手ふるてぬぐひ、されわらじまでとり
 そろへ、なにひとつわすれもせず、一しよたい脊中せなかつにおひ、もしお



かみ様さま、もうやどへさがります。いましては、何かと慮外りごうがいばかり
 申まをあげました、せつかく御ごさげんようござりませと、ひごろとはち
 がうてしほくとしたる口上くちやうに、さすがなじみの事こととてあはれにか
 なしく、ずいぶんまめてゐよ、そのうちとほらばよるやうになど、幸さい
 花はな一枝いっし雨あめをおびたる女房にようぼうが目めつき、なみだもろいと跡あとにては大おほわら
 ひ、ほどなくかはりききたつるに、さるところより目見めみえをとこさ
 たるを立ちいて見ればひげを自慢じまんの大おほやつこ、爰こゝをはれと出いたち、
 あたりをにらんでひかへたり、そちは奉公人ほうこうにんか、名なはなにといふ
 そ、門内もんないと申まをらするといふ、旦那だんなおどけて、なぜ門内もんないといふとい
 へば、やつこうろたへ返事へんじせぬを、いやさ、どうして門内もんないじやとい

はれて、やつこ、じうめむつくりながら、こんのだいなしてごわり
ます、

○市助仁介三四郎同行三人のぬけ参り、もらひくの永道中、やう
やく日をかさねていせのくした川につきたり、をりふし、水かさま
されりと見えて、ささへわたれる人をみれば、肩のほとりまで水つ
きけり、市助いふやう、皆あれをみよ、おとなさへあのとほりなれ
ば、ましてわれらはわたられまい、いかせんきのどくやといふを、
仁介きゝて、しや、なにほどの事あらん、大神宮の御利生にまかせ、
いのちをすて、越すへきに、などか渉らておくべきかと、いさみす
すむにふたりの子ども、いましてしほれし心より、俄にいさむく



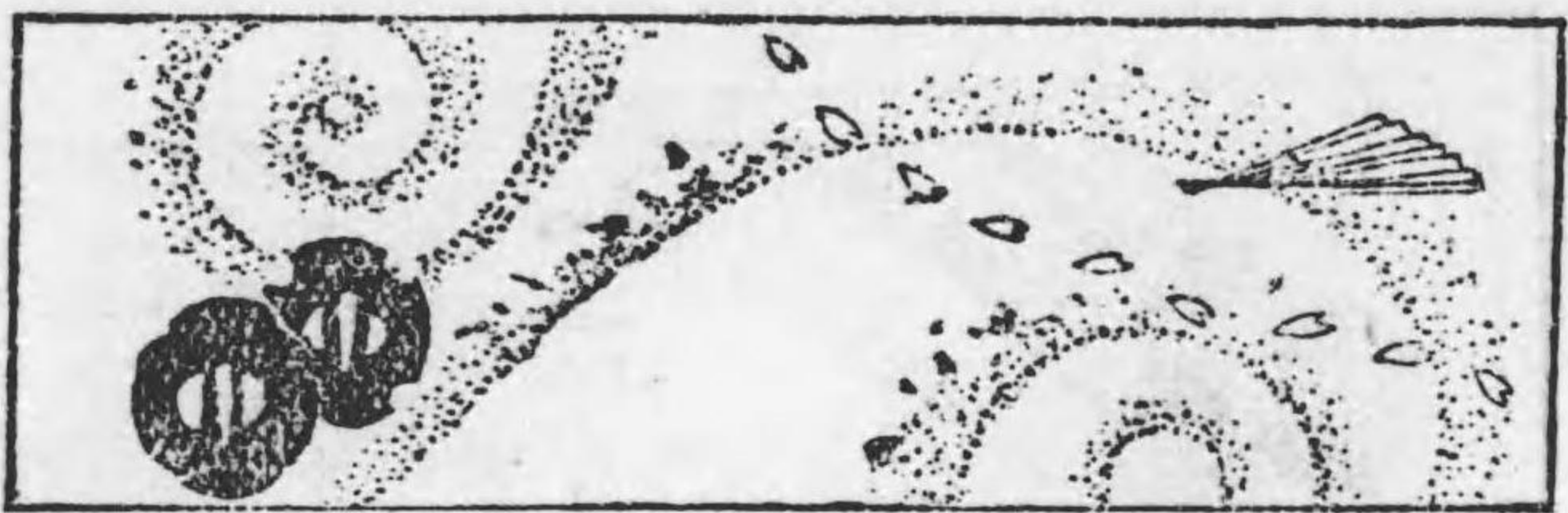
した川、三人手に手をとりにくみて、さんぶと入てこしけるに、深し
と思ふところもなく、やすくとむかひのきしにつきければ、三人
めとめを見あはせて、さてく神りよの御めぐみ、一あら有がたやか
たじけなやとらはいはいし、しばらくやすらひるたりしに、さいぜんわ
たりし人を見れば、いまだ川の中にあしが、やうくとしてあが
るをみるに、ふかきこそ道理、わざりてあつた、

○あるとし、やくびやうはやりて諸人なやみけるま、家くに山
伏をたのみ、やくびやうよけのまとうをして、ふだまもりをもらひ、
かどくにはりて、厄神をふせぎけり、それを、さるしはき男、う
らやましくおもひけれど、もとよりまとうをたのまは禮銀やらでは





すむまいが、まもりはほし、禮銀はをし、いかせんと案じけるが、しよせん人の門におしたるまもりをぬすみとり、わが家にはりてもおなじ事ならんと、そのよひそかに人の家におしてあるふだをめぐりとり、わが戸にはりておきたりしに、そのあくる朝、となりの人ふとかの戸をみれば、かしたなありとはりがみしてあり、ふしぎにもひ、急ぎていしゆをたゝきおこし、あまりこなたがあさねするゆゑ、さだめて子供のいたづらならん、戸にかきつけをしておいたはといへば、てい主あくびしながら、それはわれらが貼りたるやくびやうのまもりじやといふ、いや／＼まもりならばかしたなとかくはずはあるまいといきまくりてみければ、かのをとこきもをつぶ



しながら、ぬからぬかほにて、いや／＼それにはこゝろがある、厄じんがこれを見たらば、この家にはぬしがないと思ひ、はいるまいとてわざとかしたなありとかきました。

○とつとやまがのつち百姓、江戸けんぶつのためとて、ちいんをたづねてきたり四五日とうりうしけるに、あるとまのりやうりに、さゝえのつぼいりをしていだしけり、もとより山家そだちなれば、さゝえを見しらず、たゞ食ふものところをえて、やがてふたもとらずにかじりけり、あるじをかしく、もしそれはふたをとりて、なかのみばかりくふ物よとをしへければ、いなかものおどろきさて／＼ぞんぜぬ事とて、大事の御道具に齒形をつけましたといひしもをかし、



○駕籠かごやりましよといふを、めぐろまで何ほどいへば、もうちどり
 てやりましよといふ、これはとりの名でくはせをるとおもひ、四十
 からまけよといへどまけず、そんなら五十からかといへば、まけま
 しよといふにぞ、やがてかごにとりのり、ゆくともなしに目黒めくろにつ
 きぬ、かごよりちりてふところをさぐるに、をりふし錢ぜになかりけれ
 ば、一二匁もんめありけるかねをとりいだし、こまどりなれどもとやりし
 かば、かごかき大おほきによろこび、これはだんな、おけつかうとは
 とりのまねをした、

○わが子の事ことといへばよねんもなきをとこ、あるときよそよりかへ
 り、さしきのかべをみれば、いろはにほへと、すみぐろにまがり



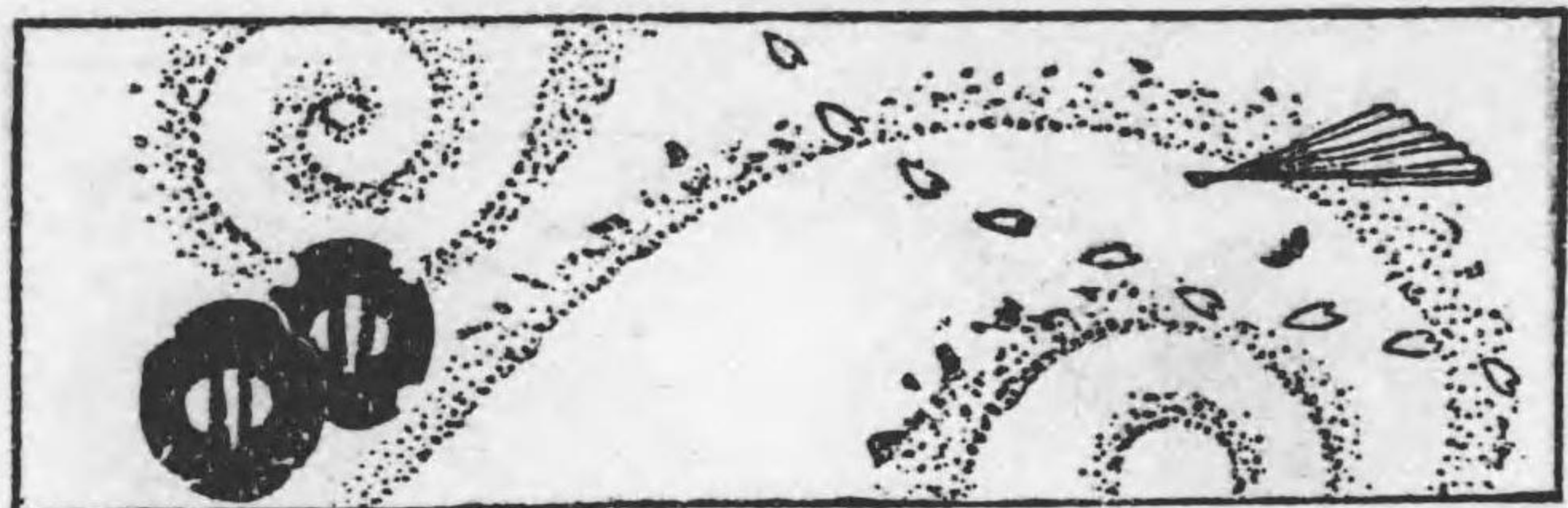
くねつた筆ふでのあとを、みるとひとしく大おほにいかり、そのまゝ市介いちすけを
 よびて、おのれ留守留守させるは何のためぞ、これ見よ、かへうちはす
 みだらけになつた、なにもものしわざなればかやうに憎にくさげな事ことは
 したぞ、まつすぐに申まをせと、ことのほかにはらたて、いふ、市いちすけ
 きよ、それはおまへの御留守御留守のうち、與太郎よたろうさまがわやくになされ
 ましたといふにぞ、たちまちさげんをなほし、さては與太郎よたろうがかい
 たか、はてさてきような手の、

○そねざき心中しんちゆうはくとうりあるさけるを、何なにものぞとやがてよん
 てみれば、なまくじらなり、これはいかにと、ひければ、くじらう
 りきよ、さればこのくじら、もりにて死しましたゆゑに、



○庚申かつしんまちとてわかきものどもあつまり、上留じやうりゆうり、せつきやう、やくしやのこはいろ、野路麻のろまのまね、かしまのことふれ、よたかの風ふうなど、さまぐのげいを上座じやうざよりじゆんのまわりにいたしけるとき、はつごに何もしらぬをとこあり、かれがばんになりければ、人々ひとびとさあく何ぞ所望しよぼうくといはれ、めいわくそうなかほつきにて、つい立ちて壁かべへひつたりとだきつきたり、人々ひとびと見て、それはなにのまねぞととふ、されば蜘蛛くまじのまねじや、

○山やまてらの小僧こぞう、入いりあひのかねつくころ、ようじありてさとへくだりけるを、かたはらに居ゐたる狐きつね、そのまゝ、てつち三助さんすけとばけてかけきたり、小僧こぞうにむかひ、もし和尚おしやうさまの、日ひくれにお小僧こぞうひとり



は心こころもとないほどに、われも共ともにあひついて行いけと仰おほせせられますゆゑまわりしといふを、小僧こぞう早くきつねとさとり、よくこそきてたまうたれとうれしさうなるかほつきして、みちく話はなしてもてゆく、小僧こぞうちとなぶりて見みんとおもひ、これ三助さんすけ、此このあいだかしたる三百文さんひゃくもんの錢ぜに今日こんにちあひすむ筈はずなるに、なぜ返かへさぬといはれて、きつねまこと、おもひ、ながくかたじけなしとところよりいだしてかへす、小僧こぞう又また昨日きのうかしたる金かね二朱にしゆ、これもたゞいまとらねばならぬと、きつね又またせひなくかへす、又また小僧こぞう、四年よねんあとにかしたる緋縮緬ひしゆめんのしたちび、これもかへせといふにぞ、さすがのきつねも呆おろれはて、これはならずとにげうせぬ、そのあくる日ひ小僧里こぞうりよりかへるに、かのきつ



ねはやくも見つけて餘の狐にむかひ、あの小僧がとほるなら、かならず／＼まゆげにつばきをぬりやといふた、

○よふけ人しづまりて、ばんしう高砂の浦をも一見せばやと存候と、大きなるこゑにてうたひけるを、をりふし番太郎ねみ／＼にばんしうといふをき／＼つけ、そのまゝ立出て見ければうたひなり、一はい食ふたとおもへどもぬからぬかほにて、又好きついでなれば小べんをいたさんと存候といふたもをかし、

○長崎へゆくふね、じゆん風にほをあげて沖をはるかにこぎいだすに、にはかにあくふうふき來りてしらなみうづをまきければ、人々大きにあはてさばき、大汗になりておせどもこげども風つよければ

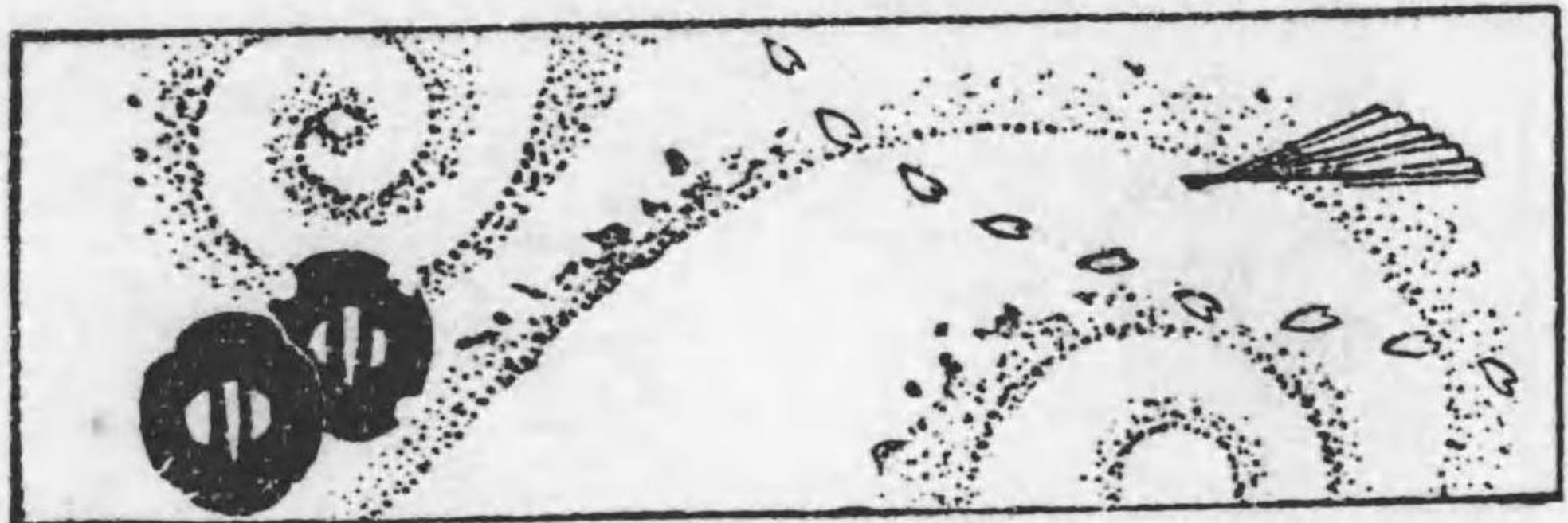


自由ならず、かぜにまかせていづくともなくながれゆき、やう／＼として一つの島につきたり、みな／＼まづふねよりあがりて、かなたこなたしまのうちを見ありさけるに、わづかなるむしのごときものいくつともなくゆき來る、なにならんとよく／＼みれば人のかたちなり、さては此しまはおとにきく小人じまなるべし、ふしぎのところへもきぬるものかなと、おの／＼かの島人を手のひらにのせて見しが、なにとこれをひとつ故郷へのみやげにせんとて、さゝえがらにいれふたをしてふねのうちに置きけり、さて風もしづかになりければみなみな船にとりのり、ふるさとさしてこぎゆくに、ひとりがいふやう、さきにとりたる島の人を見たまへ、あれも人間なれば



物ははずにはゐられまいになにぞくはせたまへといふに、人々、いかさまさうじやと、かのささえがらの蓋をとり見れば、しま人はなかりけり、ふしぎやとよくくみれども見えず、大方奥へがなゆきけるものならんとささえがらをふりて見ければ、しま人うちにてよなほしくというた、

○あないちとかやいへるさう、みちをゆくとして、ほそき溝のありしに、なにの苦もなく跨ぎこしてとほりけるを、さる人見てさてくさうといふものは勘の深いものかな、えてしては目あきもはまるみぞをもうじんの身としてよくもこえたり、いかさま勘の深いものじやといひけるを、かのあないちさいて、されば、餘り疳が深さ



に目がつぶれましたは、

○くせといふはをかきもの、何事にも手ひやうしうたねばぢかぬ男、あるとき、道にてともとちにあひ、なにかのはなしすぎて友達のないひけるは、よはさだめなき事や、隣の甚九郎、此あひだふとわづらはれしが、きのふの七つ時分つひに死なれました、といひければ、かのをそこ大きにあされたるふぜいにて、ついたるつえをもつて下されとて、ともだちにわたし、そのまゝ手をちやうとうつて、さてくそれはしやうしな事やといはれた、

○水右衛門にはあらぬ泥右衛門といふをそこ、ねこのなくまねをえてものにて、又となき上手なり、ある夜したしき友だちの所へゆき



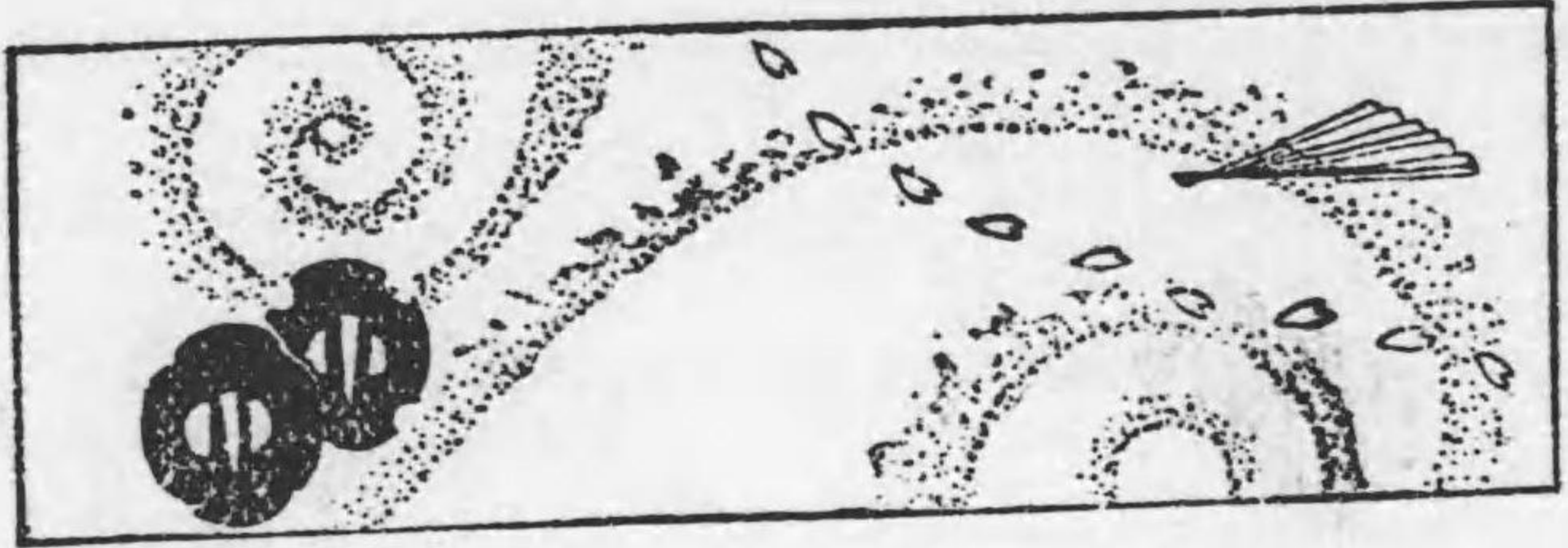
輕口福徳利邊

百七十

はなしけるに、をりふしおびたしくねずみの騒ぎけるを、ていし
 ゆ泥右衛門にむかひ、こなたの得手ものにて此ねずみを静めて下さ
 れといふを、どろゑもんやがてこゝろを猫のまねをぞしたりける、
 その鳴聲のじやうずさ、まことのねこにもたがはぬにや、一ツのね
 づみてんじやうよりばかりとちち、あへなく空しくなりけるにぞ、
 亭主も我を折り見る所に、いづくともなく猫四五ひき、一やうに上下
 をちやくしどろゑもんが前にきたり、かうべを地につけ、さてく
 お素人藝には御さどくてござりますというた、

寶曆三癸四年正月吉日

江戸日本橋通三町目



元祿時代 輕口はなし 終

輕口福徳利邊

百七十一

吉文字屋次郎兵衛

書林

小川彦九郎

大正十五年七月十四日 印刷
大正十五年七月二十日 發行

不許複製

定價壹圓四拾錢

校訂者 上田 萬年

發行者 東京市神田區錦町一丁目二番地 岩田 謙治

印刷者 東京市神田區表神保町七番地 下川 隆博

印刷所 東京市神田區表神保町七番地 平凡社

發行所

東京市神田區錦町一丁目二番地
振替東京五六一四二番

文憲堂書店

536
242

2年2月 / 日

中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野
中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野
中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野
中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野
中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野
中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野
中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野
中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野
中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野
中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野	中野

調査済